ペンテコステはいかにしてロサンゼルスに来たか

フランク・バートルマン
藤遥　制作

序文

この小さな本を、多くの尊い人々にささげる。その人々は著者とともに、「後の雨」が注がれた祝福の初めの日々を見て、体験する恵みにあずかった。場所は、昔の「発電所」アズサ通りミッションである。この本は、次の望みと祈りをこめて書いた。かつて私たちとともに、この祝福の「前の家」の栄光にあずかった人々が、もしあの幻を失っているなら、それがもう一度新たにされるように。また、このささやかな手段によって、それが「後の代に」語り伝えられるように。

フランク・バートルマン
カリフォルニア州ロサンゼルスにて
1925年4月

第一章　試練と祝福、リバイバルの始まり

この本の著者は、1904年12月22日、妻と二人の娘を連れて、カリフォルニア州ロサンゼルスに着いた。上の娘は三歳半だった。それまでに大陸を少しずつ渡って来ており、北部で二年間伝道したあとのことだった（それ以前のことは『鋤から説教壇へ』〔50セント〕を見ていただきたい）。

サウス・メイン通り227番地のペニエル・ミッションに一晩泊まったあと、テンプル通り1055番地の友人から、家具のない二階の二部屋を借りた。暖房はなかった。お金はほとんどなかった。家具をいくらか手に入れ、庭に張った天幕の下で煮炊きをして食べた。寒くて雨が多く、ずいぶん苦しんだ。下の子が病気になったが、神はいのちを取らずにおいてくださった。そのころ、収穫は多いが働き人は少なかった。伝道の働きは周りにいくらでもあった。問題は、私たちの必要がどうやって満たされるかだった。

路傍集会を始めたが、すぐに警官に止められた。許可を取っていなかったのだ。それで、すでにあるミッションの働きに加わった。毎晩どこかの集会に出て奉仕し、昼は一人一人を訪ねて伝道した。収入はなく、信仰によって暮らした。1893年に回心し、まもなく説教するように召されてから、私はおおむねそのやり方で主に仕えてきた。妻も同じ心だった。

12月31日、ロサンゼルスに来てから手にしたのは、わずか50セントだった。私たちは行き詰まった。私は子供のころから体が弱かった。そのころ、日記にこう書いた。「私の体はかなり弱い。だが、自分の働きを終えるまでは生きられると信じている。困難な所へ行きたがる者はほとんどいない。しかし、私の働きは、ほかの人が行こうとしない所へ行くことだ。強い者が必要とされる働きをさせるのに、神は、天のほかに生きる目当てを持たない者しか得られないようだ。主のご用のために使い果たされるのはうれしい。さびついて朽ちるよりは、すり切れて終わりたい。悪魔のために太るよりは、必要とあれば、神のために飢えたい」。私の献身の心は、おおよそこういうものだった。

1月2日、ボイル・ハイツのメソジスト監督教会の終日集会で、あかしをし、手伝いをした。電車賃がないので、歩いて行った。ひどく疲れたので、帰りの電車賃を主に求めると、歩道に5セント玉が落ちていた。私は電車に乗って帰った。

「燃える柴」の人々が実権を握っていた五番街ミッションで説教した。形式主義と狂信のあいだの中道を勧めると、神は私に尊い油を注いでくださった。彼らは常軌を逸しつつあった。イエスは「ふたりの強盗」のあいだで十字架につけられた。悪魔は働きをまん中から裂き、中心を持ち去って殻だけを残す。こうして聖徒たちを両極端に追いやり、全体を滅ぼしてしまう。私たちは極端に走りやすい者なのだ。

上の子の小さなエステルがひきつけを起こし、1月7日午前4時、イエスのもとへ去って行った。生まれたときからとても弱く、一生のあいだひどく苦しんだ子だった。今度は、神がこの子を取ろうとしておられるように思われた。私は、この子があれほどの苦しみから解かれるようにと祈らずにはいられなかった。自分の祈りで娘を引き止め、その苦しみを長引かせているように感じた。神はこの子を望んでおられたが、私から引きはがそうとはなさらなかった。神は私に、この子を手放す心を与え、それから取って行かれた。娘はそれ以上もがくこともなく、まもなく栄光の世界に移って行った。その朝、意識のある娘に最後の口づけをしたが、それが最後になるとは思いもしなかった。幼い子らは、こんなにもたやすく私たちの手から抜けて行ってしまう。子供がそばにいるうちに、その時を大切にしよう。子供には優しく接してほしい。どんなによくても、子供にとって人生は十分につらいものだ。失ってから悔やんでも、遅すぎるかもしれない。子供の霊にとって、この世界はあまりにも大きく、恐ろしい悪の力に満ちている。できるかぎり子供を守り、助けなければならない。小さなエステルの霊が去って行こうとしているとき、妻は、同じ家に住むまだ救われていない女性に、神と正

しい関係に入るよう懇願した。それほど大きな恵みが妻に与えられていたのだ。私たちは、自分たちの小さな家族が死によって欠けることなどないようにと、甘い望みを抱いていた。しかし、主がいちばんよくご存じだった。

そのときに書いた日記から、次のところを写しておく。「小さなエステルは今朝早く、私たちのもとを抜け出して、イエスのところへ行った。御使たちが呼び、娘は迎えに出て行った。御使たちは娘を連れ去り、私たちはさびしい心で残された。ああ、娘がいなくなって、なんと大きな穴があいたことか。しかし私たちは、望みを持たない人々のように悲しみはしない。娘はとこしえに安全だ。冷たい世から、苦しみの一生から救われたのだ。この世の長い旅路を行くには、娘はあまりにも弱かった。それで、主はその旅を免じてくださったのだ。

娘は、だれよりも悪を知らなかった。人生の大きな試練は、娘にとってはもう過ぎた。別れの悲しみを味わうことなく、私たちより先に行ったのだ。娘は無事に逃れた。私たちは、なおもがきながら進まなければならない。娘の働きは、人生のすずしい朝のうちに終わった。旅の暑さを免れて、家に帰ったのだ。御使たちは、私たちよりもはるかによく娘の世話をしてくれるだろう。娘は、思いも及ばないほど幸せになるだろう。娘のためを思えば、呼び戻せるとしても、呼び戻しはしない。だから、栄光の復活を固く信じて、娘のからだを葬る。いつの日か、栄光を受けた娘の霊が、天の至福の喜びに輝き、うっとりとして、『美しの門』で私たちを迎えてくれるだろう。その日が遠くないことを信じている」。

小さなエステルは、まさに「朝顔」だった。それは娘の好きな花だった。埋葬を待って棺に横たわる娘の胸に、私はそっと朝顔を一輪置いた。しかし娘は「神と御使たちのいる所」へ行ってしまった。もう世に疲れることはない。わずかなあいだしかいなかったし、別れのときには私たちの胸を引き裂いたが、それでも娘が来てくれたことがうれしかった。天に魂がまた一つ増えた。イエスが来られる前に私たちも召されるなら、悲しむのは、あとに残して行く人々のことだけだ。先に行ったすべての人々のことは喜ぶだろう。愛する者がいなくてさびしいのは、この地上でだけだ。天の清らかな調べをひとふしでも聞くことができたら、もう二度と地上の音では満足できなくなるだろう。「少し開いた門」から、去って行った愛する者たちをひと目でも見ることができたら、地上はもう私たちを引き止めておけないだろう。私たちは、物事を天の側から見なければならない。地上の音も霊も、あまりに粗く、むごい。天はすべてが愛と、喜びと、平安と、安息だ。神に感謝！　そこでは、悲しみも別れも、もう二度とない。空いた椅子も、墓も、棺も、そこにはもうない。

そのころ、カリフォルニア州ラマンダ・パークのメソジスト監督教会の牧師夫人フランブズ姉妹が、次の実話を聞かせてくれた。五十年以上前に、オハイオ州コロンバスの郊外で起こったことだ。すばらしい聖徒で、その場に居合わせた年老いたメリンジャーおばさんが、フランブズ姉妹に何度もこの話をしたという。貧しく名もない一家に、十歳の小さな娘がいた。その子は前から、神のことについて年のわりに早熟だった。その子がいま、死にかけていた。メリンジャーおばさんはほかの人々とともに、その子の最期を見守るために集まっていた。まもなく、その子は何かに聞き入るようにして言った。「聞いて！　聞いて！」人々にはまだ何も聞こえなかった。その子の耳は、すでに地上の耳の及ばないところまで開かれていたのだ。しかし、まもなく人々にも、遠くから聞こえてくる、うっとりするような音楽の調べが聞こえはじめた。明らかにこの世のものではなかった。それは見る見る近づいて、はっきり聞こえるようになり、ついに人々の集まっている家の真上で、しばらくやんだ。その子の顔は、栄光の光輪そのもので輝いた。神の臨在が部屋に満ちると、人々は、天の者たちの一団が自分たちを取り囲んでいることを悟った。御使たちの翼のすれ合う音が聞こえるかと思われたとき、その小さな子の霊は、この上ない喜びに包まれて、土の宮から出て行った。天の音楽がまた始まり、やがて遠くへ消えて行った。御使の一団は天の都へ帰って行き、小さな子の霊も一緒に去って行ったのだ。「来たれ、御使の一団よ、来たりてわが周りに立て。ああ、雪の翼にわれを乗せ、とこしえのふるさとへ運び行け」。

ジョン・ウェスレーの日記の1782年3月29日の項に、次の記事がある。「受難日だったので、その日の礼拝を手伝うためにマンスフィールドに来た。千三百人ほどの人々に聖餐を授けていたとき、低く、柔らかく、おごそかな音が聞こえた。ちょうど風で鳴る竪琴のような音だった。それは五、六分続き、多くの人が

心を動かされて、涙をこらえられなかった。それから、だんだんに消えて行った」。明らかに、御使の聖歌隊が礼拝に加わっていたのだ。

エステルが死んだ次の日、ファーガソン姉妹が私たちを慰めるためにペニエル・ミッションから来てくれた。ところが、部屋に入ったとたん、こう叫ばずにはいられなかった。「まあ、慰め主がここにおられる！」葬式のお金はなかった。しかし、ジョージ・スタッド兄弟が、エバーグリーン墓地の子供たちの区画に、安い区画を市から手に入れてくれた。娘は外国人の子供たちのあいだに葬られている。だから娘は、生きていたときと同じように、今も小さな宣教師なのだ。

私は、いとしい幼な子の地上に残ったすべてを納めた棺を、馬車の中でひざに載せて運んだ。雨がひどくて、妻は墓地へ行けなかった。こうして、暗い嵐の日に娘を葬った。雲も悲しみもない復活の朝を待つためである。その朝の空気は、どんなに清らかだろう。そのときの愛する者たちは、どんなに栄光に輝いているだろう。義の太陽が、その翼にいやす力を備えて現れるとき、すべての造られたものは、どんなに歌うことだろう。霊柩車も、ちゃんとした葬式もなかった。しかし神は、娘が生きていたときと同じように、備えてくださった。

私たちの小さな「王妃エステル」は、『このような時のため』に生まれてきたように思われた（エステル四・一四）。あの小さな棺のかたわらで、私は心から血を流す思いで、神のご用のために、あらためて自分の生涯をささげることを誓った。死を前にすると、永遠のことがなんと現実味を帯びることか。残りの生涯を、すべて主のために費やすと約束した。主は私と新しい契約を結んでくださった。それから私は、悲しむ暇がないように、早く奉仕の門を開いてくださいと主に願った。

小さなエステルが去ってちょうど一週間後、私はパサデナのリトル・ペニエル・ミッションで、一日二回の説教を始めた。悪魔は激しく戦った。やがて来るものを感じ取っていたに違いない。説教していると、ときどき地獄の「穴」から吹き出す熱風に打たれるように感じた。何度も気を失いそうになり、力をふりしぼってから、ようやく続けることができた。ここで、ほぼ一か月、昼と夜に説教した。ある晩、祭壇の前で、一時間近く深い静けさの時があった。主がすぐ近くに来られた。私たちは主の前で静まった。静かになるのはよいことだ。私たちはしゃべりすぎる。私たちが静かになるとき、主は「静かな細い声」で語られる。私たちの霊は落ち着きがなさすぎて、主の声が聞こえない。主は叫ばれないし、騒ぎの中に入って来られることもない。

まもなく、このミッションで、人々の心が砕かれる時が来た。人々が泣きながらカルバリへの道をたどりはじめた。ある日、パサデナへ向かう途中、悪魔が電車の運転士を感電死させようとした。トロリー・ポールも十回あまり架線から外れ、いつまでたっても着かないかと思われた。私の魂の中には、燃えるメッセージがあった。私は懸命に祈った。ようやく着いたのは、ちょうど集会でメッセージを語るのに間に合う時刻だった。大きな勝利があった。しかし悪魔は、妨げるためにできるかぎりのことをしたのだ。

力強い集会が続き、祭壇の前ではすばらしい祈りの時があった。御霊が力強く働かれた。2月6日、妻と小さなルースをパサデナのミッションの宿舎に連れて来た。戦いが始まっていた。ある敵が、ロサンゼルスのファーガソン夫妻に、集会をやめさせるよう説き伏せようとした。しかし神は、その男を流感で寝込ませた。私は、勝利が来るまでは食べも眠りもしないと決め、まる一日、断食して祈った。その晩、主が力をもって現れてくださった。主は、私を見殺しにするわけにはいかなかったのだ。神の臨在に圧倒されて、私は説教できなかった。栄光が、熱い日ざしを浴びるように私の顔に照りつけた。その晩、神は語られた。真夜中を過ぎるまで、祭壇の前は熱心に求める人々でいっぱいだった。

ここでの私の働きは、ひとまず終わったように思われた。そこで、パサデナのグローブ通り213番地に、家具のない二部屋を月5ドルで借り、ロサンゼルスから家具を運んで家族を移した。私はひどく疲れ、体はすり減っていた。それまで何年も国のあちこちで開拓伝道をしてきたために、神経はすり切れていた。私たちはいつも信仰によって働き、『そのパンは与えられ、その水は絶えることがない』を標語にしていた（イザヤ三三・一六）。お金がなかったので、しばらく仕事を探さなければならないと思われた。そのとき私は、すでに十年以上説教してきたが、まだ世の仕事にきっぱり背を向けてはいなかった。のちに主が、はっきりとそう導かれたのだが。

ペニエル・ミッションでの一か月の集会のあいだに、救われた人々もいた。しかし、いちばん大きな勝利は、そこに通っていた若者の一団が掘り起こされたことだった。何人かが、のちの奉仕のために主に召し出された。おもな者は、エドワード・ベーマー、エイミル・アレン、オービル・ティングルである。少なくともそのうちの二人は、今日のペンテコステの働きで大いに活躍している。メイミー・クレイビル姉妹もこの集会で、とくにとりなしの奉仕によって活躍した。主のえり抜きの器で、のちにペンテコステの働きでも活躍するようになった。

体はひどく弱っていたが、庭仕事の職を得た。それで食べ物がまかなえた。しばしば街頭で説教し、ミッションの手伝いをした。次の仕事は、はしごに上ってオレンジを摘むことだったが、初日の昼でやめなければならなかった。実の重さと、はしごの上で体をひねることで、腰が折れそうになった。そこが私の弱いところだった。それで、また庭仕事や垣根作りの仕事を得た。こちらはそれほどきつくなかった。ほとんど毎晩、どこかの集会で説教したり、あかしをしたりした。それが私のいのちだった。私の第一の召命は、説教することだった。

家には小さなガスこんろが一つあるだけで、それで暖房も煮炊きもしたので、寒さと雨にずいぶん苦しんだ。小さなルースが熱を出して寝込み、食べ物もほとんど尽きた。仕事はなかなかなかった。ペニエル・ミッションで説教したが、私たちの必要には触れなかった。ただ、神に味方する者には神が味方してくださるという信仰を言い表した。人々はルースのいやしのために祈ってくれた。私たちが祈っているあいだに、主は家にいるルースに触れてくださった。集会のあと、ある兄弟が5ドルを手渡してくれた。こうして、神は私に味方してくださった。

ロサンゼルスで、遊女たちのあいだや酒場で、たくさんのトラクトを配った。空いた時間はすべて、トラクト配りと一人一人への伝道か、街頭やミッションでの説教に使った。休むのは眠るときだけで、そのときもよく祈っていた。私は人々の魂のために大きな重荷を負っていた。『みずから励んで、あなたによりすがる者はない』（イザヤ六四・七）。

ミッションの若者の一人アレン兄弟が、ペンキ塗りの仕事をくれた。彼は請負業者だった。しばらくこの仕事をした。ある日、悪魔が私を殺そうとした。私は、傾いた物置の屋根に立てたはしごに上って、納屋の切妻の壁を塗っていた。すると突然、何の前触れもなく、はしごが滑って倒れた。しかし私は、うまく釣り合いを取って、屋根の上にまっすぐ足から降り立った。あまりに一瞬のことで、何が起こったのかわからなかった。ペンキは屋根一面にこぼれた。すぐに詩篇九一篇一一～一二節が心に浮かんだ。主の御使たちが私を「ささえ」てくれたのだ。屋根から転げ落ちて、首の骨を折っていたかもしれなかった。

4月8日、ロンドンから来たF・B・マイヤーの説教を聞いた。彼は、そのころウェールズで起こっていた大リバイバルの様子を語った。ちょうどそこを訪ねて来たところで、エバン・ロバーツにも会っていた。少し前にこのリバイバルのことを読んでいたので、私の魂は奥底から揺り動かされた。私はその場で、もし神が私を用いることがおできになるなら、私のことは何でも神の思いのままにしていただく、と神に約束した。

刑務所伝道者のマザー・ウィートンがパサデナに来て、ペニエルで説教した。彼女は神のために燃えていた。私は、もう一度主の働きに全身でたずさわりたいと切に願ったが、家族をどうやって養えばよいのかわからなかった。妨げはとても大きく、私の力は小さく思われた。しかし、神の召しが私の上にあった。家族は神のものだった。神が私を召されるなら、それにこたえないわけにはいかなかった。

ロサンゼルスの郵便局や銀行や公共の建物でトラクトを配り、トラクトを持って多くの酒場も訪ねた。のちに、ロサンゼルスの酒場を三十軒ほど、もう一度回った。そのころは売春宿が公然と開いていたので、そこでもたくさんのトラクトを配った。

小さなエステルの死は私の心を打ち砕いた。神のご用をしているあいだしか生きていられないように感じた。私は、もっと本当の意味で神を知りたい、神の働きが力をもって進むのを見たいと切に願った。力あるリバイバルを求める大きな重荷と叫びが、心にわき起こった。神は、ご自分のための新しい奉仕に向けて、私を備えておられたのだ。それをもたらすには、私自身の心が神をもっと深く必要としていると悟るしかなかった。また、神の働きのために本当に魂の産みの苦しみをするしかなかった。神はそれを私に与えてくださった。このころ、世界のあちこちで、多くの人が同じように備えられていた。主は、もう一度ご自分の民

を訪れて救い出そうと、備えておられた。必要なのは、とりなす者だった。『仲に立つ者のないのをあやしまれた』（イザヤ五九・一六）。『わたしは、わたしの前にあって、国のために破れ口に立ち、わたしにこれを滅ぼさせないようにする者を尋ねたが得られなかった』（エゼキエル二二・三〇）。

5月の初めごろ、パサデナのレイク・アベニュー・メソジスト監督教会で、力強いリバイバルが起こった。ペニエル・ミッションの集会で掘り起こされた若者たちは、ほとんどがこの教会に通っていた。彼らは、その教会のリバイバルのために重荷を負うようになっていた。じつは私たちは、パサデナ全体に及ぶようなリバイバルを求めて祈っていたのだ。神は私たちの祈りに答えておられた。レイク・アベニューでは、御霊のすばらしい働きが起こっていた。祭壇の前は、求める魂でいっぱいだった。そこに有名な説教者はいなかった。ある晩、会堂にいたまだ救われていない人が、ほとんど全員救われた。神の完全な勝利だった。罪の自覚が力強く人々に臨んでいた。二週間のうちに二百人が祭壇の前にひざまずき、主を求めた。ペニエルの若者たちが陰で支え、神にすばらしく用いられた。それから私たちは、ロサンゼルスと南カリフォルニア全体に御霊が注がれるように祈りはじめた。

そのころの日記に、次のような考えが書いてある。「ホーリネスの教会のいくつか（そのころ先頭に立っていた教会）は、神が自分たちを素通りして行かれるのを知って、驚くことになるだろう。神は、ご自分に明け渡す人々のいる水路を通して働かれる。神が来られるためには、彼らはへりくだらなければならない。私たちは『パサデナを神に！』と叫んでいる。人々は自分の善良さに満足しすぎている。ほかの人々の救いのための信仰も関心も、ほとんど持っていない。神は彼らを素通りすることによって、彼らを低くされるだろう。御霊は、力ある、広く行き渡る注ぎを求める祈りを、私たちを通して息吹いておられる。大いなることが来ようとしている。私たちは、喜びが満ちあふれるように、大きく求めている。神が動いておられる。私たちは教会とその牧師たちのために祈っている。主は、ご自分に明け渡そうとする者たちを訪れてくださるだろう」。

そして同じことが、今日のペンテコステの人々についても言える。彼らが神のために最後に失敗するか成功するかは、まさにこの点で決まる。私たちはへりくだり、自分の目に小さい者であり続けなければならない。自分は重要な者だという思いで高ぶったら、私たちはもうおしまいだ。このことでは、歴史はくり返す。神はいつも、へりくだった民を求めてこられた。神はほかの者を用いることがおできにならない。偉大な改革者マルティン・ルターはこう書いた。「われらの主であり師であるイエス・キリストは『悔い改めよ』と言われる。それは、地上の信じる者の全生涯が、たえまない、とこしえの悔改めであるべきだという意味である。悔改めと悲しみ、すなわち真の悔改めは、人が自分を不満に思うかぎり続く。つまり、この世から永遠へと移るときまで続く。自分を義としたいという願いが、心のあらゆる苦しみのもとである」。神がご自分にふさわしく来られるためには、その前に、へりくだりと聖別による心の備えが、いつも大いに必要である。どんなリバイバルも、その深さは、まさにそこに行き渡る悔改めの霊によって決まる。じつに、これが、神から生まれるあらゆる真のリバイバルのかぎなのである。

5月12日、神は私に、時間のすべてを神にささげ、世の仕事にきっぱりと、永久に背を向けるよう迫られた。神は、私が自分と家族のことを、今こそすっかり神にゆだねることを望んでおられた。私は、S・B・ショーの書いた小さな本『ウェールズの大リバイバル』を受け取ったばかりだった。朝食の前に少し散歩しながら、それを読んでいた。主は何年も前から、ご自分の奉仕のために、私にこの決心をさせようとしておられたのだ。私たちは、互いのあいだで新しい契約を結んだ。私の残りの生涯は、すべて主のものとなった。そして私は、この契約をあえて破ったことは一度もない。私は働くのが好きなので、必要に迫られているように見えて、ときにはひどく誘惑された。私はいつも、生まれつきの力でまともにできる以上に働いてきた。

妻は朝食を取っておいてくれた。しかし、私は昼まで帰らなかった。食欲がなくなっていたのだ。御霊が、あの小さな本を通して、私に火をつけられた。昼に家に帰るまでに、三人の説教者と何人もの働き人を訪ねて、一緒に祈った。私は新しい任務と油注ぎを受けていた。私の重荷はリバイバルだった。ある兄弟が、私に必要だった新しい靴の代金をくれた。こうして、主はもう備えはじめておら

れた。悪魔は、私の契約のことで私を誘惑していた。三週間、仕事がなかった。神が、私の前で仕事の門を閉ざしておられたのだ。

しばらくのあいだ、一日じゅう人々を訪ねて一緒に祈り、G・キャンベル・モーガンの小冊子『ウェールズのリバイバル』を配った。それは人々の心を強く動かした。祈りの霊がますます私の上に臨み、私は「天よりの啓示にそむかない」決心をした。何年ものあいだ、「パンの問題」が私の前に立ちはだかっていた。私は、すっかり主に信頼する信仰を与えてくださいと主に祈った。『人はパンだけで生きるものではない』（マタイ四・四）。

主は、教会のあいだでリバイバルを勧める霊をさらに私に与えて祝福し、同じ趣旨でホーリネスの新聞雑誌に書く記事も与えてくださった。私はとくに『ウェイ・オブ・フェイス』と『ゴッズ・リバイバリスト』に書きはじめた。ある晩、私は大声で神を賛美しながら眠りから覚めた。神はますます私をとらえておられた。私は今や昼も夜も動き回り、神が大いなることをしてくださると信じるよう勧めていた。リバイバルの霊が私を焼き尽くした。預言の霊も強く私に臨んだ。リバイバルのためのはっきりした「信仰の賜物」を受けたように思われた。私たちは明らかに、これから来るすばらしい日々の始まりにいた。私は、力ある注ぎについて、たえず預言した。

私には、キリスト教の新聞雑誌に向けての本当の奉仕があった。また、さまざまな教会の祈祷会に出て、人々に勧めをするようになった。お金にはひどく困り、悪魔は私に、仕事に戻れと誘惑した。家賃の期限が来たのに、50セントしかなかった。しかし主は祈りを聞いてくださった。私はストーブを売ろうとしていた。住む家だけはなくてはならなかった。すると、こちらから頼みもしないのに、ちょうど必要なだけの額が入ってきた。神は真実なかただった。

G・キャンベル・モーガンの小さなトラクト『ウェールズのリバイバル』は、教会のあいだにすばらしく火を広げた。私は聖徒たちのあいだもずいぶん訪ねて回り、S・B・ショーの小さな本『ウェールズの大リバイバル』を教会で売りはじめた。神はこの本をすばらしく用いて、リバイバルの霊を求める信仰を育ててくださった。トラクトの働きは、酒場や商店のあいだで続けた。

このころには、私の服はかなりみすぼらしくなっていた。祈りに答えて、主は、パサデナのメソジストの兄弟マーシュ兄弟を通して、古着の背広を二着与えてくださった。夏用の薄手のものと、冬用の厚手のものだった。どちらも、私の着ていたものよりよかった。こうして私は、求めたものの二倍、二重の祝福を受けた。

ラマンダ・パークのメソジスト監督教会で説教した。四人が救われ、ほかの人々も罪を示された。一人は、神に明け渡すまいとして集会から走り出て行った。私は、もっと多くの教会を訪ね、キリスト教の新聞雑誌にもっと多くのメッセージを書くようになった。主はたびたび、お金のことで私たちが厳しく試されるのを許されたが、私たちの乏しさを人々に知らせることは決して許されなかった。あるとき、家にはひとつかみの豆しかなかった。しかし主は、それがすっかりなくなる前に備えてくださった。第一メソジスト監督教会で私がしたあかしがもとで、ある兄弟がじゃがいもを一袋持って来てくれた。神に従うことは報われる。ラマンダ・パークのメソジスト監督教会でまた説教すると、集会は真夜中過ぎまで続いた。火が下った。私たちは牧師館に移り、明け方近くまで祈った。

私は家主の女性に一週間分の家賃を借りていた。悪魔が彼女に入り込み、彼女はすぐに払うか、出て行くかしろと命じた。しかし神が家賃を送ってくださった。ラマンダ・パークで、また何度か説教した。火がすばらしく下った。何人もの人が救われた。牧師のフランブズ兄弟と姉妹は、神の尊い子供だった。神は、パサデナのマンリー兄弟の天幕集会でも働きはじめられた。そのころ、働きのための祈りの重荷が、私に重くのしかかっていた。集会と祈りで、昼も夜もほとんど休みがなかった。それは始まりの日々だった。戦いが始まっていた。神も悪魔も動いていた。

1905年5月、私はある記事にこう書いた。「ウェールズでの恵みの栄光ある働きを読んで、私の魂は燃えている。国のうちの『七千人』は、『残された者たち』（エゼキエル九章）と交わってきた。そして、国のうちの憎むべきことと荒廃のために、叫び、嘆いてきた。その憎むべきことと荒廃とは、キリストのからだの中で生きた敬虔が衰えたことである。神がもう一度地上で動いておられるこのような時に、このような見通しを前にして、彼らが喜ぶのは無理もない。しかし、

『みずから励んで、神によりすがる』者はどこにいるのか。今この時の私たちの合言葉を、『カリフォルニアをキリストに』としよう。神は働き人を、水路を、ちりの中の虫けらを捜しておられる。覚えておいてほしい。神は虫けらを必要としておられるのだ。イエスのいのちは、祈りの中で、体じゅうの毛穴からしぼり出された。たいていの人にとって、このたぐいのものは高くつきすぎる。しかし、これが主の『最後の呼びかけ』ではないだろうか」。

第二章　スメール牧師、ウェールズから帰る（その一）

6月17日、ロサンゼルスの第一バプテスト教会の集会に出るために出かけた。そこでは、御霊の注ぎを求めて神を待ち望んでいた。牧師のジョセフ・スメールは、ウェールズから帰ったばかりだった。彼はそこでリバイバルとエバン・ロバーツに触れ、同じ訪れと祝福がロサンゼルスの自分の教会にも来るようにと燃えていた。この集会は、私自身の幻と重荷と願いに、ぴったり重なっていた。私は夜の礼拝の前に、二時間、会堂で祈った。そこでは毎日、昼も夜も集会が開かれ、神がそこにおられた。

ある日の午後、ロサンゼルスで、人々がスメールの現れるのを待っているあいだに、私が集会を始めた。人を待たずに、神に期待するようにと勧めた。人々は、だれか偉い人に頼っていた。それは、どの時代にも教会にのろいをもたらし、神を妨げてきた、あの偶像礼拝の霊だった。イスラエルの子らのように、人々は「神のほかに何かの神」を持たずにはいられないのだ。ヨーロッパの国教会の世界では、牧師はよく「小さな神」と呼ばれている。夜は、管理人が鍵を持って来るのを待つあいだに、教会の外の石段で礼拝を始めた。しばらく、周りの地域のために祈った。夜の集会では、勝利が絶えず押し寄せた。

神の教会が、愛と一致においてあるべき姿になるとき、その扉は決して閉じられることも、鍵をかけられることもないだろう。昔の神殿のように、いつも開かれているだろう（私たちはのちに、アズサ通りミッションでこれを見た）。神は、みな違う名前を持つ六百六十六の教会など持ってはおられない。本当の「ペンテコステ」に分裂はない。本当の礼拝にもない。『神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである』（ヨハネ四・二四）。『わたしたちは皆、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだ』（第一コリント一二・一三）。古代のイスラエルは、神と正しい関係にあったとき、一つだった。教会はなおさらそうあるべきだ。絶えず仕えるのに足りるだけの祭司が、私たちにはいる。いつでも教会を満たすだけの、求める人々、助けを必要とする人々もたくさんいる。私たちは、初代の型から、また教会の予型であるイスラエルからさえ、なんと遠く落ちてしまったことか。あまりに足りないので、本物を見ても、ほとんどそれと気づかない。ローマ教会でさえ、形式的ではあるが、この点では私たちより先を行っている。困ったことに、また恥ずかしいことに、私たちはどうしようもなく分かれているのだ。

またラマンダ・パークへ行った。説教のあと、牧師館で、祈っては眠り、眠っては祈って夜を過ごした。私は、自分の魂にイエスがもっと豊かに現されることを願っていた。満月をじっと見つめ続けると、だんだんはっきりと、近く見えてくる。それと同じように、イエスを思い続けると、イエスは私たちの魂にいっそう現実のものとなる。私たちには、神とのもっと近い、一人一人の、生きた関係が必要だ。神を親しく知り、神と交わることが必要なのだ。神の現実と交わって生きる人だけが、人々を神へ招くために用いられる。

またスメールの教会へ行くと、人々はまた、説教者が現れるのをぼんやりと待っていた。何のために集会に来たのか、はっきりわかっていないように見える人が多かった。私が声に出して祈りはじめると、集会は力をもって始まった。スメール兄弟が着いたときには、集会はすっかり燃え上がっていた。神は、人々が人ではなく、ご自分を仰ぐことを望んでおられた。神の栄光を第一に考えていない人々は、当然これを不快に思うだろう。しかし、それが神のご計画なのだ。

このころ、パサデナのノース・バーノン・アベニュー175½番地の小さな家に移った。一部屋と小さな台所だけで、家具もガスも水道もなく、家賃は月3ドルだった。たいていのクリスチャンは、祈りの重荷を負おうとしないことがわかった。肉にはつらすぎるのだ。私は今、ますます大きくなるこの重荷を、昼も夜も負っていた。その奉仕は激しかった。それは「キリストの苦難にあずかる」ことであり、魂の「産みの苦しみ」であった。そこには『言葉にあらわせない切なる

うめき』が伴っていた（ローマ八・二六～二七）。たいていの信者は、祈るより批判するほうがたやすいと思っている。

ある日、私は祈りの重荷にひどく苦しんだ。マンリー兄弟の天幕へ行き、祭壇の前にひれ伏して、魂の重荷を下ろした。働き人の一人が脇の天幕から駆け込んで来て、自分のために祈ってほしいと頼んだ。その晩、別の集会に出ると、若いエドワード・ベーマー兄弟がいた。春のペニエルの集会で掘り起こされた若者で、同じ祈りの重荷を負っていた。そのときから、私たちは御霊において不思議なほど一つになった。彼はのちに、私の祈りの助け手となる人だった。私たちは、リトル・ペニエル・ミッションで午前2時まで一緒に祈った。人々の上に御霊が注がれるようにと神と格闘していると、神はすばらしく私たちに会ってくださり、確信を与えてくださった。このころには、私の生活は文字どおり祈りにのみこまれていた。昼も夜も祈っていた。

キリスト教の新聞雑誌にさらに記事を書き、聖徒たちに祈りを勧めた。またロサンゼルスのスメールの教会へ行った。そこでは、人々がまた説教者を待っていた。私はこのありさまに大きな重荷を感じ、神に期待しなければならないことを示そうとした。古くからのしきたりに縛られて、不快に思う人もいたが、こたえる人々もいた。人々は、ウェールズで起こったようなリバイバルを求めて祈っていた。神に期待することは、ウェールズのきわだった特色の一つだった。ウェールズでは、人々は神に期待した。説教者がいてもいなくても、集会は進んだ。人々は神に会いに来た。そして神は彼らに会ってくださった。

私はウェールズのエバン・ロバーツに手紙を書き、カリフォルニアの私たちのために祈ってほしいと頼んでいた。今、祈っているという返事が届いた。それによって、私たちはウェールズのリバイバルと結ばれた。手紙にはこうあった。

「信仰における愛する兄弟へ。ご親切なお手紙をありがとうございます。あなたの誠実さと、志のまっすぐなことに心を打たれました。すっかり明け渡す心のある人々を集めなさい。祈って、待ちなさい。神の約束を信じなさい。毎日集会を開きなさい。神があなたを祝福してくださるようにと、心から祈っています。キリストにあって、エバン・ロバーツ」。ウェールズで私たちのために祈ってくれていると知って、私たちは大いに励まされた。

ラマンダ・パークでまた説教した。ある晩、エリヤの燔祭について説教していると、あまりに祝福されて、喜びのあまり跳び上がった。礼拝のあと、何人かの人が私の品のないふるまいにひどく驚き、もう私には来てほしくないと言っていると知らされた。しかも彼らはメソジストだったのだ。神はそこで、私の奉仕を大いに祝福してくださっていた。悪魔は、私にもうそこで説教させたくなかったのだ。教会のバザーや夕食会ならかまわなかった。じつは、そのころ彼らのあいだで大はやりだった。それは「品のある」ことだったのだ。しかし、ウェスレーもフレッチャーも、当時の教会では二度目に語ることを許されないことが多かったのを思い出して、励まされた。多くの人はフレッチャーを怪物のように見ていた。じつは彼は、その時代でもっとも聖い人の一人だった。どの時代でも、本当に神を知る人は少ない。

ロサンゼルスのスメール兄弟の教会へたびたび行き、集会に加わって大きな祝福を受けた。ペニエルの若者たちも一緒に来て、炎をあおるのを手伝った。家ではお金のことでずいぶん試された。お金はひどく乏しかった。しかし神は、私たちが本当に苦しむことはお許しにならなかった。このころ、『ウェイ・オブ・フェイス』『クリスチャン・ハーベスター』『ゴッズ・リバイバリスト』にいくつか記事を書いた。次はその抜粋である。「ここカリフォルニア州ロサンゼルスで、御霊のすばらしい働きが起こった。その前には、祈りと期待による深い備えの働きがあった。罪の自覚が人々のあいだに急速に広がり、人々は町じゅうからスメール牧師の教会の集会に集まって来ている。すでにこれらの集会は『ひとりでに進む』ようになりはじめている。人の手に導かれることなく集会が進んで行くあいだに、会堂のいたるところで魂が救われている。潮は急速に満ちてきており、私たちはすばらしいことを期待している。魂の産みの苦しみが、この働きの大切な特色になりつつある。私たちは押し流されて、教派の垣根を越えつつある。神への恐れが人々に臨んでいる。まさに焼き尽くす霊である。日曜の夜には、集会は翌朝の未明まで続いた。スメール牧師は、これから来るすばらしいことを預言している。使徒時代の『賜物』がまもなく教会に戻って来ると預言しているのだ。ロサンゼルスはまさにエルサレムである。神の力ある働きが始まるのに、まさにふさわしい所だ。私はしばらく前から、まさにこのような神の力の現

れを期待していた。いつ起こってもおかしくないと感じていた。また、神が栄光を受けられるために、だれも思いもしない所に来るかもしれないとも感じていた。『ペンテコステ』を求めて祈ってほしい」（F・バートルマン、1905年6月）。

7月3日の夕方、パサデナのリトル・ペニエルの会堂へ祈りに行くようにと、強く示された。行ってみると、ベーマー兄弟が先に来ていた。彼もまた、神に導かれて会堂に来ていたのだ。私たちは、パサデナにリバイバルの霊が来るようにと祈った。やがて重荷は、ほとんど耐えられないほどになった。私は、産みの苦しみをする女のように叫んだ。御霊が私たちを通してとりなしておられたのだ。ついに重荷が私たちから離れた。しばらく静かに待っていると、大きな静けさが私たちの上に降りてきた。そのとき突然、何の前触れもなく、主イエスご自身が私たちにご自分を現された。主は私たちのちょうどあいだに立っておられるようだった。手を伸ばせば触れられるほど近くだった。しかし、私たちは恐れ多くて動けなかった。私は見ることさえできなかった。じつに、自分が霊だけになったように思われた。主の臨在は、生まれつきの目で見、手で触れることができた場合よりも、ありうるものならさらに現実のものと思われた。私は、自分に目や耳があることを忘れていた。私の霊が主を知ったのだ。神の愛の天が私の魂を満たし、ふるわせた。燃える火が私を貫いた。じつに、私の全存在が、火の前のろうのように、主の前に溶けて流れるように思われた。私は時も所もまったく意識しなくなり、ただ主のすばらしい臨在だけを感じていた。私は主の足もとで礼拝した。そこはまさに「変貌の山」のようだった。私は清い御霊の中で、すっかり我を忘れていた。

しばらくのあいだ、主は私たちとともにおられた。それから、ゆっくりとその臨在を引き上げられた。主が去られなかったら、私たちは今もそこにいただろう。あの経験のあとでは、主が現実のかたであることを疑うことはできなかった。ベーマー兄弟も、ほとんど同じことを経験した。主がともにおられるあいだ、私たちは互いがそこにいることをまったく意識していなかった。我に返ったとき、私たちは口をきくことも息をすることも、恐ろしいほどだった。主は私たちに何も語られなかった。ただ、その臨在によって私たちの霊をうっとりさせられただけだった。主は、ご自分の奉仕のために、私たちを強め、確信を与えようとして来られたのだ。私たちは今、自分たちが「魂の産みの苦しみ」の奉仕において、主とともに働く者、主の苦難にあずかる者であることを知った。本当の魂の産みの苦しみは、人の生まれつきの産みの苦しみと同じように、霊においてはっきりしたものである。このたとえは、ほとんど完全に当てはまる。これなしに生まれる魂は一つもない。救いの真のリバイバルは、すべてこのようにして来る。

会堂を出たのは翌朝、日が昇ってからだった。しかし、その夜はわずか半時間ほどにしか思われなかった。神の臨在は、時の感覚をすべて消し去る。神にあっては、すべてが永遠である。それが「永遠のいのち」なのだ。神には時というものがない。天では、時はなくなる。本当の祈りの夜には、いつも時があっという間に過ぎるように思われるが、そのわけはここにある。時は退けられるのだ。そこには永遠がある。何日ものあいだ、あのすばらしい臨在が私のかたわらを歩いているように思われた。主イエスは、それほど現実のかただった。私は、人との会話にほとんど戻れなかった。それはあまりに粗く、むなしく思われた。人の霊はあまりにとげとげしく、地上の交わりは苦痛に思われた。生まれつきの私たちは、キリストの優しい霊から、なんと遠いことか。

次の日は祈って過ごし、夜はスメールの教会へ行って、とりなしの奉仕をした。天の平安と喜びが私の魂を満たした。イエスはそれほど現実のかただった。主の臨在の中には、疑いも恐れもとどまることができない。

ある日、留守のあいだに、だれかが家の戸口に薪をひと山置いて行った。だれが持って来たのか、とうとうわからなかった。私たちは薪を求めて祈っていたのだ。ロサンゼルスのスメール兄弟の集会にたびたび出て、そこで恵まれたとりなしの奉仕をした。神はすばらしく御霊を注いでくださった。また家賃の期限が来た。しかし、ある兄弟が、こちらから頼みもしないのに、その額の小切手を書いてくれた。私たちはそれを求めて祈っていたのだ。

いくつかのホーリネスの新聞に、記事をいくつも書いた。私たちのあいだでの神の働きを伝え、各地の聖徒たちに、リバイバルを求める信仰と祈りを勧めるものだった。主はこれらの記事を大いに用いて、多くの所に信仰と罪の自覚をもたらしてくださった。まもなく、多くの所からたくさんの手紙が来るようになっ

た。私の気がかりは、おもにホーリネスの人々のことだった。彼らが素通りされて、祝福を失うことがないようにと願っていた。このころ、日記に次のような考えを書いた（ペンテコステの人々への警告である）。「ホーリネスの人々は、偏見とパリサイ主義の霊を、船べりが水につくほど積み込んでいる。しかし、私たちは『からだ』のほかの肢体から、そんなにたやすく自分を切り離してよいのだろうか。私たちは霊的な高ぶりによって、自分を神から切り離してしまうかもしれない。そのあいだに神は、いちばん弱い者を悔い改めさせ、勝利まで進ませられるかもしれない。（スメール兄弟のところの、第一バプテスト教会での働きを指している。）私たち自身の心の中の働きは、これまで経験したよりも深く進まなければならない。あらゆる方面の教派的な偏見や党派心などを打ち砕くほど、深くなければならない。リバイバルの働きは、ホーリネスの教会そのものの外で始まったようだ。神は、ご自分の選ぶ者を全うすることがおできになる。ホーリネスの人々は、自分たちの立場を誇りすぎている。（自分たちの地位にも状態にも、自信を持ちすぎている。）神は彼らを素通りしなければならないかもしれない。彼らもまた悔い改めなければならない。神は、ほかの所で働くことによって、彼らを低くされるかもしれない」。

そして、歴史はくり返す。ペンテコステの人々は気をつけよ！　今の世界的なリバイバルは、小さなウェールズでゆりかごに揺られ、続いてインドで「育てられ」、のちにロサンゼルスで一人前に成長したのだ。私は1905年の初めに、リバイバルのかなめとなる次の言葉を神から受けた。「リバイバルの深さは、まさに悔改めの霊の深さによって決まる」。そしてこれは、いつの時代の、どの人々にも当てはまるだろう。

スメール兄弟の教会のリバイバルの霊は、町じゅうの霊的な人々のあいだに、たちまち関心を広げた。働き人たちが、さまざまな所属から、あらゆる所からやって来て、全体に及ぶ注ぎを求めて、私たちとともに祈った。関心の輪は急速に広がった。私たちは今や、カリフォルニアのため、国のため、そして世界に及ぶリバイバルのために祈っていた。預言の霊が私たちのあいだで働きはじめ、大規模な、力あることを指し示した。だれかが『ウェールズのリバイバル』の小冊子を五千部送ってくれた。私はそれを教会に配った。それは人々をすばらしく生き返らせた。

またスメールの教会を訪ね、集会を始めた。彼はまだ着いていなかった。このころには、集会は自然にわき起こるものになって、すばらしくなっていた。私たちの小さなギデオンの一隊は、救の君イエスに導かれて、確かな勝利へ向かって進んでいた。このように早い時期に、私はとくに、信仰、霊を見分ける力、いやし、預言を求めて祈るように導かれた。もっと知恵と愛も必要だと感じた。このころ、リバイバルのための本当の「信仰の賜物」と、同じ目的のための預言の霊を受けたように思われた。そして、これから来る力あることを預言しはじめた。

1905年の春に私たちが祈りはじめたころは、だれも、並はずれたことを信じる信仰をあまり持っていないようだった。聖徒たちのあいだでは、当時の状態について悲観する見方が一般的だったようだ。しかし、この状態は変わった。神ご自身が、もっとよいことを信じる信仰を私たちに与えてくださったのだ。それをかき立てるようなものは、目に見えるところには何もなかった。それは無から来た。神は今日も同じことをおできにならないだろうか。

このころ、パサデナの『デイリー・ニューズ』に、スメール兄弟の教会で見たことを伝える記事を書いた。記事は掲載され、まもなく支配人自身が見に来た。彼はひどく罪を示され、祭壇の前に出て、熱心に神を求めた。この記事は、全国のいくつものホーリネスの新聞に転載された。題は「ロサンゼルスのある教会で見たこと」だった。次はその抜粋である。「数週間前から、ロサンゼルスの第一バプテスト教会で特別集会が開かれている。スメール牧師はウェールズから帰ったところで、そこでエバン・ロバーツとリバイバルに触れてきた。彼は、ロサンゼルスがまもなく神の大いなる力によって揺り動かされるという確信を表明している」。

「私が書いている集会は、牧師が着くしばらく前に、即興で自然に始まった。早くから一握りの人が集まっていた。御霊が働かれるには、それで十分だったようだ。集会が始まった。人々は神に期待していた。神がそこにおられ、人々がそこにいた。牧師が着いたときには、集会はたけなわだった。スメール牧師は自分の席についたが、だれも彼にとくに注意を払わないようだった。人々の心は神に

向いていた。会衆は多くの教派から来ていたが、だれもほかの人のじゃまにならないようだった。すべてが完全に調和しているようだった。御霊が導いておられた。

牧師は立ち上がって聖書の一部を読み、その場にふさわしい、望みと励ましに満ちた言葉をいくつか、よく選んで語った。そして、集会はまた彼の手を離れた。人々はそれを受け継ぎ、前と同じように続けた。礼拝のあいだじゅう、あかしと祈りと賛美が入りまじっていた。人の導きについて言えば、集会はひとりでに進んでいるようだった。牧師も人々の一人だった。少しでも信仰に感じやすい人なら、このような雰囲気の中では、何かすばらしいことが今にも起ころうとしていると感じずにはいられないだろう。霊の世界の、何か不思議な、力強い大変動が、明らかに戸口まで来ている。この集会にいると、『地上の天国』にいるような思いがする。そして、超自然のものが存在すること、それもまったく現実の意味で存在することを確信させられる」（F・バートルマン、パサデナの『デイリー・ニューズ』）。

同じころ、『ウェスレアン・メソジスト』にも別の記事を書いた。次はその抜粋である。「あわれみを拒むことは、さばきを意味する。それも、あわれみに見合う規模のさばきである。神の世界の歴史を通じて、いつもまず神のあわれみが差し出され、そのあとにさばきが続いた。まず、あわれみの白い馬に乗ったキリストが来られる。そのあとに、戦争と、ききんと、死の、赤い馬、黒い馬、青白い馬が続く。預言者たちは、昼も夜も絶えずイスラエルに忠実に警告した。しかし、その涙と嘆願は、ほとんどむだに終わった。紀元70年のエルサレムの恐ろしい滅亡では、百万人のユダヤ人が絶ち滅ぼされ、さらに多くの人々が捕囚となった。しかしその前に、神の御子ご自身の手によって、神のあわれみが差し出されていたのだ」。

「1859年、大きなリバイバルの波がわが国を訪れ、五十万の魂を救いの泉へと押し流した。そのすぐあとに、1861年から1865年の恐ろしい殺戮が続いた。来たるべきリバイバルは、すでに急速に世界的な広がりを見せている。それを待ち望みながら、私たちは思う。ほかの時と同じように、あわれみのあとに、さばきが続くのではないか。それも、差し伸べられたあわれみに見合うさばきが。今の諸国の好戦的な態度と苦悩を見ると、あとに続くさばきは、私たちを患難に、あの大患難にさえ投げ込むのではないかと思われる」（F・バートルマン、1905年7月）。

『ゴッズ・リバイバリスト』にはこう書いた。「あらゆる形の不信仰が、洪水のように私たちに押し寄せている。しかし見よ、私たちの神もまた来られる！敵に対して旗が掲げられようとしている。主はご自分の働き人を選び出しておられる。今こそ、奉仕の幻を実現する時である。『主は詔して、日の出るところから日の入るところまであまねく地に住む者を召し集められる。われらの神は来て、もだされない。いけにえをもってわたしと契約を結んだわが聖徒をわたしのもとに集めよ』（詩篇五〇・一、三、五）」。1905年のあいだ、私はよく、ふつうの時代の五十年を生きるより、この時代の六か月を生きたいと言っていた。それは大いなることの始まりの日だった。「地に落ちて死ぬ」ことをいとわない一粒の麦には、豊かな収穫の約束があった。しかし、霊的な「浮かれ娘」たちにとっては、このことはすべて、当然ながら愚かなことだった。

エバン・ロバーツにもう一度手紙を書き、カリフォルニアのために祈り続けてほしいと頼んだ。こうして私たちは、リバイバルのための祈りによって、ウェールズと結ばれ続けた。そのころ、本当の祈りはほとんど理解されていなかった。だれにもじゃまされない静かな場所を見つけるのは難しかった。イエスとともにゲッセマネを経験することは、そのころの聖徒たちのあいだではまれだった。そして、私たちのペンテコステのミッションのあいだでも、急速に同じありさまになりつつある。アズサ通りミッションのころは、ミッションにふさわしい場所を考えるとき、まず思い浮かべたのは祈りの部屋だった。今では、それが最後に考えられることがあまりにも多いようだ。

ある日、スメールの教会の祭壇の前で、私はうめきながら祈っていた。とりなしの霊が私の上にあった。ある兄弟が、私を厳しくとがめた。彼にはそれがわからなかったのだ。肉は当然、このような苦しみからしりごみする。たいていの教会で「うめき」が好まれないのは、家の中で産みの苦しみをしている女が好まれないのと同じだ。魂の産みの苦しみは、自分本位の世の人々にとって、心地よい連れではない。しかし、それなしに魂が生まれることはない。今日、子供を産む

ことは、とても好まれることではない。教会で新しく生まれる魂の本当のリバイバルも同じだ。現代の社会には、子供を産む母親の居場所はほとんどない。人々は社交界の「浮かれ娘」のほうを好む。魂の産みの苦しみについての教会の態度も同じだ。魂のための重荷はほとんどない。男たちは、産みの苦しみをしている女のうめきから逃げ出す。同じように、今日の教会は「うめき」を少しも望まない。教会は、楽しむのに忙しすぎるのだ。

また、お金にひどく困ったが、主が救い出してくださった。私たちは、どんなに必要が差し迫っているように見えても、神のほかのだれにも乏しさを知らせず、物ごいも借金もしなかった。聖徒たちが十分に神の近くに生きているなら、神が彼らに語られるだろうと信じていた。私たちは神にすっかり信頼し、神が助けを送られなければ、なしで済ませた。このころ、最初のトラクトを書いた。題は『愛はいつまでも絶えることがない』だった。これが、信仰による大きなトラクトの働きの始まりだった。そのための費用は、主に信頼して求めなければならなかった。しかし主は、一度も私を見捨てられなかった。

そのころ、私はあちこちの集会で説教していた。ある日、マンリー兄弟の集会のためのメッセージを示されていた。クラークの注解書の一巻から、二行の引用がほしかった。注解書は四巻あり、それぞれ千ページあった。探す時間は数分しかなかった。私は祈りながら一巻を選び、目を閉じて、本がひとりでに開くにまかせた。そのページに印を付けたことも、折りぐせを付けたこともなかった。ところが、驚いたことに、本はちょうど正しい所で開き、私の目はまっすぐ、ほしかった引用に落ちた。生まれつきの力では、ありえないことだった。それが本のどこにあるのか、まったく知らなかった。読んだことを覚えていただけだった。これによって、メッセージのための信仰が大いに強められた。しかし、もちろん、これをいつものやり方として勧めるつもりはない。

ある晩、スメール兄弟の教会で、集会が「肉」に走ってしまった。彼が人々に祈りを呼びかけると、群衆は四分の一に減った。すると、神が力をもって来られた。そこには「宗教」が多すぎたのだ。『来たれ、御使の一団よ』というトラクトの印刷を頼み、ある値段で千部刷れるようにと主に願った。印刷屋は、もちろん私の祈りのことなど何も知らずに、ちょうどその額を請求した。ある姉妹が5ドルを手渡してくれた。これを私に渡すようにと、しばらく前から主に語られていたという。それは、私が求めて祈っていたちょうどの額だった。必要なもう5ドルを求めて祈ると、まもなく、ある兄弟がちょうどその額を手渡してくれた。私はそのことについて、ほのめかしもしなかった。主がどれほどすばらしく私たちを顧みてくださっているかを思うと、身がふるえた。私の生涯は、すべて主のご用のためにあった。しかし、思い上がることはとてもできなかった。

ある晩、マンリー兄弟の天幕集会に行った。礼拝で何かをするつもりはまったくなく、後ろの席に座った。まもなく、御霊が力強く私の上に臨まれた。私が立って語ると、神の力が会衆の上に下った。一同はみな顔を伏せてひれ伏した。三時間のあいだ、天幕全体が祭壇の前での祈りの場となり、祈りが続いた。何人もの人が救われ、だれもが神から助けを受けたようだった。御霊のすばらしい訪れだった。そのころの人々は、今ほど反抗的ではなかった。予定が破られることを、もっと快く受け入れた。妨げになる狂信的な霊も、それほど多くなかった。神への本当の飢え渇きがあった。私はほとんど毎晩、どこかの集会に加わっていた。主は御霊を注ぎ続けてくださった。

このころ、ひどい胃の神経痛に襲われた。死ぬかと思った。まる一日一晩、断食して祈ると、主が救い出してくださった。悪魔が私を殺そうとしているようだった。また別のトラクトを書いた。題は『みんなの者が一つとなるために』だった。これは教派の悪魔を激しくかき立てた。しかしそれは、『世が信じるようになるため』の、イエスご自身の祈りだったのだ（ヨハネ一七章）。

ある友人が、アロヨでのホーリネスの野営集会の数日分の費用を払ってくれたので、私たちはそこで天幕暮らしをした。真夏だった。私たちは、いつもと違う暮らしと野外の生活を楽しんだ。私はほとんどの時間を、森の中でひれ伏して祈って過ごした。月の明るい夜には、神に心を注ぎ出した。神はそこで私に会ってくださった。野営地では、「空の荷車」のがらがらいう音が多かった。たいていの人は、自分のための祝福を求めていた。もっと祝福を受けようと、大きなスポンジのように集会へ駆けつけた。彼らは踏みつけられる必要があった。今日のペンテコステの人々も、おおむね同じである。

また家賃の期限が来て、悪魔は激しく戦った。しかし神が助けに来てくださった。野営地で、小さなルースがひどい病気になった。暑い日が続いていた。私たちはひと晩じゅうルースのために祈り、主がルースに触れてくださった。気がつくと、私の魂は、たいていのホーリネスの人々の望みと見えるものをはるかに越えて、神を求めて叫んでいた。単なる感情の領域の下へ、もっと深く進みたかった。魂の中に岩をすえてくれるような、もっと確かで長続きするものに至りたかった。すぐに消えてしまう泡や、宗教的なわめき立てや大言壮語があまりに多く、私はうんざりしていた。そして主は、長く私を失望させてはおかれなかった。

すると野営集会の委員会が、私が野営地で配っていたトラクトのことで、私を呼びつけて問いただした。彼らは、私がホーリネス運動を攻撃していると考えたのだ。しかし私は、神のうちのもっと深い所へ進むよう勧めていただけだった。彼らには、もっとへりくだりと愛が必要だった。教派主義に反対する私のトラクト『みんなの者が一つとなるために』は、野営地をかき立てた。たしかに、人の造った運動はかき立てられる必要がある。神には、ただ一つの「運動」、「一つのからだ」しかない。これが、初めのころのアズサ通りミッションのメッセージだった。

第二章　スメール牧師、ウェールズから帰る（その二）

エバン・ロバーツから二通目の手紙が届いた。こう書いてあった。「ウェールズ、ラッハー、1905年8月7日。親愛なる兄弟へ。思いやりのあるご親切に、心から感謝します。あなたがたがすばらしいことを経験しはじめているという、よい知らせを聞いて、たいへんうれしく思いました。神があなたがたを祝福し続けてくださるよう祈っています。ご厚意に、重ねて深く感謝します。主の奉仕にあって、エバン・ロバーツ」。

ある晩、ホーリネスの野営地で、主は私に、説教してほしいと言われた。私は森へ出て行って、集会のために祈ろうとした。しかし主は、「あなたに説教してほしいのだ」と言われた。私は主に、彼らが説教させてくれないでしょう、と申し上げた。彼らの中には、その機会を待ちかねている者が十人あまりもいたのだ。それに、彼らは私をいくらか恐れてもいた。私は、彼らの属する教派の者ではなかった。しかし主は「説教せよ！」と言われた。私は主に、今夜ほかのすべての口を閉ざしてくださるなら従います、と申し上げた。こうして責任を主にお任せして、集会へ行った。メッセージの時間になった。彼らは互いに顔を見合わせたが、だれの舌も動かなかった。だれも私のほうを見なかった。御霊が私に臨み、私は跳び上がるように立った。神は私の魂を力であふれさせてくださった。メッセージはまっすぐ神から来て、矢のように的に当たった。それは野営地を揺り動かした。

今度は小さなルースがひきつけを起こし、悪魔がこの子を殺そうとした。ひどく暑く、ルースは歯が生えかけていた。これが、悪魔の私への仕返しだった。私たちはまたパサデナの家に戻った。私は、太平洋岸の十八のミッションに、一つずつ、私のトラクトの包みを郵便で送った。それから神は、もう一つのトラクト『事の核心』を与えてくださった。この中で私は、私たちの礼拝と信仰の本当の対象であるイエス・キリストを示そうとした。あてこすりのない、中心をとらえた説教である。小さなルースはますます悪くなり、人間の目には、もう助かる望みはほとんどなかった。しかし神は私たちの叫びを聞いて、この子のいのちを取らずにおいてくださった。敵は、私たちに残ったただひとりの子供を、どうしても奪おうとしているようだった。お金の面でも、ひどく行き詰まっていた。一文も入って来なかった。しかし、ちょうど危ないところで助けが来た。神は私たちを見捨てられなかった。私たちは神に信頼していた。

ある夜、悪魔がすぐそばまで来た。突然眠りから覚めると、部屋の中に、自分がそこにいるのと同じくらいはっきりと、悪魔の気配を感じた。私が神に助けを叫び求めると、悪魔は逃げて行った。妻も、私が目を覚ます直前に、その気配を感じていた。私たちは火の炉の中を通っていた。しかし、「第四の者」が私たちとともにいてくださった。人の助けは、まったく得られないように思われた。敵は、どうしても私を働きから追い出そうとしているようだった。私は、昼も夜も、まるまる祈りに費やしていた。明らかに、サタンの国は痛手を受けていた。近所の人々は、私が祈りの中でうめいているのを聞いて、病気に違いないと思い、具合を尋ねて来た。しかし、それは魂の重荷にすぎなかった。

この前のトラクトでは、主がすばらしく取り計らってくださった。印刷屋が見積もりを誤って、6ドル50セントで仕事を引き受けたのだ。本当は9ドルの仕事だった。印刷屋は約束を守った。それから、ちょっとした誤植で千部をだめにした。それを私にただ同然でくれた。私はその誤りをペンで直した。

ある日、ロサンゼルスのペニエル・ミッションで、集会のあと、ある姉妹が私に声をかけて、通り過ぎて行った。主は、彼女が私にいくらかお金を渡すことを望んでおられる、と私は感じた。私はひどく困っていた。それで、黙って祈った。彼女は私から三メートルほどの所で立ち止まり、戻って来て、1ドルを手渡してくれた。数分後、私がこのことをある兄弟に話していると、彼は、少し待っていてほしいと言った。彼はミッションの中の自分の部屋へ行き、すぐに私のために2ドルを持って戻って来た。神は私の祈りを聞いてくださったのだ。

その晩、スメールの教会へ行くと、彼は辞任した。第一バプテスト教会では、十五週間、毎日集会が続いていた。もう9月になっていた。教会の役員たちは、この新しいやり方にうんざりして、古い秩序に戻りたがっていた。彼は、リバイバルをやめるか、出て行くかのどちらかにせよと言われた。彼は賢明にも、出て行くほうを選んだ。しかし、神を追い出すとは、教会としてなんと恐ろしい態度を取ったことか。のちにウェールズでも、これと同じようにして、教会から神の御霊が追い出された。人々は御霊の臨在に飽きて、古く冷たい、教会制度の秩序に戻りたがったのだ。人はなんと盲目なことか。スメール牧師の教会員のうち、もっとも霊的な人々は、当然ながら彼について行った。リバイバルのあいだにほかの所から彼のもとに集まって来た働き人たちも、その中心となって加わった。彼らはすぐに、新約聖書にならった教会を組織しようと考えた。私は、主がスメール兄弟を、少なくともしばらくのあいだ伝道の働きに解き放とうとしておられるのではないか、と感じていた。ほかの所に火を広げるためである。しかし、彼はそうは考えなかった。私はこのことを考えて彼と話し合った。パサデナのレイク・アベニュー・メソジスト監督教会で、彼がブリンク牧師に代わって語る手はずを整えることができた。この教会は、パサデナのリバイバルの中心だった。

電車賃がなかったので、一日じゅう歩いて集会の知らせを広め、夜は疲れすぎて眠れなかった。私たちには一文もなく、家賃の期限が来ていた。それでも私は、文字どおり、神への奉仕にいのちを注ぎ出していた。暮らしに要るものさえ、かろうじてあるだけだった。きっと、だれかが神に従いそこなっていたに違いない。主は御霊において、すばらしく私とともにいてくださった。多くの人が私の奉仕によって祝福を受けていた。指導者たちは、私をあまり励ましてはくれなかった。しかし、へりくだった、飢え渇いた魂は、イエスのことを喜んで聞いた。リバイバルは、ほとんどいつも信徒のあいだから始まる。教会の指導者たちが改革を歓迎することは、めったにない。歴史はくり返す。今の指導者たちは、たいてい居心地のよい立場にいすぎて、自分の側に犠牲を求めるかもしれない新しいことを望まない。しかし、神の火は、いけにえの上にしか下らない。空の祭壇に火が下ることはない。冷たい主知主義、形式的な教会主義、聖職者による支配は、福音の本質とはまったく相いれない。神に感謝！　指導者たちの中にも例外はある。しかし、私たちは仕えるために救われたのだ。本当の教役者は、しもべである。イエスは、仕えられるためではなく、仕えるために来られた。あの力ある伝道者チャールズ・G・フィニーでさえ、十五年にわたって主のために驚くほど働いたあと、ひどく貧しかった。それで、家族を養うための牛を買うのに、旅行かばんを売らなければならなかった。

スメール兄弟がレイク・アベニュー教会で語る前の晩、私たちは二人で、真夜中過ぎまで祈って過ごした。スメール兄弟は日曜日に二回説教した。彼はこの時のために、神からすばらしい油注ぎを受けていた。私たちは礼拝と礼拝のあいだの時間を、祈って過ごした。彼のメッセージは、ウェールズのリバイバルについてだった。人々は大きく心を動かされた。スメール兄弟は、まもなく新約教会を組織した。私は組織というものをあまり好まなかったが、彼らと一緒にいるべきだと感じて、創立会員になった。

私たちは、家賃と食べ物のお金がなければ、追い出されて飢えるしかないところまで来た。机に向かって書きものをしていると、主が語りかけて、ジョージ・クレアリー兄弟に会いに行くようにと言われた。その示しがあまりに強かったので、私はペンを置いて、すぐに出かけた。クレアリー兄弟夫妻としばらく祈ったあと、私は帰ろうとした。私たちの必要については、ひと言も話していなかった。すると二人は、主はこれを渡させるためにあなたをここへよこされたのです、と言って、2ドル50セントを手渡してくれた。私が着く前に、悪魔は三度、クレアリー兄弟を家から追い出そうとしていた。しかし神が彼を引き止めておられた。少しあとで、別の兄弟が1ドルをくれた。主がそうするように彼に示されたのだ。こうして、家賃の3ドルと、食べ物を買う50セントがそろった。そのころは、今よりも、50セントでずっと多くの物が買えた。

それからまもなく、ある朝、私たちは食べ物にひどく困って、家でひざまずいて祈っていた。すると、食料品店の主人が乗りつけて、5ドル分の食料品を置いて行った。だれが届けさせたのか、主人は教えてくれなかった。だれかが私たちのために代金を払ってくれていたのだ。小さなルースが熟していない桃を食べて、また死にかけた。祈りがこの子を救った。スメール兄弟はこのころバーバンク会館を借り、そこで集会を開く準備をした。私は、バーバンク会館の準備が整

うまでのあいだ、彼のために四番街ホーリネス会館を確保した。主は、もう一つのトラクトを与えてくださった。題は『祈れ！　祈れ！　祈れ！』である。私は信仰によってそれを印刷屋へ持って行き、主はちょうど間に合うようにお金を送ってくださった。それは、祈りを強く勧めるトラクトだった。昔の預言者たちのように、私たちは、自分のために祈ろうとしない人々のために祈らなければならない。人々に代わって、その罪を告白しなければならない。

あるとき、ベーマー兄弟と私が祈っていると、私たちが祈っていたいくつかの集会で、すばらしく御霊が注がれた。私たちは、その集会のために神をしっかりとらえたと感じていた。あとで届いた知らせが、私たちの確信が正しかったことを証明した。祈りは物事を変える。正しい祈りには、すばらしい力がある。カルメル山のエリヤがその例である。彼は「わたしたちと同じ人間」だった。『義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである』（ヤコブ五・一六）。このことでは、告白も必要かもしれない。『だから、互に罪を告白し合いなさい』。

このころ、ロサンゼルスで、月8ドルの小さな家を貸そうと言ってくれる人があった。しばらく前から、主は私たちがロサンゼルスに戻ることを望んでおられると感じていた。主は最初のひと月分の家賃を送ってくださり、パサデナのペンフィールド兄弟が、引っ越しのためにラバの荷車を貸してくれた。私たちは、タウン・アベニュー619番地の敷地の奥に住んだ。表の家には家主の女性が住んでいた。1905年9月27日のことだった。

ひと晩じゅう祈っているうちに、サンディエゴへ行くようにと強く示された。それで、そこのペニエル・ミッションを任されていたティリー・ヘフナー姉妹に手紙を書いた。頼みもしないのに、旅費のお金が入って来た。それは神のみこころだったのだ。サンディエゴのペニエル・ミッションで説教し、路傍集会も開いた。警察は酒場などとぐるになって、ずいぶん私を妨げた。しかし神は力と勝利を与えてくださった。そこでは、病気の人々を何人も訪ねて一緒に祈った。また、メキシコのティファナまで、ちょっと足を延ばした。

サンディエゴでは、「燃える柴」の人々が、聖徒たちの霊をひどくそこなっていた。聖徒たちは、とげとげしく、かたくなになっていた。愛はほとんどなく、争いといさかいばかりだった。神は、いつものように、私を平和の使者としてくださった。私はいつも、キリストの「一つのからだ」の側に立ってきた。ヘフナー姉妹は、私が訪ねたことで大いに励まされたと言ってくれた。彼女は、とても苦しい戦いをしてきたのだ。そこを発つ前に、私はひどい病気になり、寒気と熱で、ひと晩じゅう眠れなかった。しかし、このとき私は不思議な経験をした。私は流感にかかっていた。痛みにさいなまれ、熱で燃えるようだったが、すさまじい祈りの霊が私の上にあった。私は、別々の二人の人間のようだった。頭は体から離れて、神に向かって生き生きと働いているようだった。自分が霊だけになったように感じた。体のほうは、死ぬかと思うほど悪かった。苦しみは、かえって私の魂を体の外へ押し出すように思われた。それは奇妙な経験だった。このことで、悪魔は負けたに違いない。私の霊は、体の状態よりもすっかり高く引き上げられているように思われた。

日曜の朝、フレンド派の教会でウェールズのリバイバルについて語り、それからロサンゼルスの家に帰った。体があまりに弱っていたので、担架で汽車から降ろされることになるのではないかと心配した。しかし、無事に家に着いた。お金は、ちょうど家に帰れるだけあった。私たちは、またお金に行き詰まった。ある兄弟が、主から私たちが困っていると示されたと書いて、手紙に2ドルを入れて送ってくれた。私たちは懸命に祈っていた。たとえ従うことに何かの犠牲が伴っても、神が語りかけることのできる所に生きているのは、なんと幸いなことか。今日、そこに生きている人は少ないようだ。だから、神の働き人たちのあいだに、これほどひどい苦しみがあるのだ。多くの本当の働き人が激しく憎まれているのは、ただ次のわけによると私は確信している。働き人の祈りを感じ取り、助けるようにと神に語られている人々が、主の声に従おうとしないのだ。自分本位は、人を滅びに至らせる罪である。神にささげる者が、それによって損をすることは決してない。じつに、私たちが本当に蓄えることのできるものは、神にささげたものだけだ。ほかのものは、結局すべて失われてしまう。

ロサンゼルスでは、ほとんど毎日、一人一人への伝道、トラクト配り、祈り、あるいはどこかの集会での説教をしていた。キリスト教の新聞雑誌にも、絶えず記事を書いていた。パサデナの天幕集会へ行く前に、断食して祈った。説教のとき、主がすばらしく油を注いでくださり、二十人が祭壇の前に出て来た。このこ

ろには、とりなしの霊がすっかり私をとらえていたので、私はほとんど昼も夜も祈っていた。断食も多くしたので、妻は、ときには私のいのちをあきらめかけるほどだった。わが主の悲しみが、私をとらえていた。私は、主とともにあの園にいた。主の「魂の苦しみ」が、いくらか私の上にも下っていた。私は主のように、リバイバルを求める祈りと涙への答えを見るまで、生きていられないのではないかと恐れるようになった。しかし主は私を安心させてくださった。一人ならぬ御使を送って私を力づけてくださったのだと、私は確信している。滅びゆく世界のために「キリストの苦しみの杯を満たす」とパウロが言ったことを、私はいくらか実感しているように感じた。私が正気を失いかけているのではないかと心配する人さえいた。彼らには、私のすさまじいほどの憂いが理解できなかったのだ。今日でも、このようなことを理解できる人は多くない。『生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない』。それは彼には「愚かなもの」なのだ。自分本位の霊には、このような犠牲は決して理解できない。しかし、『自分の命を救おうと思う者はそれを失う』。『一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである』。私たちの主は、喜びの人であるとともに、「悲しみの人」でもあった。

私はたびたび、帰りの電車賃を神に頼らなければならないまま、パサデナへ出かけた。あるとき、ベーマー兄弟は、私が来ていると示された。彼がリトル・ペニエル・ミッションへ行ってみると、私がそこにいた。私たちは数時間、祈って過ごした。それから、彼が私の帰りの電車賃を払ってくれた。そのころ、私たちはよく、夜通し一緒に祈った。ひと晩じゅう主とともに過ごすことは、大きな特権に思われた。主はすぐ近くに来てくださった。そのようなときには、少しも疲れを感じないようだった。ベーマーは庭仕事をしていた。私は彼に一文も求めたことはなかったが、彼はいつも何かをくれた。ついに神は、彼のお金だけでなく、彼の生涯をも、ご自分の奉仕のために手に入れられた。彼はすばらしい祈りの人だった。神は私たちに、「だれをも肉によって知ることはしない」とはどういうことかを教えてくださった。神は私たちを、それほど高い関係に引き上げてくださったので、私たちの交わりは御霊においてだけのものになったように思われた。それを越えたところでは、私たちは互いに死んでいた。

エバン・ロバーツに三度目の手紙を書き、ウェールズで私たちのために祈り続けてくれるよう頼んだ。そのころ、私は説教のあと、たいてい聖徒たちにひざまずくよう呼びかけた。すると私たちは、立ち上がれるようになるまで、何時間も祈っていた。主は私を導いて、国じゅうの多くの指導者たちに、リバイバルのために祈ってほしいと手紙を書かせられた。祈りの霊は絶えず強まっていた。新約教会は、組織を大きくするにつれて、祈りの霊を失っていくように見えた。今度は、この奉仕を私たち数人に押しつけようとした。神がそれを喜ばれないことがわかっていたので、私は彼らのために大きな重荷を負うようになった。彼らは、二の次のことに手を出しすぎていた。主はほかの群れを見つけなければならなくなるのではないか、と思われはじめた。私は、ほかでもないこの人々の群れに、大きな望みをかけていた。しかし今、敵が彼らをわき道へそらしているようだった。少なくとも、神が彼らのために備えておられる最善を逃させようとしていた。

今では、祈りを組織しようとさえしていた。それはできないことである。祈りは、おのずからわき出るものなのだ。群れとして祈りの奉仕とリバイバルの霊を失うくらいなら、組織しなかったほうがよかった、と私は感じた。彼らが初めに召されたのは、まさにそのためだったのだ。彼らは、教会と組織を持つことに野心を抱くようになっていた。「周りのほかの国々（教会）のように」ならずにいることは、彼らにはつらいことのようだった。そして、まさにここで、彼らは確かにつまずきはじめた。教会の仕事が増えるにつれて、本当に大切なことが見失われていった。そして、今日のペンテコステのミッションも、同じ危険に直面しているように見える。人の組織と人の計画は、神の自由な御霊に、ほとんど余地を残さない。純粋に霊的な御国を建てようとしながら、失敗した者と見られることをいとわないのは、大きなことである。神の国は、「見られるかたちで」来るものではない。

二番目によいものを選ぶのは、とてもたやすい。祈りの生活は、建物や組織よりも、はるかに必要とされている。建物や組織は、しばしば祈りの代わりになってしまう。魂が御国に生まれるのは、ただ祈りによるのである。

私は、新約教会が党派的な、教派的な霊を育ててしまうのではないかと恐れた。ある金持ちの婦人が、会堂を建てるお金を出そうと申し出た。悪魔は高い値をつけて来たのだ。しかし婦人は、まもなく申し出を取り下げた。正直に言えば、私はそれがうれしかった。そうなっていたら、彼らはまもなく、建てること以外には何をする暇もなくなっていただろう。それが、彼らのリバイバルの終わりになっていただろう。私たちが召し出されたのは、ロサンゼルスに福音を伝えるためであって、また一つの教派や党派心を築くためではなかった。町にすみやかに福音を伝えるのに本当に必要なもの以上の組織や仕組みは、私たちには要らなかった。互いに張り合う別々の教会組織は、もう十分すぎるほどあったではないか。それぞれが、おもに自分の利益と、発展と、栄光のために働いていたのだ。

このころ、あるとき、家には少しの乾いたパンのほかに食べる物が何もなかった。すると、ベーマー兄弟から、1ドル入りの手紙が届いた。彼は神と親しく交わっていた。聖徒たちの信頼を揺るがす偽者がこれほど多くなければ、聖徒たちは本当の働き人にもっとよくしてくれるのかもしれない。仲間の中に偽りの羊飼いや人を欺く者が一人いるたびに、本当の働き人はそれだけ苦しくなるのだ。

新約教会は、主知主義のほうへ流されて行くように見えた。私はそのことで大きな重荷を負った。ある集会のとき、私は祈りの中で声を上げてうめいた。あれほどの集会を経てきたあとでは、この状態は耐えがたかった。長老の一人が、このことで私を厳しくとがめた。『ああ、勇士たちは、ついに倒れた』という言葉が、耳の中で鳴り続けた。もっとも霊的な何人かの人々が、私と同じ重荷を負っていた。

祈りは、またいくらか勝利を得たようだった。まもなく、教会ですばらしい集会があった。日曜の夜の一回の礼拝で、百人が祭壇の前にひざまずいた。パサデナでペニエルの若者たちと会って祈ると、突き抜けるような時があった。主がまもなく力強く働かれると私たちは感じた。ロサンゼルスの七番街とスプリング通りの角に、ブラウンリー兄弟の天幕があった。そこでは、深い祈りの霊があり、祭壇の前での力強い祈りの時があった。神が何か並はずれたことをなさろうとしている、という気配があった。祈りの霊は、ますます重く私たちの上にのしかかってきた。ロサンゼルスに移る前、パサデナでは、昼間に寝床に横になって、重荷の下で転げ回り、うめいたものだった。夜は、祈りの霊のために、ほとんど眠れなかった。重荷を負っているあいだは食べ物がほしくなかったので、何度も断食した。あるときは、ほとんど二十四時間、休みなく魂の産みの苦しみの中にあった。それで、私の力はほとんど尽きてしまった。祈りが文字どおり私を焼き尽くした。私は眠りながら、ひと晩じゅううめいていた。

そのころの祈りは、形式的なものではなかった。神が息を吹き込まれたものだった。祈りが私たちに臨み、私たちを圧倒した。私たちが自分でかき立てたのではなかった。私たちは、御霊によって、本当の魂の産みの苦しみにとらえられていた。それは、神の御霊に対してまったくの暴力をふるうのでなければ、振り払うことはできなかった。お産をしている女が陣痛を振り払えないのと同じである。それは、聖霊による本当のとりなしだった。

第二章　スメール牧師、ウェールズから帰る（その三）

数日前から、エバン・ロバーツからまた手紙が来るような気がしていた。まもなく手紙が届いた。こう書いてあった。「ウェールズ、ラッハー、1905年11月14日。親愛なる戦友へ。この恐ろしい戦いの中にいるあなたを励ますのに、何を言えばよいでしょうか。これはまことにすさまじい戦いだと思います。悪しき者の国は、四方から攻め囲まれています。ああ、何百万もの祈り。それはただの祈りの形ではなく、白い御座へまっすぐ道を見いだしていく魂なのです。ウェールズの人々は、この一年のあいだに祈ることができるようになりました。主があなたがたを祝福し、力強い注ぎを与えてくださいますように。ウェールズでは、聖なるかたが会衆の上にとどまって、キリストに従う者たちが心を開くのを待っておられるかのようです。この前の土曜の夜、聖霊の力強い注ぎがありました。その前に、本当の礼拝についての人々の考えが正されました。一、神から受けるためではなく、神にささげるため。二、自分を喜ばせるためではなく、神を喜ばせるため。それで、神を仰ぎ、敵のことも人への恐れも忘れて祈ると、御霊が下られたのです。神があなたの祈りを聞き、あなたの信仰を強く保ち、カリフォルニアを救ってくださるように祈っています。戦いにおけるあなたの兄弟、エバン・ロバーツ」。

これは、ウェールズのエバン・ロバーツから受け取った三通目の手紙だった。カリフォルニアで最後に勝利を得たことには、彼らの祈りが大いにかかわっていたと私は思う。

エバン・ロバーツは、自分と神とのあいだにあった経験をこう語っている。「この前の春のある金曜日の夜、寝る前に寝床のそばで祈っていると、私は、時も所もない大きな広がりへと引き上げられた。それは神との交わりだった。それまでの私にとって、神は遠いかただった。その夜は恐ろしかったが、それからは一度も恐ろしいと思ったことはない。あまりに激しく震えたので寝床が揺れ、目を覚ました私の兄弟は、私が病気になったと思って、私を抱きかかえた」。このあと三か月のあいだ、毎晩、午前1時から5時まで、エバン・ロバーツにこの経験が起こった。そのころ、彼は世界に向けて次のようなメッセージを書いた。「南ウェールズのリバイバルは、人から出たものではなく、神から出たものである。神は私たちのすぐ近くに来られた。この運動には、信条や教義の問題はない。私たちは教派の教えを説いているのではない。ただキリストの愛のすばらしさと美しさを教えているだけである。私のやり方について尋ねられたことがある。私にはやり方などない。何を語るかを前もって準備することは決してなく、それは神にお任せしている。私はこのリバイバルの源ではない。大勢になりつつある働き手の中の、ただ一人にすぎない。私は自分に従う人々を望まない。ただ、世界がキリストのものとなることだけを望んでいる。世界は大いなる信仰のリバイバルの入口に立っていると私は信じている。そして、それをもたらす助けをさせていただけるよう、毎日祈っている。ウェールズでは、数週間のうちにすばらしいことが起こった。しかし、それは始まりにすぎない。神の御霊が、激しい風のように世界を吹きわたるだろう。今は黙っている多くのクリスチャンが、この運動を導くようになるだろう。彼らは大いなる光を見て、今やみの中にいる何千もの人々にその光を照り返すだろう。神が力を与えてくださるので、何千もの人々が、私たちのなしとげたこと以上のことをするだろう」（エバン・ロバーツ）。なんと美しいへりくだりだろう。これが、あらゆる力の秘訣なのだ。

あるイギリス人は、ウェールズのリバイバルを目撃して、こう書いている。「救われていない人々のための、これほど本当の魂の産みの苦しみを、私はこれまで見たことがない。若いエバン・ロバーツが、悲しみに身をよじりながら、聴衆に祈るよう呼びかけるのを見た。『歌うな』と彼は叫んだものだ。『歌うには恐ろしすぎる』」（歌いすぎたために、人々から罪の自覚が取り去られてしまったことは、これまでにもよくあった）。

別の書き手は、人々を打ち砕いたのはエバン・ロバーツの雄弁ではなく、その涙だったと言っている。「彼は泣き崩れ、人々を屈服させてくださるようにと、激しく泣いて神に求めたものだ。苦しみもだえて祈り、涙はほおを流れ、全身はよじれていた。屈強な男たちが泣き崩れ、子供のように泣いた。女たちは悲鳴を上げた。泣き声と嘆きの声があたりに満ちた。エバン・ロバーツはあまりの苦しみに説教壇で倒れ、群衆の中にも気を失う者が多かった」。

そのあとのインドでの働きについては、こう書かれている。「インドの少女たちは（ラマバイのミッションで）、すばらしく取り扱われ、御霊のバプテスマを受けた。そうなる前に、少女たちはまず、自分の必要を鋭く示されて、すさまじく自分の体を打った。少女たちには大いなる光が与えられた。救い出されると、少女たちは喜んで跳びはねた。何時間も疲れることなく跳び、じつにそれによってかえって強くなった。自分の内に、また上に臨んだ燃えるような熱さに、少女たちは叫び声を上げた。大いなる光が目の前を通り過ぎるのを見て、倒れる者もいた。そのあいだに神の火が、罪のからだの肢体、すなわち高ぶり、怒り、世を愛する心、自分本位、汚れなどを焼き尽くした。少女たちは、勝利を得るまで、食べも眠りもしなかった。それから、喜びがあまりに大きかったので、聖霊のバプテスマを受けたあと二、三日は、食べ物をほしがらなかった。あるときは二十人ほどの少女が恍惚状態に入り、何時間も、この世のことがわからなくなった。三、四日そうしていた者もいた。そのあいだ、少女たちは歌い、祈り、手をたたき、転げ回り、あるいはじっと座っていた。我に返ると、少女たちは、天の御座と、白い衣を着た群衆と、耐えられないほどまばゆい栄光を見たと語った。まもなく、その場所全体が燃え立った。授業は休みにしなければならなかった。少女たちは食べることも眠ることも忘れ、昼も夜も、まるまる祈りに費やした。ある夜、求めていた少女の一人の上に御霊が注がれた。隣で寝ていた友だちが目を覚まし、その子が火に包まれているのを見た。友だちは寄宿舎を走って横切り、その子に浴びせようと、桶に水をくんで来た。一時間もたたないうちに、敷地の中のほとんどすべての少女が、泣き、祈り、罪を告白していた。少女たちの多くは、不思議な、美しい、超自然の火をまとっていた」。

インドのほかの地方では、賛美歌がおのずから作られたことが、いくつかの集会の珍しい特色だった。カラ・キャンプでは、祈っていた小さな少女たちの一団の前で、壁に絵が現れた。それは、キリストのご生涯を超自然的に描き出していた。絵の中の人物は動き、色がついていた。一つ一つの場面は二分から十分ほど続いた。それから光はだんだん薄れて消え、しばらくすると新しい場面になってまた現れた。この絵は十二時間にわたって現れた。それを見たのは、孤児院の土地の子供たちと八人の宣教師だけではなかった。近くに住む土地のクリスチャンも、この不思議な光景を見に来た異教徒たちさえも見たのだ。これらの絵はみな、聖書の物語を忠実に描いており、まったく超自然のものだった。それは、異教徒たちのかたくなな心を打ち砕くのに、すさまじい力を持っていた。ウェールズでも、リバイバルのあいだ、火の玉のような色のついた光がたびたび見られた。

私は昼も夜もあちこちのミッションに通い続け、リバイバルのための祈りと信仰を絶えず勧めた。ベーマー兄弟と、また夜通し祈った。ある夜、新約教会で、会衆の上に深い祈りの霊があったとき、主が突然すぐ近くまで来られた。集会の周りから、主が私たちを取り囲んで迫って来られるかのように、その臨在が感じられた。人々の三分の二は驚いて跳び上がるように立ち、何人かは、帽子まで置き去りにして、あわてて会堂から逃げ出した。肝をつぶさんばかりだったのだ。このように恐れさせるような、目に見える並はずれた現れは何もなかった。それは、主が近くにおられることの、超自然の現れだった。こういう人々が主を見たら、どうするのだろうか。

私は、もっと自由に祈り、主を待ち望むことができるように、家で小さな祈祷会を始めた。集会では、祈りの霊が妨げられていたのだ。霊的な人々は、こうした機会に飢えていた。しかし指導者たちは私を誤解して、反対した。それから、家主の女性に悪魔が入り込み、私たちを家から追い出そうとした。彼女は神と正しい関係になかった。家賃は払ってあった。しかし敵は、彼女を用いようとした。戦いが始まっていた。新約教会では、人々が私の奉仕に反対しはじめた。ある姉妹は、私が始めた祈祷会をやめるよう説き伏せようとした。私は、このことについてのみこころを示してくださいと主に願った。主は来られて、私たちの小

さな家を栄光の雲で満たされた。私はその臨在に、ほとんど耐えられないほどだった。それで、私の心は決まった。『人間に従うよりは、神に従うべきである』。このころ、私はずいぶん批判を受けた。私が別の教会を始めるのではないかと、彼らは恐れていたのだと思う。しかし、そのときの私には、そんな考えはなかった。ただ、自由に祈りたかっただけだった。神に逆らって座礁したミッションや教会は数多い。

キリスト教の新聞雑誌に、さらに記事を書いた。次はその抜粋である。「ゆっくりと、しかし確かに、南カリフォルニアの聖徒たちに、ある確信が臨みつつある。神はウェールズと同じように、ここにも御霊を注ごうとしておられるのだ。私たちは、これまで夢にも思わなかったようなことが近いうちに起こると信じている。この国全体に、まさに『ペンテコステ』が来ると確信している。しかし、ペンテコステの力がなければ、ペンテコステの結果を得ることは決してできない。そしてそれは、ペンテコステの現れを伴うことになる。神と顔と顔とを合わせて会いたいと思う人は少ない。『肉と血とは神の国を継ぐことができない』」（『クリスチャン・ハーベスター』）。

また、こう書いた。「リバイバルの流れが、私たちの戸口をかすめて流れている。私たちはその力強い流れに身を投げ、栄光の勝利へと乗って行くだろうか。神のためのすばらしい可能性に満ちたこの時の一年は、ふつうの時の百年に値する。『ペンテコステ』が私たちの戸をたたいている。この国のリバイバルは、もはや疑いのないことである。ゆっくりと、しかし確かに潮は満ちてきた。ごく近いうちに、すべてを押し流す救いの大洪水が来ると私たちは信じている。私たちのキリストのためのこの栄光の勝利に、ウェールズがいつまでもひとりで立っていることはないだろう。神の息である聖霊に吹かれて、リバイバルの霊が私たちに臨みつつある。雲は大雨をはらんで急速に集まっている。その雨が降るのも、もう少しのことだ。

名もなく、さげすまれた境遇のちりの中から、英雄たちが起こるだろう。その名は、天の永遠の栄誉の書に輝かしく記されるだろう。天地創造の夜明けのときのように、御霊は今また私たちの国をおおっておられる。そして神の命令が出される。『光あれ』。兄弟姉妹よ、私たちがみな神を信じたら、何が起こるか想像できるだろうか。ここにいる私たちの多くは、ただそのためだけに生きている。信じる祈りが、昼も夜も、おびただしく御座へと上っている。ロサンゼルスも、南カリフォルニアも、この大陸全体も、まもなく必ず、神の御霊と力による力強いリバイバルの産みの苦しみの中に置かれるだろう」（F・バートルマン、『ウェイ・オブ・フェイス』、1905年11月16日）。

12月14日、私は三十四歳になった。自分はこれまで神のためにほとんど何もしてこなかったと感じた。もっとはっきりと神に用いられたいと切に願った。家には一文もなく、小さなルースに飲ませる牛乳もなかった。しかし、祈りの中での激しい戦いのあと、神は私たちのもとに助けを届けてくださった。今日でも、ダニエルの時代と同じように、答えはしばしば妨げられる。悪魔が聖徒たちに働きかけて、ささげるのを控えさせるのだ。天幕集会へ行って説教すると、その集会に火が下った。魂が救われた。私たちはしばらく前から、ペンテコステを求めて祈るように導かれていた。それはもう始まりかけているように思われた。もちろん私たちは、本当の「ペンテコステ」がどういうものかを知らなかった。しかし御霊はご存じで、私たちが正しく求めるように導いてくださった。

私は万年筆を求めて祈っていた。ある兄弟が一本見つけて、私にくれた。彼は自分の万年筆をもう持っていたのだ。私は、太平洋岸と外国の伝道地の三十のミッションに、一通ずつ、リバイバルのための祈りと信仰を勧める手紙を書いた。しかし、郵便代がなかった。書いているうちに、ある姉妹が入って来て、4ドルを手渡してくれた。私は、これらの手紙が主から出たものであるなら、そのしるしを与えてくださいと願っていたのだ。キリスト教の新聞雑誌のための記事も、さらにいくつか与えられた。ベーマー兄弟とまた夜通し祈ったあと、勧めのメッセージが与えられた。私はそれを、いくつもの教会やミッションで語った。

新約教会は神に従いそこなっていると私は感じ、御霊がどこに現れるのかを見きわめようとしていた。多くの所で、人々は私のメッセージの切っ先を鈍らせようとした。私のねらいは、彼らにはまっすぐすぎたのだ。しかし私は、悪魔を逃がすまいと決心した。どこでも、のろいとなっていたのは霊的な高ぶりだった。人々は、神から自分の裸を隠していた。しかし、神のみことばの試しに耐えないものは、すべて取り除け。党派心も取り除け。魂に手を届かせ、救わなければな

らないのだ。神のメッセージを妨げようとするのは、稲妻を手でつかもうとするようなものだ。

このころ、主は、書くべき新しいトラクトをいくつか与えてくださった。しかし私は、自分のおもな働きは、人目につかない下に降りて祈ることだと、これまでになくはっきりわかった。とりなしの霊が私から離れないようにと、たびたび祈った。マザー・ウィートンが、また東部からやって来た。神は、私の祈りを助けるために彼女を送ってくださったのだ。何日ものあいだ、私は泣きながら祝された重荷を負った。そのあいだに、私の心はとても柔らかくなった。ある夜、あまりに重荷が大きくて眠れなかった。私は、表の家の家主のもとに泊まっていたマザー・ウィートンを呼んだ。彼女は、私が祈り抜くのを助けてくれた。その戦いは、私ひとりには厳しすぎたのだ。多くの人が、神が私に与えてくださった祈りの奉仕から、私を引き離そうとしていた。しかし、『ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか』という言葉が、耳の中で鳴り続けていた。祈りによって「キリストの苦難にあずかる」ことは、何よりも甘美な奉仕である。

マザー・ウィートンが着く何日か前に、主は、彼女を送ろうとしておられることを私に示してくださっていた。私は彼女と連絡を取っていなかった。あとで彼女が話してくれた。冬を過ごすためにフロリダへ発とうとしていたとき、主がロサンゼルスへ行くようにと言われたのだという。私がひどく祈りの重荷を負っているのを見て、彼女は初めて、何のためだったのかがわかった。私は何か月ものあいだ、一瞬一瞬、途切れることなく祈りの霊の中に生きた。それは、私にとって本来の住みかのようになった。

主はベーマー兄弟に、私たちの家賃を全部引き受けるようにと言われた。私の心が、すっかりとりなしに向けられるようにするためである。これはすばらしいことだった。しかも彼の稼ぎは、一日わずか2ドルだった。しかし彼は神に従った。今日、主がそのようなことについて、だれかに語りかけることがおできになればと、私は何度願ったことか。それは主の働きにとって、どれほど大きな意味を持つことだろう。

このころ、パサデナの病気の女性にしきりに頼まれて、たびたび祈りに行った。彼女はかなりの資産を持っていて、よく、わずかながらお金で私たちを助けてくれた。しばらくのあいだ、主はこの方法を用いて、私たちの暮らしの必要をおおむね満たしてくださった。私はよく、必要なだけの額を私に渡すよう彼女に示してくださいと主に願った。何度か、祈ったとおりの額をちょうど受け取った。ときには、それは戦いだった。彼女はとても意志が強く、自分のお金を愛していた。そのうえ、彼女はひどく耳が遠かった。私は彼女と話ができなかった。それでも、私は彼女に一文も求めたことはなかった。彼女は力あるホーリネスの伝道者だったが、主の定められた道からはずれてしまっていた。彼女が死ぬと、お金はすべて不信仰な親類の手に渡り、主はもうそれを少しも得られなかった。彼女は耳が遠かったので、何かを伝えたいときは、私はいつも紙に書いた。彼女の霊に、私はほとんど疲れ果てた。それほど重苦しかったのだ。

ある日の午後、新約教会での礼拝のあと、私たち七人は、神の摂理に導かれたかのように、手をつないで心を合わせて祈った。主が「しるしを伴わせて」、すみやかに御霊を注いでくださるようにと求めたのだ。そのとき、どこからそんな考えが出たのか、私にはわからない。主ご自身が思いつかせてくださったに違いない。私たちは「異言」のことなど考えていなかった。そういうものがあると聞いたことのある者は、一人もいなかったと思う。これは1906年2月のことだった。

ある祈祷会でひざまずいていると、主は、立って七番街とスプリング通りの角のブラウンリー兄弟の天幕へ行くようにと言われた。主は、そこの人々のためのメッセージを与えてくださった。私は大きな重荷を負って出かけた。語り終えると、本当に心が砕かれる時があり、私たちは主の前で泣いた。

それから、心を動かす『魂の産みの苦しみ』というトラクトを書いた。主はまた、血潮のことでも、私を深く取り扱っておられた。ベーマー兄弟とまた夜通し祈った。主は、パサデナのいろいろな集会で、恵まれた奉仕を与えてくださった。ある集会では、魂のための重荷の下で、二時間、身動きもできずに横たわっていた。

やみの力と祈りの中で絶えず戦っていたので、私の神経はひどくすり減ってきていた。妻がひと晩じゅう具合が悪く、私は朝まで起きて妻のために祈った。妻は、またお産が近づいていた。3月4日、日曜日の午後1時45分、妻は私たちにとって初めての男の子を産んだ。私たちはその子をジョンと名づけた。生まれる前、母親の容体はとても危なかった。先に破水してしまったお産だったのだ。しかし神はあわれんでくださった。このときも、神はすばらしい方法で私たちの必要を満たしてくださった。

私は、いろいろな州の五十人のホーリネスの伝道者に、私のリバイバルのトラクトを一包みずつ郵便で送った。リバイバルのための信仰と祈りをかき立てるためである。それからまもなく、さらに八十人の牧師と伝道者に、一包みずつ送った。トラクトに励まされたと、礼状をくれた人もいた。また夜通し祈ってから、七番街の天幕集会に再び出かけた。私が語ろうとしたちょうどそのとき、一人の男が跳び上がり、伝えなければならないメッセージがあると言い出した。彼は、空の荷車のように半時間がらがらと音を立てたが、何も語らなかった。それから私が立ち上がった。ところが、彼はまた跳び上がって、しゃべりはじめた。明らかに、悪魔が私のメッセージを妨げるために彼をそこに置いていたのだ。とうとう彼は、自分の主人にあまりに忠実に仕えて、手がつけられなくなった。主が私に秩序を取り戻させてくださり、私はメッセージを語った。集会は勝利のうちに終わった。悪魔には良心がなく、肉には分別がない。多くの人は、従うことも、礼儀も、ほかの何も、ふつうの作法さえ学んだことがない。自分を偉いと思う霊は、この世でもっとも胸の悪くなるものの一つである。

エリヤの時代のように、満たすべき空の器がなくなると、油（聖霊）は流れるのをやめる。人々は、自分に神が必要だと感じていない。しかし、飢えた心のあるところでは、どこでも神がそれを満たしてくださる。『富んでいる者（満ちている者）を空腹のまま帰らせなさいます』。ある夜、すさまじい重荷があって、家で休んでいられなかった。どこへ行くあてもなく、外へ出た。御霊は私を七番街の天幕へ導かれた。そこで私は、半ばひざまずいたままメッセージを語った。聖徒たちは、祈るために祭壇の前へ群がった。

私たちは二時間そこにとどまり、そのあいだ御霊が力強く働かれた。すばらしい訪れだった。私には書くべきトラクトがさらに与えられ、一度に、いろいろな種類のものを三万四千部注文した。私には本当のトラクトの奉仕があった。その代金も与えられると信じる信仰があったのだ。

戦いはますます激しくなっていった。3月26日、ボニー・ブレー通りの家庭集会に行った。そこでは、白人の聖徒も黒人の聖徒も、一緒に集まって祈っていた。これより少し前に、別の所の家庭集会に出て、そこで初めてシーモア兄弟に会った。彼はテキサスから来たばかりだった。黒人で、とても飾り気がなく、霊的で、へりくだった人だった。彼はボニー・ブレー通りの集会に通っていた。片方の目が見えなかった。

トラクトの代金に25ドルが必要だった。ある人がそれを送ってくれるように祈れと示された。その人は、私の必要を何も知らなかった。その日の午後、郵便でたった一通の手紙が届いた。それはまさにその人からで、ちょうど25ドルの小切手が入っていた。私が祈る前に、主はもうそのお金を送り出しておられたのだ。

3月28日、マザー・ウィートンと一緒に、またボニー・ブレー通りの集会に行き、新約教会での徹夜の祈りに出た。私たちは、住むためのもっと広い家を求めて祈っていた。小さな部屋が二つあるだけで、祈ったり書いたりする静かな場所がなかった。それまではずっと、家族に囲まれながら、祈ることも書くこともしてきたのだ。ある日、道でフレッド・シェパード兄弟に会った。彼は、よい家を半額で、しかも最初の月は家賃なしで借りたい説教者を知らないかと尋ねた。家賃は月わずか10ドルだという。私はすぐに、自分で借りることにした。私たちはまさにこのことを求めて祈っていたのだが、彼はそれを知らなかった。こうして4月13日、東三十一番街714番地に移った。二部屋の小屋やあばら家に住んだあとでは、宮殿のように思われた。神は、すばらしく私たちに備えてくださっていた。

3月の終わりごろ、主は『最後の呼びかけ』という題のトラクトをもう一つ与えてくださっていた。これは、人々を目覚めさせるために力強く用いられた。次はその抜粋である。「そして今、もう一度、この世の終わりのときに、神は呼んでおられる。最後の呼びかけ、真夜中の叫びが、今や私たちに迫り、耳にはっき

りと響いている。神はこの世に、もう一度、最後の機会を与えられる。最後の呼びかけ、世界に及ぶリバイバルである。そのあとに、全世界へのさばきが来る。

何か途方もない出来事が、今にも起ころうとしている（以下略）」。

第三章　「アズサ」に火が下る（その一）

4月15日、日曜日の朝、私は新約教会のバーバンク会館に行った。そこに一人の黒人の姉妹がいて、「異言」で語った。これは大きな騒ぎを引き起こした。礼拝のあと、人々は歩道にいくつもの小さな群れになって集まり、これはいったい何事だろうと尋ね合った。ペンテコステの「しるし」のように思われた。それで私たちは、その数晩前の4月9日に、ボニー・ブレー通りの小さな家に御霊が下っていたことを知った。そこの人々は、しばらく前から、注ぎを求めてひたすらとどまり待っていた。黒人と白人のひと握りの聖徒たちが、毎日そこで待ち望んでいたのだ。ちょうどまた、復活祭の時期だった。どういうわけか、私はその集会に居合わせる恵みにあずからなかった。そこでは何人もが「異言」で語ったのだった。私は午後、ボニー・ブレー通りの集会に行った。神が力強く働いておられた。私たちは何か月ものあいだ、勝利を求めて祈ってきた。今やイエスは再び、多くの人に「ご自分の生きていることを示して」おられた。先駆けの人々が突破口を開き、大勢がそれに続けるようになったのだ。

集会には、へりくだりの霊が全体に現れていた。人々は神に心を奪われていた。明らかに、主はついに、ご自分の思うままに働くことのできる小さな群れを見いだされたのだ。それはいつものように、教会の外にいる群れだった。この国には、それができるミッションは一つもなかった。どこもみな人の手に握られていた。御霊は働くことがおできにならなかった。はるかに大きなことを標榜していたほかの所は、失敗していた。人が重んじるものは、またしても素通りされた。そして御霊は、いつものように既成の教会の外で、粗末な「馬小屋」の中に再び生まれたのだ。

御霊が注がれるときには、いつも、悔い改めとへりくだりのうちに、一つのからだが備えられなければならない。宗教改革の説教は、マルティン・ルターによって、ウィッテンベルクの広場の真ん中にある崩れかけた建物で始められた。ドービニェはそれを次のように記している。「ウィッテンベルクの広場の真ん中に、古い木造の礼拝堂が立っていた。長さは九メートル、幅は六メートルほどで、壁は四方からつっかい棒で支えられていたが、崩れかけていた。板で作った高さ一メートルほどの古い説教壇に、説教者が立った。宗教改革の説教が始まったのは、このみすぼらしい場所だったのである。神の栄光を回復するはずのものが、このうえなく粗末な所に置かれることが、神のみこころだった。いわば神は、このみすぼらしい囲いの中で、愛する御子が二度目に生まれることを望まれたのである。世界には何千もの大聖堂や教区教会が満ちている。しかしそのころ、その中で、神が永遠のいのちの栄光ある説教のために選ばれたものは一つもなかった」。

ウェールズのリバイバルでは、イングランドの偉大な聖書講解者たちが、やって来て、粗野で働き者の炭坑夫たちの足もとに座らなければならなかった。そして、神の驚くべきみわざを見たのだ。このころ、私は『ウェイ・オブ・フェイス』にこう書いた。「本物が私たちのあいだに現れつつある。全能者は再び、パロの魔術師たちと剣を交えられるだろう。しかし、多くの者は神を拒み、冒涜するだろう。神に従うと公言する者たちの中にさえ、神を認めない者が多いだろう。私たちは『ペンテコステ』を求めて祈り、信じてきた。それが来たとき、私たちはそれを受け入れるだろうか」。

今のペンテコステの現れは、大草原の大火のように一瞬で燃え広がって、世界を燃え立たせたのではない。実際、神のみわざがそのように現れることは決してない。どうしても備えの時が要る。完成したものが初めから実現するのではない。人々は備えに気づかないので、それがどこから来たのかといぶかるかもしれない。しかし、備えは必ずあるのだ。また、神の御霊のどの運動も、悪魔の軍勢の攻撃をくぐり抜けなければならない。龍は、子を産もうとしている女の前に立ち、その子を食い尽くそうとかまえている（黙示録一二・四）。今のペンテコステの働きも、その始まりにおいてはそうだった。敵は多くの偽物を作った。神は

幼な子を、しばらくのあいだヘロデたちからよく隠しておかれた。幼な子が、彼らに立ち向かう力と見分ける力とを得るまでである。その炎は、批判やねたみや不信仰などの風から、主の御手によって熱心に守られた。それは、どのリバイバルもたどるのとほぼ同じ経験をした。敵は内にも外にもいた。ルターもウェスレーも、その時代に同じ困難を経験した。私たちは、この宝を「土の器」の中に持っている。自然の出産はどれも、快いとばかりは言えない事情を伴うものだ。神の完全なみわざは、人間の不完全さの中でなされる。私たちは「堕落」した被造物である。それなら、どうしてこの場合に完全な現れを期待するのか。私たちは今、「神に立ち返り」つつあるのだ。

ジョン・ウェスレーは、自分の時代についてこう書いている。「私が去るとほとんどすぐに、二、三人が、自分の想像を神からの示しと取り違えはじめた。そのあいだに、ほとんどあらゆる方面から、非難が洪水のように私に押し寄せた。サタンがキリストの麦の中に毒麦をまくからといって、驚いてはならない。これはいつの時代もそうだった。御霊が目覚ましく注がれるときには、とくにそうである。悪魔が千年のあいだつながれるまで、これからもずっとそうだろう。それまで悪魔はいつも、キリストの御霊のみわざをまねて、それを打ち消そうとするだろう」。ドービニェはこう言った。「宗教の運動は、ほとんどいつも、ほどよい節度を越えるものである。人間の性質が一歩前に進むためには、先駆者たちが何歩も進まなければならない」。

別の書き手はこう言っている。「信仰による義認の教えがルターのもとでよみがえったとき、どれほどの行き過ぎと熱狂が伴ったかを思い出してほしい。驚くべきは、ルターが教皇や枢機卿たちに立ち向かう勇気を持っていたことではない。彼の教えは、熱狂的な支持者たちに担ぎ上げられ、見せびらかされた。そのために彼が受けたさげすみに耐える勇気を持っていたことこそ、驚くべきなのだ。ウェスレーのもとで心の敬虔がよみがえったとき、それにつきまとった醜聞とつまずきを思い起こしてほしい。私たちが誤りとして非難するものは、『地平線の下にある何か大きな真理が、屈折して見えているもの』なのかもしれない」。

ジョン・ウェスレー自身、リバイバルがひとまず消えかかったあとで、こう祈ったことがある。「ああ主よ、あの昔のリバイバルを、欠点なしに送ってください。しかし、それがかなわないなら、欠点もろともに送ってください。私たちには、どうしてもリバイバルが必要なのです」。

アダム・クラークはこう言った。「人間の性質は、そしてサタンも、御霊の本物のみわざに、できるかぎり入り込もうとするものだ。そのみわざの信用を落とし、滅ぼすためである。それでも、宗教の大きなリバイバルでは、本当の火の中に野火が入り込むのを防ぐことは、ほとんどできない」。

サイス博士はこう言っている。「まことに、神が地上に種をまかれて、サタンがその上から種をまかなかったことは一度もない。キリストのための成長があって、悪しき者の植えたものがそれに混じり、それを妨げなかったことも一度もない。ふさわしくない要素も、醜いゆがみも一つもない完全な教会を見つけようとする者は、望みのない務めを自分に課しているのである」。

さらに別の書き手はこう言っている。「教会の歴史に起こったさまざまな危機の中で、仲間を驚かせるほどの聖なる向こう見ずさを表した人々が、前面に出てきた。ルターがウィッテンベルクの大聖堂の扉に提題を打ちつけたとき、用心深い人々はその大胆さに驚いた。ジョン・ウェスレーは、教会のあらゆる制約も宗教上の体面も顧みず、野原や裏道で説教した。そのとき人々は、彼の評判は地に落ちたと言った。いつの時代もそうだった。その時代の宗教の状態が、キリストのためにすべてを犠牲にする人を求めたとき、その求めが人を生み出した。主のために向こう見ずと見なされることをいとわない人が、いつも幾人かは見いだされたのである。人の意見やそのほかの結果をまったく顧みないことだけが、今の時代の差し迫った必要に応えることのできる態度である」。神は、私たちをヨルダンの渡り場まで導くモーセとして、スメール兄弟を見いだされた。しかし、私たちを導いて渡らせるヨシュアとしては、シーモア兄弟を選ばれたのである。

4月15日の日曜日、主は私を、十日間の特別な祈りに召された。私は大きな重荷を感じたが、主がとくに何を考えておられるのか、まったくわからなかった。しかし主は、私のためにある働きを用意しておられ、私をそれに備えさせようとしておられたのだ。4月18日の水曜日、あの恐ろしいサンフランシスコ地震が起

こった。周りの町々や田園も壊滅的な被害を受けた。サンフランシスコだけでも、一万人を下らない人がいのちを失った。主はご自分のやり方で、リバイバルを求める私たちの祈りに答えておられるのだと、私は深く確信した。『あなたのさばきが地に行われるとき、世に住む者は正義を学ぶ』（イザヤ二六・九）。人々が主の御声に無関心でいることのないようにと、すさまじい祈りの重荷が私に臨んだ。

4月19日の木曜日、私はサウス・メイン通り227番地のペニエル会館で、昼の集会に出ていた。座っていると、突然、床が私たちを乗せたまま動きはじめた。なんともいやな感覚が部屋じゅうに走った。私たちは恐れおののいて座っていた。多くの人が通りの真ん中に走り出て、建物が今にも倒れるのではないかと恐れ、不安そうに見上げていた。それは真剣な時だった。私は家に帰り、しばらく祈ったあと、主から、ある集会に行くようにと示された。その集会は、ボニー・ブレー通りからアズサ通り312番地に移っていた。彼らはそこで、町の中心にある古い木造の建物を借りていた。以前はメソジストの教会だったが、もう長いあいだ集会には使われていなかった。古材やしっくいなどの置き場になっていたのだ。彼らは、まわりの土やがらくたを片づけて、空の釘樽の上に何枚か板を渡せるだけの場所を作っていた。私の記憶が正しければ、席はおそらく三十人分ほどだった。それが、互いに向き合うように四角に並べてあった。

その晩、私はその集会へ行かなければならないという、すさまじい圧迫を感じていた。それが、私が初めて「アズサ・ミッション」を訪れたときだった。私たちと一緒に住んでいたマザー・ウィートンが、一緒に行くことになっていた。彼女はとても支度が遅く、私は待ちきれないほどだった。私がいつも「一匹狼」でいるのは、まさにこのためである。私の時間は私のものではない。私は主のしもべなのだ。『王の事は急を要する』。命令も受けていなければ、必要も感じていない人の支度ができるのを、一日じゅう待っているわけにはいかない。『だれにも道であいさつするな』。神の事は重大である。神は従うことを求められる。そうすれば、私たちもほかの人の邪魔にならずにすむ。神の期待を裏切るには、かかっているものがあまりに大きい。メッセージを持たない人は、ゆっくり後から来ればよい。悪魔はしばしばそういう人を大いに用いて、メッセージを持つ人を妨げるのだ。

ようやく「アズサ」に着くと、十二人ほどの聖徒がいた。白人もいれば黒人もいた。シーモア兄弟がそこにいて、集会を取り仕切っていた。「アズサ」では、「神の箱」がゆっくりと、しかし確かに動きだした。初めのころ、それは神ご自身が任命された祭司たちの「肩に」担がれていた。そのころ私たちには、肉に属する、入り混じった群衆を喜ばせるための「新しい車」はなかった。悪魔と戦わなければならなかったが、神の箱は牛（ものを言わない獣）に引かれてはいなかった。祭司たちは、多くの備えと祈りによって「神に生きて」いた。見分ける力は完全ではなく、敵がいくらか付け入って、働きにそしりを招いた。しかし聖徒たちは、まもなく「卑しいものから尊いものを取り分ける」ことを学んだ。初めのころ、地獄の連合軍が、断固として私たちに立ち向かってきた。祝福ばかりではなかった。実際、戦いはすさまじかった。悪魔はいつものように、できればこの働きを滅ぼそうと、国じゅうからねじけた霊をかき集めた。しかし、火を消すことはできなかった。力のある聖徒たちが、主を助けるために集められた。潮はしだいに満ちて、勝利に至った。しかし、それは小さな始まり、ごく小さな炎からだったのだ。

「アズサ」での最初の集会で、私はメッセージを語った。聖徒のうち二人が「異言」で語った。その言葉には大きな祝福が伴っているように思われた。神が「アズサ」で働いておられるというううわさは、すぐに広まった。あらゆる階層の人々が、集会に群がるようになった。多くは好奇心で来た不信仰な者だったが、神に飢え渇いている者もいた。新聞は集会をあざけり、ののしりはじめた。おかげで私たちは、ただで大いに宣伝してもらうことになった。それで群衆がやって来た。悪魔はまたしても、やりすぎてしくじったのだ。外からの迫害が働きを損なったことは一度もない。いちばん恐れなければならなかったのは、内で働く悪霊だった。降霊術者や催眠術師までが、調べに来たり、自分たちの力を試しに来たりした。それから、宗教上の不平屋や、いかさま師や、変わり者たちが、みな働きの中に居場所を求めてやって来た。いちばん恐れなければならなかったのは、こういう人々だった。しかしこれは、どんな新しい働きにもいつもつきまと

う危険である。彼らはほかに居場所がないのだ。このありさまは多くの人を恐れでおおい、その恐れはなかなか拭えなかった。それが御霊を大いに妨げた。多くの人が、悪魔に取りつかれはしないかと恐れて、神を求めることを怖がった。

「アズサ」の働きの初めのころ、私たちは、神の箱を押さえようとすると主が働きをやめられることを知った。悪の働きに人々の注意を引きすぎることは、あえてしなかった。そうすると恐れが続いて起こるからだ。私たちには祈ることしかできなかった。すると神が勝利を与えてくださった。祈りによって、頼りにできる神の臨在が私たちと共にあった。指導者たちの経験は限られていた。力ある敵を前にして、働きがともかくも生き延びたのは驚きである。しかしそれは神から出たものだった。それが秘訣だったのだ。

ある書き手は、うまくこう言っている。「ペンテコステの日に、キリスト教は新しい宗教として世界に立ち向かった。学校も、民族も、後ろ盾も持たずにである。古く尊いとされていたものはみな、一致して反対し、キリスト教の前に立ちはだかった。キリスト教は、そのどれにもへつらわず、なだめようともしなかった。キリスト教は、あらゆる既存の体制と、あらゆる悪い習慣を攻め、数えきれない形の反対を焼き払いながら進んで行った。それを、ただ『火の舌』だけでなしとげたのである」。

別の書き手はこう言っている。「初代教会が背教に陥ったのは、教会の力と支配が広がるのを見たいという願いが強くなったからである。一人一人の会員に新しい性質が与えられるのを見たいという願いよりも、そちらのほうが強かったのだ。私たちが、大勢の支持者を欲しがるとしよう。自分が真理と考えるものを示して引き寄せた群衆を喜ぶとしよう。そして、神のご計画に従って一人一人の性質が変えられるのを見たいという願いのほうが、強くないとしよう。その瞬間、私たちは、ローマとその娘たちへと続く、同じ背教の道を歩みはじめるのである」。

地震が多くの人の心を開いたことがわかった。私はとくに、最新のトラクト『最後の呼びかけ』を配っていた。地震のあとでは、それがまさにふさわしく思われた。4月22日の日曜日、私はそれを一万部、新約教会に持って行った。働き人たちは奪うようにしてそれを受け取り、たちまち町じゅうにまいた。

この国のほとんどすべての説教壇が、神は地震とは何のかかわりもないと証明して人々の恐れを静めようと、躍起になっていた。御霊は、このさばきを通して、罪の自覚をもって人々の心の戸をたたこうとしておられた。説教者たちがサタンに用いられて、その御声をかき消そうとしていることに、私は憤りを覚えた。ちょうど、のちにあの大戦のときに、サタンが彼らを用いて憎しみと殺し合いをあおったのと同じである。学校の教師たちまで、神は地震の中におられないと子供たちに信じさせようと骨を折った。悪魔はこの線に沿って大宣伝を繰り広げたのだ。

地震以来、私はずっと祈りに打ち込んでいて、ほとんど眠っていなかった。ロサンゼルスでの揺れのあと、主は私に、人々に伝えるためのメッセージがあるとはっきり言われた。その次の土曜日に、主はその一部を与えてくださった。月曜日に残りが与えられた。私は火曜日の午前0時30分に書き終え、印刷屋に渡せるようにした。主の前にひざまずくと、主は力強く私に臨んでくださった。そのメッセージが主から出たものであるという、力強いあかしだった。私は朝のうちに、それを印刷してもらうことになっていた。そのときから午前4時まで、私はすばらしくとりなしの霊に包まれていた。人々に向けられた神の怒りを感じ、それを祈りによって押しとどめているように思われた。罪に対する主のさばきを前にしても、人々はかたくなままだった。主はそれをひどく悲しんでおられることを、私に示された。サンフランシスコは、ひどく邪悪な町だった。

地震の中の主の御声をできればかき消そうと、地獄全体が動かされていることを、主は私に示された。主が私に与えてくださったメッセージは、この影響を打ち消すためのものだった。人々は、地震の中に主がおられることを否定していた。今こそ主が語られるのだ。主が私に与えてくださったのは、すさまじいメッセージだった。私はこの問題について、だれとも議論せず、ただメッセージを渡すことになっていた。人々は主の前で申し開きをすることになるのだ。このことで地獄全体が私に逆らっているのを感じたが、はたしてそのとおりになった。私は4時に床につき、7時に起きて、メッセージを持って印刷屋へ急いだ。

ほとんどすべての人の心にあった問いは、「神がこれをなさったのか」だった。しかし本能が、その場で人々に、神がなさったのだと教えた。悪人たちでさ

え、それに気づいていた。トラクトはすぐに組まれた。その日のうちに印刷機にかけられ、翌日の昼には、トラクトの最初の分を受け取った。私は、急いでできるだけ早く人々に届けなければならないと示された。そして、主に召された十日間の祈りが、ちょうど最初のトラクトを受け取った日に満ちたことに気づいた。今や、すべてがはっきりとわかった。

敵は、印刷機の中の活字の一部をつぶして、妨げようとした。私は前もって、このことに気をつけるよう印刷屋に言っておいた。しかし組み直されたので、時間を失うことはなかった。私は、ロサンゼルスでもパサデナでも、ミッション、教会、酒場、商店など、じつにあらゆる所で、すばやくメッセージを配った。そのうえ、近くの町々の働き人に配ってもらうため、何千部も郵送した。この企ての全体が、信仰の働きだった。私は1ドルもなしに始めた。しかし主は、必要に応じてお金を備えてくださった。私は毎日、懸命に働いた。オッターマン兄弟夫妻は、サンディエゴでそれを配った。勇気の要ることだった。多くの人がメッセージに激しく怒った。私はロサンゼルスで、それを持って、いかがわしい酒場をすべて回った。地獄全体がかき立てられた。ある男は、狂ったようにわめきながら、通りで私の後をつけて来た。私に乱暴しようと、商店の中までついて来た。しかし主が守ってくださった。すると男は、憎しみを見せつけようと、人目もはばからず、歩道の縁で私のトラクトを引き裂いた。多くの人が怒ってメッセージを投げ捨てたが、結局また拾い上げて読んだ。神が彼らをそれにつなぎとめておられるかのようだった。いちばん悲しかったのは、この件で、説教者のほとんどみなが敵に手を貸したことである。しかし私は、地震についての神のみことばを、ただ人々に渡していたにすぎなかった。

私はトラクトを、二万五千部ずつ注文した。一人の警官が私を追うようになった。それほど人々はかき立てられていたのだ。しかし御霊が警告してくださり、私は警官が来るのに気づいた。私はうまく身をかわすことができた。さもなければ、彼は、私の働きが終わらないうちに、トラクトの配布を止めてしまっただろう。地獄の怒りが、雲のように私に向かって押し寄せて来るのが感じられた。しかし神は、この働きのための勇気を与えてくださった。サンタバーバラでは何百部も配られた。パサデナ行きの電車でトラクトを配っていると、人々が手を伸ばして求めていたのに、車掌がやめさせた。車掌は、私を電車からほうり出すと脅した。悪魔がかき立てられていたのだ。南カリフォルニアの町々から何千部もの注文が来たので、郵便で送った。だれもがこのトラクトを読みたがった。もっとも、たいていの人にとって、それは火のように焼けつくものだったが。ときには、電車の中であまりに興奮して、自分の降りる通りに着く前に降りてしまう人もいた。私がそこにいるだけで、多くの人が罪を示されるようだった。私の魂は祈りに浸りきっていた。このメッセージは、何千もの魂を恐れおののかせた。これほど大きな影響を与えたトラクトを、私はほかに書いたことがない。

神は、私を助けるために、ベーマー兄弟をパサデナからよこしてくださった。私がトラクトを持って酒場に入っているあいだ、彼は外に立って祈った。ときには、酒場の者たちは私を殺しかねないほど怒り狂った。サンフランシスコから知らせが届いてから、商売は止まってしまっていた。人々は恐れのあまり身がすくんでいた。私のトラクトの影響が大きかったのは、ある程度はこのためだった。私に加えられる圧迫はすさまじかった。メッセージを止めようと、地獄全体が私の周りで荒れ狂っていた。しかし私は決してひるまなかった。このことでは、神の御手が絶えず私の上にあるのを感じていた。人々は、地震について神が何と言っておられるかを知って、がくぜんとした。主は私に、悔い改めてご自分を求めるようにという厳粛な勧めを持たせて、いくつもの集会に遣わされた。「アズサ・ミッション」では力強い時を持った。聖徒たちはへりくだった。一人の黒人の姉妹が、「異言」で語り、また歌った。そこには、まさに天の雰囲気があった。

5月11日の日曜日、私は『地震』のトラクトを配り終えた。すると、重荷は突然私から離れた。私の務めは終わったのだ。三週間足らずのうちに、七万五千部が刷られ、ロサンゼルスと南カリフォルニアで配られた。オークランドでは、マンリー兄弟が自分から進んで、ほぼ同じ期間に、さらに五万部を刷り、湾岸の町々とその周辺で配った。次は『地震』のトラクトからの抜粋である。

「しかし、神が地震と何のかかわりがあるのか。『あなたのさばきが地に行われるとき、世に住む者は正義を学ぶ』（イザヤ二六・九）。『彼は、怒りをもって山をくつがえし、これを移される。彼が、地を震い動かしてその所を離れさせら

れると、その柱はゆらぐ』（ヨブ九・五〜六）。『もろもろの山は彼の前に震い、もろもろの丘は溶け、地も、世界とその中に住む者も皆、彼の前に揺れ上がる。その憤りは火のように注がれ、岩も彼によって裂かれる』（ナホム一・五〜六）。『わたしはその悪のために世を罰する。それゆえ、その激しい怒りの日に、わたしは天を震わせ、地は揺り動いて、その所をはなれる』（イザヤ一三・一一、一三）。『そのとき地は揺れ動き、山々の基は震い動きました。主がお怒りになったからです。煙はその怒りのうちに立ちのぼり、火はその口から出て焼きつくしました。主はまた天に雷をとどろかせ、いと高き者がみ声を出されました。そのとき、主のとがめと、その怒りのいぶきとによって、海の底はあらわれ、地の基があらわになったのです』（詩篇一八章）。『見よ、主はこの地をむなしくし、これをくつがえして（その面をゆがめて）、その民を散らされる。地の基が震い動き、地は全く砕け、地は激しく震う。地は酔いどれのようによろめき、ゆり動く。そのとがはその上に重い』（イザヤ二四・一、一八〜二〇）。『万軍の主は、地震、大いなる叫び、焼きつくす火の炎をもって、あなたに臨まれる』（イザヤ二九・六）。『主が立って地を激しく震わせられるとき、人々は主の恐るべきみ前を避けて、岩のほら穴にはいる』（イザヤ二・一九）。『第七の御使が、その鉢を空中に傾けた。すると、激しい地震があった』（黙示録一六・一七〜一八）。それでもあなたは、地震の中に神はおられないと言い張るのか。ジョン・ウェスレーはこう言っている。『正しい神がこの世で罪人に下されるさばきのうち、もっとも恐ろしく、もっとも破壊的なのは地震である』」（『地震』のトラクト、1906年4月）。

サンフランシスコ地震は、確かに、太平洋岸の人々への神の御声だった。それは、あとに来る恵みのリバイバルに向けて、人々に罪を示すために力強く用いられた。「アズサ」の初めのころ、天も地獄もこの町にやって来たかのようだった。人々は限界に達していた。罪の自覚が、人々の上に力強く臨んでいた。人々は、ほとんど何のきっかけもないのに、通りでさえ取り乱して崩れ落ちた。御霊によって、「アズサ・ミッション」の周りに、まさに「死線」が引かれているかのようだった。その場所から二、三ブロック以内に近づくと、人々は罪の自覚に捕らえられた。私はサンディエゴへひとっ走りして、オッターマン兄弟夫妻のもとで一日に二回説教した。主は私の奉仕を祝福してくださった。それまでのすさまじい緊張のあとで、場所が変わったことも恵みだった。私は主に、行くことをお望みなら旅費をくださいと願っていた。すると主は与えてくださった。もう6月になっていた。帰ってから、フリー・メソジストの野営集会でトラクトを配った。主に10ドルを求めると、主は20ドルくださった。

「アズサ」での働きは、ますます澄んで力強くなっていった。神が力強く働いておられた。だれもが「アズサ」へ行かずにはいられないかのようだった。アフリカやインドや海の島々から、宣教師たちがそこに集まった。説教者や働き人たちが、あらがえない力でロサンゼルスに引き寄せられ、大陸を横切り、遠い島々からやって来た。『いけにえをもってわたしと契約を結んだわが聖徒をわたしのもとに集めよ』（詩篇五〇・一〜七）。彼らは「ペンテコステ」のために上って来たのだ。本人たちはほとんど気づいていなかったが。それは神の召しだった。ホーリネスの集会や天幕やミッションは、人が来なくなって閉じはじめた。そこの人々は「アズサ」にいたのだ。ガー兄弟夫妻は「燃える柴」の会堂を閉じて、「アズサ」に来た。そして「バプテスマ」を受け、まもなく火を広めるためにインドへ向かった。スメール兄弟でさえ、自分の教会員を捜しに「アズサ」へ来なければならなかった。彼は教会員たちに帰って来るよう招き、御霊にある自由を約束した。しばらくのあいだは、新約教会でも神が力強く働かれた。

迫害は多かった。とくに新聞からの迫害だった。新聞は私たちのことを恥ずべき書き方で書き立てたが、それは群衆を引き寄せただけだった。この働きの寿命は半年だと言う者もいた。まもなく、集会は昼も夜も続くようになった。会場は毎晩、満員になった。今では建物全体が、二階も一階も片づけられて、使われていた。来るのは、黒人よりも白人のほうがはるかに多かった。「肌の色の境界線」は、血潮によって洗い流された。新約聖書の翻訳者であるA・S・ウォレルは、「アズサ」の働きが当時の教会のためにキリストの血潮を再発見したと言明した。きよめなどのために、「血潮」が大いに強調された。清い生活という高い旗印が掲げられた。『敵が洪水のように押し寄せるとき、主の霊は旗印を掲げてこれに立ち向かわれる』（イザヤ五九・一九）。集会には、神の愛がすばらしく現れていた。反対者や諸教会に対して、思いやりのない言葉一つ言うことさえ許され

なかった。メッセージは神の愛だった。それは、初代教会の「初めの愛」のようなものが戻って来たのだった。初めのころ私たちが受けたバプテスマは、だれについても、悪く思うことも、言うことも、聞くことも許さなかった。御霊はとても敏感で、鳩のように優しかった。聖霊は鳩で象徴されている。鳩には胆のうがない。思いやりのない思いや言葉で御霊を悲しませると、私たちはすぐにそれとわかった。私たちは、純粋な神の愛の海の中に生きているかのようだった。そのころは、主が私たちに代わって戦ってくださった。私たちは、あらゆることで主のさばきに自分をすっかりゆだね、働きや自分を弁護しようとさえしなかった。私たちは、主のすばらしい臨在の中に、じかに生きていた。そこでは、主の清い御霊に反するものは何一つ許されなかった。

偽物は、神の御霊によって本物からふるい分けられた。神のみことばそのものが、あらゆる問題を、例外なく決めた。人々の心は、行いも動機も、底の底まで探られた。その群れの一人になるのは、冗談ごとではなかった。最後までやり抜く本気の覚悟がなければ、だれひとり「その交わりに入ろうとは」しなかった。そのころ「バプテスマ」を受けるには、死に切り、きよめられる過程を通らなければならなかった。二階には、とくに「バプテスマ」を神に求める人々のために、「とどまって待つ」部屋があった。もっとも、大集会室で受けた人も多かった。実際、そのころは、自分の席に座ったままで受けることもよくあった。とどまって待つ部屋の壁には、『ささやき声より大きな声で話さないこと』と書いた札が掛けてあった。そのころの私たちは、人々を「あおり立てて」受けさせることなど何も知らなかった。御霊はとても深く働かれた。落ち着きのない霊や、考えなしにしゃべる者は、すぐに御霊に戒められた。私たちは「聖なる地」に立っていた。この雰囲気は、肉の霊には耐えられないものだった。すっかり砕かれて焼き尽くされた人でなければ、たいていこの部屋には近寄らなかった。この部屋に来たのは、正直に求める人々、神に対して本当に本気の人々だけだった。そこは「死の部屋」でもなければ、発作を起こしたり、うっぷんを晴らしたりする場所でもなかった。そのころ、人々は「声を張り上げる」ことに走りはしなかった。恵みの座へと走ったのだ。たとえて言えば、人々はくつを脱いでいた。「聖なる地」に立っていたのである。「愚か者は、御使も踏み込むのを恐れる所へ飛び込む」。

アーサー・ブース・クリボーンは、「ペンテコステ派」の人々に向けて、次の重みのある言葉を書いている。「ペンテコステの代価を少しでも安くするなら、それは計り知れないほど大きな災いとなるだろう。ペンテコステが臨んだ屋上の間の人々は、そのためにもっとも高い代価を払っていた。この点で彼らは、ペンテコステを送るために至高の代価を払われたかたに、できるかぎり近づいたのである。あの群れは、この世からまったく見捨てられ、さげすまれ、退けられ、追い出されていた。そのことを、私たちは本当に十分わかっているだろうか。彼らの師であり指導者であるかたは、いわば当時の最高の文明の手によって、『絞首刑の縄』をくぐったばかりだった。彼らのカルバリは完全だった。それで、それにふさわしい完全なペンテコステが来たのである。後者は、その完全さにおいて前者に似るのだ。ゆえに私たちはめいめい、自分にこう言ってよい。あなたのペンテコステは、あなたの十字架のとおりになる、と。ペンテコステへの神の道は、カルバリを経ていた。今日も、一人一人にとってそうでなければならない。一人一人のペンテコステの純粋さと満ちあふれは、一人一人のカルバリの完全さにかかっている。これは変えることのできない原則である」。

第三章　「アズサ」に火が下る（その二）

6月15日の金曜日、「アズサ」で、御霊が私の魂に「天の合唱」を落としてくださった。気がつくと、私は突然、この超自然の「賜物」を受けたほかの人々に加わっていた。それはおのずから起こる現れであり、地上のどんな舌も言い表せない恍惚だった。初めのころ、この現れはすばらしく純粋で力強かった。私たちは、「異言」と同じく、これをまねてみることを恐れた。今では多くの人が、あらゆる「賜物」をまねることに、何のためらいもないように見える。そのために、彼らは力と影響をおおかた失ってしまった。この「歌の賜物」は、それを持っている者でなければだれにもわからなかった。それはまさに、御霊による「新しい歌」だった。集会で初めてそれを聞いたとき、それを受けたいという大きな飢え渇きが私の魂に入った。それなら、胸に押し込めていた思いをそのまま言い表せると感じたのだ。私はまだ「異言」で語ってはいなかった。しかし「新しい歌」は私をとらえた。それは神からの高い次元の賜物で、「アズサ」の働きが始まってまもなく、私たちのあいだに現れた。だれもそれを説いたことはなかった。主が、「残っている油」の注ぎ、すなわち「後の雨」の御霊のバプテスマとともに、主権をもってそれを授けてくださったのだ。それは、御霊が賜物を持つ者を動かされるままに、一人で、あるいはみなで歌われた。言葉のないこともあれば、「異言」のこともあった。人々への効き目はすばらしかった。それは、御使たち自身がそこにいて、私たちに加わっているかのような、天の雰囲気をもたらした。実際、そうだったのかもしれない。それは批判や反対を静めるようだった。悪人でさえ、それに反論したり、あざけったりするのは難しかった。

この言葉のない「新しい歌」を非難する人々もいた。しかし、言葉より先に音が与えられたのではなかったか。言葉のない知性もあるのではないか。最初の歌を作ったのはだれか。私たちは、いつも必ず、前の時代のだれかが作ったものに従わなければならないのか。私たちは伝統をあがめすぎている。「異言」で語ることは、人の知恵や理解によるものではない。それなら、「歌の賜物」があっていけないわけがあろうか。それは確かに、今の時代の「ジャズのような」宗教歌への戒めである。もしかすると、そのために与えられたのかもしれない。とはいえ、古い賛美歌にも、歌うのにとてもよいものがある。それらをさげすんだり、軽んじたりする必要はない。新しいリバイバルはどれも自分の賛美歌をもたらす、と言った人がいる。このリバイバルも確かにそうだった。

初めのころ、「アズサ」には楽器が一つもなかった。実際、その必要も感じなかった。私たちの礼拝には、楽器の入る余地がなかったのだ。すべてがおのずから起こった。私たちは賛美歌集を見て歌うことさえしなかった。古くからよく知られた賛美歌はみな、神の御霊に生かされて、そらで歌われた。いちばんよく歌われたのは、たぶん『慰め主は来られた』だった。私たちは、心の中の新しく力強い経験から、それを歌った。ああ、神の力は、なんと私たちを満たし、ふるい立たせたことか。それから、「血潮」の歌がとても好まれた。「いのちは血の中にある」という教えも、シナイも、カルバリも、ペンテコステも、どれも「アズサ」の働きの中に、しかるべき場所を持っていた。しかし「新しい歌」は、それとはまったく違っていた。人が作ったものではなかったのだ。それは、うまくまねることのできないものである。からすは鳩のまねができない。しかし人の霊が再び頭をもたげると、人々はついにこの「賜物」をさげすむようになった。彼らは、賛美歌集と、指導者が選んだ歌とで、それを追い出した。それは御霊を殺すようなことで、私たちの何人かにとってはとてもつらかった。しかし、逆らう潮はあまりに強かった。今日の賛美歌集は、おおかたが商売である。その大部分がなくても、私たちは大して損をしないだろう。古い曲でさえ変えられて損なわれている。そして、さらにもうけるために、季節ごとに新しい型を出さなければならないのだ。そこには、本当の礼拝の霊はほとんどない。それはつま先を動かしても、人の心は動かさない。初めに神から与えられた歌の霊は、おのずから鳴るところも、その美しさも、風が奏でるエオリアン・ハープのようだった。実際そ

れは、人の心の琴線や声帯を奏でる、神の息そのものだった。その調べは、美しさも、声量も、長さもすばらしかった。実際、人間にはできないものであることも多かった。それは「霊で歌う」ことだったのだ。

シーモア兄弟は、名目上の責任者と認められていた。しかし私たちには、教皇も位階制度もなかった。私たちは「兄弟たち」だった。人の立てた予定はなかった。主ご自身が導いておられたのだ。祭司階級も、祭司の策略もなかった。そういうものは、のちにこの運動が背教していくのにつれて入って来たのである。初めのころは、壇も説教壇さえもなかった。みなが同じ高さにいた。奉仕者たちは、その言葉の本当の意味で、しもべだった。私たちは、財産や教育に恵まれていることで人を重んじたのではない。むしろ、神から与えられた「賜物」のゆえに重んじた。神が肢体を「からだ」に備えられたのだ。今はどうか。『驚くべきこと、恐るべきことがこの地に起っている。預言者は偽って預言し、祭司は自分の手によって治め、わが民はこのようにすることを愛している。しかしあなたがたはその終りにはどうするつもりか』（エレミヤ五・三〇～三一）。また、『わが民は幼な子（ときには大人になった者）にしえたげられ、女たちに治められる』（イザヤ三・一二）。

シーモア兄弟は、たいてい、二つ重ねた空の靴箱の後ろに座っていた。集会のあいだ、彼はたいてい上の箱の中に頭を入れて祈っていた。そこには高ぶりがなかった。集会はほとんど途切れずに続いた。昼でも夜でも、ほとんどいつ行っても、求める魂が力の下に倒れていた。その場所が閉まっていたり、空だったりすることは一度もなかった。人々は神に会いに来た。神はいつもそこにおられた。だから集会は途切れなかったのだ。集会は人間の指導者によらなかった。神の臨在は、ますますすばらしくなっていった。低い垂木とむき出しの床のあの古い建物で、神は、強い男たちや女たちをばらばらにし、ご自分の栄光のために組み立て直された。それは、すさまじい分解修理だった。高ぶりも自己主張も、うぬぼれも自尊心も、そこでは生き残れなかった。宗教的な自我は、すぐに自分の葬式の説教をすることになった。

題も説教も前もって知らされることはなく、何時にだれが話すという特別な講師もいなかった。何が起こるのか、神が何をなさるのか、だれも知らなかった。すべてがおのずから起こり、御霊によって整えられていた。私たちは、神がだれを通して語られようと、神から聞きたかった。私たちは「人をかたより見る」ことをしなかった。富んだ者や教育のある者も、貧しい者や無学な者と同じだった。しかも、自分に死ぬことは、彼らのほうがはるかに難しかった。私たちは神だけを認めた。みなが平等だった。だれも神のみまえで誇ることはできなかった。神は、自分の意見に固執する者を用いることがおできにならなかった。それは主に導かれた、聖霊の集会だった。それは、自分本位な人間の要素を締め出すために、貧しい所で始まらなければならなかった。みながともにへりくだって、主の足もとに下った。みな同じように見えた。少なくともその意味では、すべての物を共有にしていた。垂木は低く、背の高い者はかがまなければならなかった。「アズサ」に着くころには、人々は低くされ、祝福を受ける用意ができていた。こうして飼い葉は、きりんのためではなく、小羊のために置かれていた。だれでもそれに届いたのだ。

私たちはまさにそこで、教会の位階制度とその乱用から救い出された。私たちは神を求めていた。集会に着くと、私たちはまず、できるだけ人と言葉を交わしたりあいさつしたりするのを避けた。何よりも先に神に会いたかったのだ。私たちは隅の長椅子の下に頭を入れて祈った。そして、人には御霊においてだけ会い、もはや「肉によって」人を知ることはしなかった。集会は、証しと賛美と礼拝のうちに、おのずから始まった。「ポップコーン」のように次々と短く、と証しがせかされることは決してなかった。時間どおりに押し込んで済ませるような、前もって決めた予定はなかった。私たちの時間は主のものだった。心の中の新しい経験から出た、本当の証しがあった。そうでないなら、証しは短いほどよい。十二人もが、神の大いなる力の下で震えながら、一度に立ち上がることもあった。私たちは、だれか指導者から合図をもらう必要はなかった。それでいて、無秩序に陥ることもなかった。集会では、私たちは祈りのうちに神とだけ向き合い、心を神に向けていた。だれもが柔和とへりくだりのうちに神に従った。私たちは「進んで互に尊敬し合った」。主はだれを通してでも、突然現れてくださるかもしれなかった。私たちは絶えずこのことを祈った。やがて、メッセージのために油注がれただれかが立ち上がる。みながそれを認めて、譲ったようだっ

た。それは子供のこともあれば、女のことも男のこともあった。後ろの席から立つこともあれば、前の席から立つこともあった。それはどうでもよかった。私たちは、神が働いておられることを喜んだ。だれも自分を見せびらかそうとは思わなかった。ただ神に従うことだけを考えていた。実際そこには、愚か者でなければ、本当の油注ぎもなしに出しゃばろうとはしないような、神の雰囲気があった。そういう者も長くは続かなかった。集会は、御座から御霊によって治められていた。それは、本当にすばらしい日々だった。ふつうの暮らしの五十年よりも、あのころの半年を生きたいと、私はよく言ったものだ。しかし神は、今日も少しも変わっておられない。変わったのは私たちだけである。

だれかが話しているとする。すると突然、御霊が会衆の上に下る。神ご自身が、祭壇へ招かれるのだ。人々は、戦いで殺された者のように会堂じゅうに倒れた。あるいは、神を求めて、一斉に祭壇へ駆け寄った。その光景は、しばしば木々の倒れた森のようだった。こういう光景は、まねることができない。あの初めのころ、だれかが祭壇へ招くのを、私は一度も見たことがない。神ご自身が人々を招かれたのだ。そして説教者は、いつやめるべきかを知っていた。神が語られると、私たちはみな従った。御霊を妨げたり悲しませたりするのは、恐ろしいことに思われた。その場所全体が、祈りに浸っていた。神はその聖なる宮におられた。人は沈黙すべきだった。シェキナの栄光がそこにとどまっていた。実際、夜、建物の上にその栄光を見たと言う人々もいる。私はそれを疑わない。私は一度ならず、その場所から二ブロックもないところで立ち止まり、力を求めて祈ってから、ようやく先へ進んだ。それほど、主の臨在は現実のものだった。

ときには、思い上がった人が私たちの中に来ることもあった。とくに、自分の意見を押し通して幅をきかせようとする説教者たちである。しかし、その試みは長続きしなかった。彼らは息が詰まってしまうのだ。考えはまとまらなくなり、頭はくらくらした。目の前が真っ暗になった。彼らは続けられなかった。あのころ、そういう人がうまくやりおおせたのを、私は一度も見たことがない。彼らは神に立ち向かっていたのだ。だれも彼らをさえぎらなかった。私たちはただ祈った。あとは聖霊がしてくださった。私たちは、御霊に治めていただきたかったのだ。御霊は、たちまち彼らを片づけてしまわれた。霊的に言えば、彼らは死んで運び出された。たいてい彼らは、へりくだって地にひれ伏し、私たちがみな通ってきたのと同じ過程を通った。言いかえれば、彼らは自分に死に、自分の弱さのすべてを見るようになった。それから、幼な子のようなへりくだりと告白のうちに神に受け入れられ、御霊による力強い「バプテスマ」によって造り変えられたのだ。「古き人」は、その高ぶりも、傲慢も、善い行いも、すべてもろともに死んだ。私自身の場合は、自分を忌み嫌うようになった。私は主に、私の過去に幕を下ろしてくださいと願った。かかとに当たるほど、すぐ背後に。主は私にこう言われた。善い行いをしたら、すぐに、それがまるでなかったかのように忘れよ。そして、わたしのために何もなしとげたことがないかのように、また前に進め。善い行いが、わなとならないためである、と。

あのころ、私たちはすばらしいことを見た。とても善い人々でさえ、神のさらに明るい光の中で、自分を忌み嫌うようになった。いちばん死ぬのに苦しんだのは説教者たちだった。彼らには、死ぬべきものがあまりに多かったのだ。評判も善い行いも、あまりに多かった。しかし、神が彼らを取り扱い終えられると、彼らは喜んで新しいページをめくり、新しい章に入った。彼らが激しく抵抗した理由の一つはそれだった。死は、決して快い経験ではない。そして強い者ほど、なかなか死なないのだ。

ある晩の集会で、バプテストの説教者アンセル・ポスト兄弟が、床の真ん中で椅子に座っていた。突然、御霊が彼の上に下った。彼は椅子から跳び上がり、大声で「異言」で神を賛美しはじめた。そして会場じゅうを走り回り、つかまえられるかぎりの兄弟たちを抱きしめた。彼は神の愛に満たされていた。彼はのちに、宣教師としてエジプトへ行った。この出来事について、彼自身の証しを聞こう。（ここにはポスト兄弟自身の証しが『ウェイ・オブ・フェイス』から引かれているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

スメール兄弟が教会員たちに帰って来るよう招き、御霊にある自由を約束したあと、私は『ウェイ・オブ・フェイス』に次のように書いた。「新約教会は、きのう『ペンテコステ』を受けた。すばらしい時だった。会堂じゅうで、男も女も力の下にひれ伏していた。天の雰囲気がその場所に満ちていた。あのような歌

を、私はこれまで聞いたことがない。まさに天の調べだった。それは御座からじかに来るようだった」(1906年6月22日)。

同じ日に、私は『クリスチャン・ハーベスター』にこう書いた。「新約教会では、上品な若い女性が、何時間も床にひれ伏していた。そのあいだ、ときおり、このうえなく天的な歌が、その唇から流れ出た。その歌は、御座にまで高まっていき、それから、この世のものとは思えない調べのうちに消えていった。彼女は『神をほめたたえよ！　神をほめたたえよ！』と歌った。会堂じゅうで、男も女も泣いていた。一人の説教者は、床にうつぶせになって、自分に死んでいた。『ペンテコステ』が、完全に来たのだ」。

新約教会では、何度か徹夜の祈りをした。しかしスメール牧師は、「異言を語る」ことを伴う「バプテスマ」を、とうとう受けなかった。彼は苦しい立場にあった。彼にとって、何もかもが新しいことだったのだ。そこへ悪魔が、働きの評判を落として滅ぼそうと、あらんかぎりの悪事をした。悪魔は私たちの中に悪霊を送り込んで、牧師を怖がらせ、働きを拒ませようとした。

しかしスメール兄弟は、民をヨルダンまで導く神のモーセだった。ただ、彼自身はとうとう渡らなかった。民を導いて渡らせたのはシーモア兄弟だった。ところが、不思議なことに、シーモア兄弟自身は、「アズサ」が開かれてしばらくたつまで「異言」で語らなかった。彼より先に入った聖徒が多かったのだ。この「バプテスマ」を受けた者はみな、「異言」で語った。

初めのころ、「アズサ」につまずいた人が多かった。最初に用いられた器たちが、どういう人々であったかのためである。私は『ウェイ・オブ・フェイス』に次のように書いた。「国じゅうを照らすのは、いちばん大きなそだの山を築ける人ではなく、自分の山に火をつけられる人だ、と言った人がいる。神は、完全な器が現れるまで待つことなど、決しておできにならない。もしそうなら、神はきっと今も待っておられるだろう。ルター自身、自分は木を切り倒すための、粗野なきこりにすぎないと言った。先駆者とはそういうものである。神には、洗練されたメランヒトンたちがいて、あとからついて来て材木を整え、形よく削ってくれるのだ。ダイナマイトの一発が完成品を作るのではない。しかしそれは、のちに彫刻家の巧みな手によって記念碑として立つ石を、切り離すのである。ルターの時代のローマ教会の高位の人々の多くは、改革の必要があることも、ルターが正しい道にいることも、確信していた。しかし彼らは、この新しい教えが『こんな片隅』から出ることには決して同意できない、とはっきり言った。彼らは言った。『修道士が、貧しい一介の修道士が、われわれみなを改革しようなどとおこがましいことをする。それこそ、われわれの我慢できないことだ』。『ナザレから、なんのよいものが出ようか』」。

堕落した人間は、いちばんよいときでさえ、まことに奇妙なものである。あまりに砕けているので、ひどく不完全なのだ。『わたしたちは、この宝を土の器の中に持っている』。どんな新しい経験も、まだ芽生えの段階では、人間の弱さを大いに大目に見なければならない。また、リバイバルが最初に届く人々の中には、粗野で、衝動的で、釣り合いの取れていない霊が、いつも多くいるものだ。それに、私たちの神の御霊についての理解は、とても限られている。だから、本当に神から出たものかもしれないものを見分けそこなって、ときに誤りを犯しやすい。私たちが十分に理解できるのは、自分自身が御霊を持っている程度に応じてだけである。早まった判断はいつも危険である。『何事についても、先走りをしてさばいてはいけない』。「アズサ・ミッション」で突破口を開くために用いられた群れは、続く者たちのために勝利への道を開いた「ギデオンの一隊」だった。

私はさらに、1906年8月1日の『ウェイ・オブ・フェイス』にこう書いた。「『ペンテコステ』が、アメリカのエルサレムであるロサンゼルスに来た。ロサンゼルスには、天下のあらゆる宗派、信条、教理があり、またあらゆる国の人々がいる。私は何度も、それを見るまで自分の力が持つだろうかと、危ぶみそうになった。祈りの重荷はとても大きかった。しかし、1905年の春に初めてこの幻と重荷を受けて以来、その最後の結末を疑ったことは一度もない。今やいたる所で、人々は魂の悩みの中にある。並はずれた現象を伴うこのリバイバルは、今の話題の的である。すさまじい反対も現れている。当地の新聞はとても悪意に満ちていて、その書くことはまったく不公平で偽りである。偽の宗教体系も激しく戦っている。しかし、『ひょうは偽りの避け所を滅ぼす』。彼らの『隠れ場』はあ

ばかれつつある。きよめる流れが町を流れている。神のみことばが勝利を収めている。

迫害は激しい。すでに、集会を解散させるよう警察に訴えが出された。働きはまた、狂信的な霊によっても大いに妨げられてきた。この町には、そういう霊があまりに多いのだ。これは神と悪魔の、大乱戦である。私たちには、見守り、祈るほかにほとんど何もできない。聖霊ご自身が先頭に立ち、人間の指導をほとんどすべて退けておられる。自分勝手に指図したり支配したりしようとして、聖霊の道をふさぐ者はわざわいである。御霊は、このような干渉を少しもお許しにならない。人間の器は、ほとんど目に入らなくなっている。私たちの心と思いは、主に向けられている。集会はあふれるほど満員である。霊的でない人々や救われていない人々のあいだに、大きな騒ぎが起きている。

天下のあらゆる偽りの宗教が、ここに顔をそろえている。昔のエルサレムを別にすれば、世界にこのような所はない。（ロサンゼルスは、地球をほぼ半周した反対側にあり、自然の条件もとてもよく似ている。）エルサレムのときのように、あらゆる国の人々がいる。合衆国じゅうから、また世界の多くの地方から、何千もの人々が『ペンテコステ』のために神に遣わされて、ここに来ている。この人々が、地の果てまで火をまき散らすだろう。宣教の熱意は白熱している。御霊の『賜物』が与えられ、教会の武具が回復されつつある。確かに、私たちは回復の日々、『終りの時』の中にいる。すばらしい日々、栄光の日々である。しかし、逆らう者には恐ろしい日々である。それは特権と責任と危険の日々なのだ。

悪霊が追い出され、病人がいやされている。多くの人が恵みのうちに救われ、立ち返り、聖霊と力のバプテスマを受けている。英雄たちが育てられ、弱い者が主にあって強くされている。人々の心が、ともしびをもって尋ねられるように探られている。それは、行いだけでなく、内に秘めた動機までもふるい分けられる、すさまじい時である。何ものも、すべてを探る神の目を逃れることはできない。イエスが高く上げられ、『血潮』があがめられ、聖霊が再び重んじられている。『打ち倒す力』が大いに現れている。そしてこれが、従うことを拒む人々が逆らう、おもな原因である。これは本気の事柄である。神は大いなる真剣さをもって、私たちと共におられる。私たちは、いいかげんなことをするわけにはいかない。強い男たちが、草のように刈り倒されて、神の大いなる力の下に何時間も横たわっている。このリバイバルは、疑いなく、世界に及ぶものとなるだろう」（F・バートルマン、『ウェイ・オブ・フェイス』、1906年8月）。しばらくのち、ロサンゼルスの南メソジスト監督教会のトリニティ教会の牧師が、次の言葉を語った。「ここ太平洋岸には、地球のあらゆる方面から人の子らが集まる。もっとも大きな道徳と霊の戦い、すなわち世界のハルマゲドンはここで戦われると、預言者の魂を持つ人々は信じている」。

エバン・ロバーツの『諸教会へのメッセージ』は、ある古い詩の次の言葉で語られた。

「神の火が下っているあいだに、神の御声が呼んでいるあいだに、兄弟たちよ、炎を受けよ。
神のたいまつが燃えて、人の弱い努力をくつがえしているあいだに、クリスチャンよ、炎を受けよ。
聖霊が嘆願し、人のやり方に取って代わっておられるあいだに。聖霊ご自身が炎なのだ。
その力がかたくなな心を曲げているあいだに、自分の心を明け渡し、すべてを聖霊にゆだねて、炎を受けよ。
世界はついに目覚め、その不思議な力のもとで、生きた炎となって燃え出しているのだから。
栄光の主は、天の炎に燃える人の心を求めておられる。眠っている者を起こすために。
すっかり自分を明け渡して、キリストとともに働こうとするなら、覚えておけ。
炎を受けなければならない。
傷つき死にかけている者のため、やみに横たわる失われた者のため、私たちは炎を受けなければならない。
栄光のうちにおられるキリストのため、その物語を広めるため、私たちは炎を受けなければならない。
わが魂よ、おまえが練りきよめられ、さらに澄んで明るく輝くために、炎を逃すな。

聖霊に頼り、自分で努めずに、ただ信頼するなら、炎を受けるだろう。兄弟たちよ、夢見るのをやめよう。神の満ち潮が流れているあいだに、私たちは炎を受けるのだ」。

1906年6月、私は小さなトラクトを書いた。次はその抜粋である。「機会は、一度過ぎれば、永遠に失われる。潮が私たちの戸口をかすめて流れる時がある。そのとき私たちは飛び込んで、栄光の祝福と成功と勝利へと運ばれることができる。そのようなときに、おじけづき、あるいはぼうっとして身がすくみ、岸で震えて立っているとしよう。それはすべてを逃し、この世でも永遠にも、もっともみじめに失敗することである。ああ、私たちの責任のなんと重いことか。神の恵みと好意の力強い潮は、祈りに導かれた流れに乗って、今まさに私たちのそばを流れている。『一つの川（救いの川）がある。その流れは神の都を喜ばせ』る（詩篇四六・四）。今こそ『一つになって』、一人一人も、みなでも、飛び込む時である。私たちは『一つの御霊によって、一つのからだとなるように』バプテスマを受けた（第一コリント一二・一三）。私たちを互いから、また神から引き離す、肉的な争いや分裂を、すべて捨てようではないか。私たちがキリストのからだに属しているなら、私たちは『一つのからだ』である。一生に一度の、いや何世紀に一度の機会が、私たちの戸口にある。それを永遠に得るか、失うかである。ためらっている暇はない。だれかに冠を奪われないように、すぐに行動せよ。ああ、キリストの教会よ、目を覚ませ！　力のバプテスマを受けよ。それから、ほかの人々を救いに飛んで行け。そして、あなたの主を迎えに」（F・バートルマン）。

「反キリストは今、もっとも強大で、もっとも悪意に満ちた示威をしようとしているのかもしれない。それなら教会は、御霊の救う力の大いなる現れをもって、それに立ち向かうべきではないか」（ゴードン）。

A・B・シンプソンはこう言った。「主が再び来られる前に、私たちは、ペンテコステのときのような、宣教のための本物の『異言』を目にすることになる。異教の世界は、それによって自分たちの国語で『神の大きな働き』を聞くのである。それはおそらく、私たちがほとんど夢にも思わなかった規模で起こるだろう。何千もの宣教師が、本国の一つになった信者たちの中から、最後の大いなる聖戦に出て行く。そして、十字架につけられ、また来られる主のことを、すみやかにすべての国民にあかしするのである」。

アーサー・T・ピアソンはこう言っている。「今日のもっとも恐るべき危険は、自然主義、すなわち、神がじかに働き、治めておられることをすべて否定することである。科学は、不信仰、邪悪、世俗、懐疑、唯物論と手を結んで、人格を持つ神を宇宙から締め出そうとしている。唯物論と自然主義へのこの流れを正すことができるのは、超自然のものだけである。エノクの時代には、人の罪がたちまち無神論者を生み出していた。そこで神は、エノクを霊も魂もからだも『取られた』。神がおられること、目に見えない世界があることの証拠に、人々がはっとするためである。エリヤの時代には、火の馬と火の戦車が下ってきて、広がっていた背教を戒めた。人々が、自然を超えた力の実に向き合わされる必要のある時があるとすれば、それは今である。すなわち、生ける神に向き合わされる必要があるのだ。神は、ご自分が治めるあらゆる力としくみの背後におられ、本当に祈りに答え、摂理によって導き、恵みによって回心させてくださる」。ああ、私たちの弱さよ！　ああ、私たちの不信仰よ！　主が私たちを助けて、ペンテコステの経験に立ち返らせてくださるように。『人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか』。

「教会に神が臨在されるなら、不信仰は終わるだろう。神の御霊を感じるとき、人々は神のみことばを疑わないだろう。千もの理由から、私たちには、主が陣営に来てくださることが必要である。昔、主がご自分の民を顧みて、エジプトの奴隷の身から救い出されたように」（スポルジョン『臨終の訴え』）。

第四章　八番街とメイプル通りの集会（その一）

1906年8月8日、私はペンテコステのミッションのために、八番街とメイプル通りの角にある教会の建物を借りた。私がこの教会に導かれたのは2月のことだった。そのころは「火の柱」の人々が使っていた。デンバーのアルマ・ホワイト夫人が指導者だった。新約教会が前に進んでいないとわかってから、私は集会のための建物を求めて祈るように示されていた。しかし、ある日まったく思いがけなく主が引き合わせてくださるまで、私はこの建物があることさえ知らなかった。通りかかって、初めてそれを見たのだ。ふだんは使われていないようだった。もとはドイツ人の教会だった。好奇心から、鍵のかかっていない戸を開けて中に入った。「火の柱」が使っていることがわかった。祭壇の前にひざまずいてしばらく祈っていると、主が私に語られた。私は御霊のすばらしいあかしを受けた。私はたちまち、通路を歩きながら、この建物は「ペンテコステ」のものだと宣言していた。戸の上には、大きな標語が描かれていた。『Gott ist die Liebe』（神は愛である）。これは、「アズサ」の働きが始まる二か月前のことだった。

神が語られたことを知っていたので、私はそれ以上建物を探さず、神の時を待った。半年後の8月のある夜、集会から家に帰る途中でそこを通ると、教会に『貸します』という札が出ていた。ちょうど空いたところだったのだ。主は私に、「あれがあなたの教会だ」と語られた。「火の柱」は家賃を工面できずに、煙となって消えていた。彼らは「アズサ」の働きに、もっとも激しく反対していた人々だった。主は、私たちのために建物を空けてくださったのだ。次の日、私は導かれて、私たちの家主のフレッド・シェパード兄弟に事情を話した。助けてほしいと頼んだのではない。しかし、主が私を彼のもとに遣わしておられたのだ。彼は家賃がいくらかを尋ね、別の部屋に入っていった。そして、最初の月の家賃の50ドルの小切手を持って、すぐに戻って来た。私はただちにその場所を借りた。

このころ、私はまた胃の病にかかった。何日もほとんど食べられず、ひどく苦しんだ。しかし、神はついに救い出してくださった。悪魔は私を殺そうとしたのだ。

リバイバルのトラクトを配ろうと、ハンティントン・パークのメソジスト監督教会の野営集会に行くと、私は会場から追い出された。ある説教者は、殴り倒すぞと私を脅した。彼はとても熱心だった。私は何の騒ぎも起こしていなかった。ただ、彼らは異端を恐れていたのだ。

本当のことを言わなければならない。「アズサ」もまた、その歴史の早いうちに、主の期待を裏切りはじめた。ある日、神は私に、彼らが組織を作ろうとしていることを示された。そのことについて、私の聞こえる所では一言も話されていなかったのだが。御霊がそれを私に示されたのだ。御霊は私を立ち上がらせ、ペンテコステの働きを「党派」の霊にしないようにと、彼らに警告させられた。「バプテスマを受けた」聖徒たちは、召されたとおりに「一つのからだ」のままでいるべきだった。そして、神の御霊が自由であるように自由であって、「二度と（教会の）奴隷のくびきにつながれ」てはならなかった。新約教会の聖徒たちは、すでにこのようにして、自分たちのそれ以上の前進を止めてしまっていた。神は、リバイバルの群れを望んでおられた。すべての人々と信者を祝福しながら、世界に福音を伝えることのできる水路である。当然、神は、教派的な党派によっては、それをなしとげることがおできにならなかった。その霊は、遅かれ早かれ、どのリバイバルの群れにとっても、のろいとなり死となってきた。このことでは、歴史は繰り返すのだ。

はたして、私が集会でこの警告をしたまさに次の日、「アズサ」の外に『使徒信仰ミッション』という看板が出ていた。主は言われた。「わたしがあなたに言ったのは、このことだ」。彼らはやってしまったのだ。確かに、「党派の霊」が「ペンテコステ的」であるはずがない。本当のペンテコステに分裂はありえな

い。別の団体を作ることは、神の民としての私たちの失敗を言いふらすことにすぎない。それは世に、私たちの救いを信じさせるどころか、私たちが仲よくやっていけないことを証明してしまう。『みんなの者が一つとなるためであります。それによって、世が信じるようになるためであります』（ヨハネ一七・二一）。そしてそのときから、もめごとと分裂が始まった。それはもはや、以前のような、すべての人に開かれた自由な御霊ではなかった。働きは、町のほかの教会や教派と並ぶ、競い合う党派や団体の一つになってしまった。諸教会からの反対がしだいに強まったのも、無理はない。私たちは、いたる所にある「キリストのからだ」全体を祝福し、それに仕えるために召されていた。キリストは一人であり、その「からだ」は「一つ」でしかありえない。それを分けることは、肉体の場合と同じように、それを滅ぼすことにほかならない。『わたしたちは皆、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受けた』（第一コリント一二・一三）。教会は生き物であって、人間の組織ではない。

彼らはのちに、太平洋岸全体の働きをこの組織に引き入れようとしたが、みじめに失敗した。働きは、クローフォード姉妹のもとで、ポートランドやシアトルにまで広がっていた。神の民は、位階制度から自由でなければならない。彼らは「血で買い取られた」者であり、自分自身のものではないのだ。テキサスには、より早く始まった働きがあった。それものちに、太平洋岸とロサンゼルスのペンテコステのミッションを取り込もうとしたが、やはり失敗した。どうして彼らが、私たちの上に権威を主張するのか。私たちは、祈りによって自分たちのリバイバルを天から呼び下ろしたのだ。カリフォルニアのリバイバルは、その起こりにおいて、ほかとは別の、独自のものだった。それは天から来た。シーモア兄弟でさえ、ここで多くの人が入ったあとになるまで、「バプテスマ」を受けなかった。彼がロサンゼルスに着いたのは、ようやく「最後の時刻」になってからだった。ロサンゼルスでもほかの所でも、初めからの大きな戦いは、「肉」と御霊との、イシマエルとイサクとの争いだった。

8月12日の日曜日、私たちは八番街とメイプル通りで集会を始めた。最初の集会から、御霊が力強く現れてくださった。御霊にすべてをお任せしたのだ。罪人や信仰から離れた者には、その雰囲気は恐ろしいものだった。八番街とメイプル通りにとどまるには、正しい者にならなければならなかった。まことに「おののき」が「神を恐れない者を捕えた」のだ。何日ものあいだ、私たちは、祈りのうちに主の前に伏していることぐらいしかできなかった。初めのころ、ホプキンソン姉妹が大いに私を助けてくれた。

その雰囲気は、あまりに神聖で聖なるものだったので、そこで奉仕しようとすることさえためらわれた。昔の幕屋の祭司たちのように、私たちは栄光のゆえに仕えることができなかった。信仰を口にするだけの肉的な者や、人を欺く者とも、すさまじい戦いがあった。しかし神が勝利を与えてくださった。争いを好む霊によって、御霊はたいそう悲しまれた。八番街とメイプル通りの雰囲気は、ひところは「アズサ」よりもさらに深かった。神があまりにすばらしく近くに来てくださったので、天の雰囲気そのものが私たちを包んでいるようだった。神の「重い栄光」が、それほどまでに私たちの上にのしかかっていたので、私たちはただうつぶせに伏していることしかできなかった。長いあいだ、座っていることさえほとんどできなかった。ときには集会のあいだじゅう、みなが床にうつぶせになっていた。私も、床に長々とうつぶせにならずにいられることは、めったになかった。私たちがその教会に移ったとき、壇として、三十センチほど高くなった小さな所があった。神が集会を導いておられるあいだ、私はたいていその上に伏していた。

それは神の集会だった。毎晩、神の力が力強く私たちと共にあった。栄光に満ちていた。主は、ほとんど目に見えるかのようだった。それほど現実のかただったのだ。いちばん困ったのは、説教をしたがる、よそから来た説教者たちだった。だれよりも分別がないのは彼らのようだった。主の前で静かにしていることさえわきまえていなかった。自分の声を聞くのが好きだったのだ。しかし、多くの説教者が、これらの集会で自分に死んだ。町は、今日と同じように、説教者であふれていた。彼らは去年の豆のさやのように、からからと音を立てた。まるで「枯れた骨」の置き場だった。私たちはいつも、「アズサ」が母なるミッションであったことを認めていた。私たちのあいだに、摩擦やねたみがあったことは一度もない。私たちは互いに行き来した。シーモア兄弟も、たびたび私たちの集会に来た。

そのころ、私は『クリスチャン・ハーベスター』に次のように書いた。「八番街とメイプル通りの集会は、驚くべきものである。きのうは、私がこれまで見た中で、もっとも偉大な時だった。一日じゅう、神の力がその場所を吹き渡った。教会は人であふれていた。すさまじい罪の自覚が人々を捕らえた。御霊が、初めから終わりまで集会を導かれた。予定は何もなく、必要な知らせをする機会さえほとんどなかった。説教しようとする者もいなかった。御霊によって、いくつかのメッセージが与えられた。だれもが自由に神に従った。一日じゅう、祭壇の前は求める魂でいっぱいだった。祭壇の前での祈りは、ほとんど途切れなかった。集会が進んでいくあいだに、魂が次々に前に出て来て、祈り抜いていった。男も女も、一日じゅう力の下に倒れて、祭壇の周りに横たわっていた。フリー・メソジストの説教者の妻が、力強い「バプテスマ」を受けて、中国語のようなものを話した。「バプテスマ」を受けた者はみな、「異言」で語った。少なくとも六人のホーリネスの説教者が、ひたすら「バプテスマ」を求めていた。その中には、白髪の人もいた。長年の実り豊かな奉仕のゆえに、重んじられ、信頼されてきた人々である。彼らは、神からのこの啓示を前にして、ただ両手を挙げて降参し、立ち止まって自分の「ペンテコステ」を「待ち望む」のだ。南カリフォルニア・ホーリネス教会の会長（ロバーツ兄弟、尊い人である）は、真っ先に祭壇の前に出た者の一人で、熱心に求めていた」（F・バートルマン、ロサンゼルス、1906年9月10日）。

私はまた、同じ新聞にこう書いた。「御霊は、集会の中に人間が口を出すことを、ほとんどお許しにならない。たいていは、誤りを気にとめずに見過ごされるか、御霊ご自身がそれを取りのけてしまわれる。ふだんなら正さなければならないと思うようなことも、しばしば見過ごされる。そして、それによって、もっと悪い災いが避けられるのだ。そういうことに注意を引くと、聖徒たちに恐れの霊が臨み、彼らは求めるのをやめてしまう。御霊は働くのを妨げられる。御霊は、そういうものを取りのけてくださるのだ。今は、もっと大きなことがかかっている。私たちは、サタンの力を大きく見せないようにしている。かわりに、大いなるキリストを宣べ伝えている。そして神は、幼な子を用いておられる。敵は、教理の違いによって私たちの交わりを壊そうと、地獄を動かしている。しかし私たちは、なんとしても御霊による一致を守らなければならない。あとで整えればよいこともある。そういうことは、はるかに小さな問題である。神は、この働きを決して人の手にお渡しにならないだろう。もし人の支配の下に入ったら、それで終わりである。もし『頭を失って』小さくならなくてもよいのなら、私たちに加わる人は多いだろう」。

8月16日の午後、八番街とメイプル通りで、御霊は私を通して「異言」によってご自身を現された。そのとき、その場には七人がいた。平日だった。証しと賛美の時のあと、すべてが静まっていた。私は、霊のうちに神を賛美しながら、そっと床を歩いていた。突然、私の知らない言葉で語る豊かな声が、魂のうちに（生まれつきの耳ではなく）聞こえるように思われた。のちにインドで、それに似たものを聞いたことがある。それは、私のうちに押し込められていた賛美を、うっとりとさせ、すっかり満たしてくれるようだった。ほんの少しして、気がつくと、私は自分では何の意志もはたらかせていないのに、自分の発声器官で同じ音を発していた。それは、少し前に魂のうちに聞いたのと同じ言葉の、そのままの続きだった。それは完全な言葉のように思われた。私は、ほとんど外で聞いている人のようだった。私はすっかり神に明け渡し、神の流れに乗るように、ただ神のみこころに運ばれていた。その言葉を妨げることもできただろうが、世界と引きかえにしても、そうはしなかっただろう。はっきりと感じられる天の至福が、それに伴っていた。この経験を正確に言い表すことはできない。その良さは、経験してみなければわからない。私の側には、語ろうとする努力は何もなく、もがくことも少しもなかった。その経験は、このうえなく神聖だった。聖霊が、風が奏でるエオリアン・ハープのように、私の声帯を奏でておられたのだ。語ったことのすべてが、私にとってまったくの驚きだった。私は、「異言」で語りたいと本気で願ったことは一度もなかった。生まれつきの思いで理解できなかったので、むしろそれを恐れていたのだ。

そのとき私は、自分が何を言っているのかを知りたいとさえ思わなかった。それは、生まれつきの思いや理解の領域の外にある、純粋な魂の表現のようだった。私はまことに「額に印を押され」、自分の生まれつきの思いのわざを、すっかりやめていた。私はのちに、この経験を発表するために、次のように書いた。

御霊は、少しずつ私をこの頂点へと備えてくださっていた。自分のための祈りでも、ほかの人のための祈りでも、私の経験の中でそうしてくださったのだ。こうして私は神に近づき、私の霊はすっかり砕かれていた。自分の無力をはっきり自覚し、生まれつきの自分の働きからきよめられて、意志をまったく明け渡すところにまで達していた。この過程は、積み重なってきたものだった。内なる御霊の臨在は、蒸気ボイラーのガラスの水面計の水のように、敏感に感じられていた。

人間が明け渡す最後のとりでである私の思いが、御霊に占領された。少しずつたまってきていた水が、私の頭の上を越えた。私はすっかり御霊のものとなった。「異言」での語りには、人間のものが混じっていなかった。『御霊が語らせるままに』語ったのだ（使徒二・四）。ああ、すっかり御霊に明け渡すことの、なんという喜びか。私の思いは、いつもひどく活発だった。クリスチャンとしての経験の中で、私の悩みのほとんどは、その生まれつきの働きから来ていた。『理屈を打ちこわし』（第二コリント一〇・五、欄外の読み）。人間の霊の自己主張ほど、すなわち人間の思いの知恵と力と、自分で事足りるとする心ほど、信仰と御霊の働きを妨げるものはない。これはすべて十字架につけられなければならない。そして、ここに戦いがあるのだ。聖霊に占領していただくには、その前に、私たちはまったく打ちのめされなければならない。自分は不十分で無力だと自覚し、すっかり低くされなければならない。私たちは聖霊を求める。しかし実際には、聖霊のほうが、私たちを自分のものにすることを求めておられるのだ。

「異言を語る」という経験において、私は明け渡しの頂点に達した。これが、奉仕における御霊の新しい働きへの水路を開いた。そのときから、御霊は新しいしかたで、私を通して流れはじめた。メッセージが、油注ぎとともに、それまで知らなかったしかたで来るようになった。それには、おのずから湧き上がる、まことにすばらしい霊感と照らしがあった。そして、罪を認めさせる力が伴っていた。ペンテコステのバプテスマとは、まったくの明け渡しであり、人全体が聖霊に占領されることであり、ただちに従う霊を伴うものである。それまでも長年、私は奉仕のための神の力を多く知っていた。しかし今、私は御霊に対する敏感さ、明け渡した心を実感した。それによって神は、私を占領し、新しいしかたと水路で働くことがおできになった。結果は、はるかに力強く、直接的だった。また私は、神のご目的とみわざの両方における主権について、それまで知らなかったような新しい啓示を受けた。私はしばしば、神は関心がないように見える、なさることが遅い、と神を責めていたことに気づいた。本当は、信仰によって神に明け渡すべきだったのだ。そうすれば神は、私を通して、主権に満ちた力あるみこころを行うことがおできになったのである。自分の愚かさと、神の主権に満ちた配慮と願いとが示されて、私はへりくだってちりの中に伏した。私は、神に仕えたいというわずかな願いを持っていた。それは、神の大いなる願いと関心とご目的のうち、神が私に届けることのおできになった、わずかな部分にすぎなかった。私はそれを悟った。神のみことばも、それをはっきり述べている。思いにも行いにも、私のうちにあった善いものはすべて、神から来ていたのだ。ハドソン・テーラーのように、私は今、神がただご自分と一緒に行くようにと私に求めておられると感じた。神おひとりが定め、願われたことを手伝うためである。この啓示と、それまでの自分の思い違いを前にして、自分がとても小さく思えた。私のことなどだれも思いもしなかったはるか昔から、神はおられ、永遠のご目的をなしとげてこられた。そして私がいなくなったはるか後も、そうであり続けられるのだ。

力んだり、身をよじったりすることはなかった。「バプテスマ」を得ようとしてもがくこともなかった。私の場合、それはただ明け渡すことだった。実際、それはもがくことの正反対だった。のどがはれることも、発声器官に「手術」を施すようなこともなかった。「異言」で語るのに、私は少しも苦労しなかった。それでも、そういう苦労をする人がいるわけは理解できる。その人たちは、すっかり神に明け渡していないのだ。私の場合、戦いは長く続いていた。私はすでに力尽き、すっかり明け渡していた。神は、二人の人を同じように取り扱われることはない。「バプテスマ」を受けたとき、私はそれを本気で求めていたわけではなかった。実際、それを一つのはっきりした経験として求めたことは一度もなかった。私は、すっかり神に明け渡したかったのだ。しかし、それ以上には、はっきりした期待も願いもなかった。もっと神を知りたかった。ただそれだけだった。

私の周りに、私をまごつかせたり興奮させたりする、叫ぶ群衆はいなかった。そのとき、理屈やまねによって、私に「異言」をそそのかす人もいなかった。神

に感謝する。神は、そのような助けがなくてもご自分のわざをなすことがおできになり、ないほうがはるかによくおできになるのだ。霊的に言えば、私は、器具で子供を引きずり出すことをよいと思わない。御霊にある、健全で熱心な祈りの助けこそ、よいと思う。罪の自覚の胎から力ずくで引きずり出され、その後ずっと保育器に入れておかなければならない魂が、あまりに多い。自然においてそうであるように、恵みにおいてもそうである。医者や年寄りの産婆は、できるだけ用いないのがいちばんよい。彼らの不自然な乱暴によって、子供が死にかけることもあるのだ。私たちが見た中には、獲物に群がるジャッカルの群れでも、これほど荒々しくはふるまうまいと思われる例もあった。自然のお産では、たいてい、母親をできるだけそっとしておくのがいちばんよい。私たちはそばにいて励ますべきだが、出産を無理強いしてはならない。自然なお産のほうがよいのだ。

それまで私は、御霊にまったく明け渡したこの状態に達するまで、ほとんどとりなしと預言の奉仕に閉じ込められていた。今、私は再び奉仕に出て行くことになった。私の「ペンテコステ」の日が来たとき、水路は開かれた。生ける水がほとばしり出た。主権者なる神の御手が触れると、私の奉仕の戸はぱっと開いた。御霊は、新しい、さらに力強いしかたで、私のうちに働きはじめた。それは、はっきりした新しい頂点であり、発展だった。私にとって、一つの時代を画する経験だった。そして、このために、私たちは群れとして閉じ込められていたのだ。その備えは、神の聖徒たちのあいだで、世界じゅうに及んでいた。その結果は、すでに歴史となっている。実際これは、ルターやウェスレーの時代の御霊の働きと同じくらい、はっきりした教会史の一時代となった。しかも、はるかに大きなことを予示している。そして、それはまだすべてが歴史になったわけではない。私たちはまだそれに近すぎて、十分に理解することも、評価することもできない。しかし私たちは、教会を初めのころのように回復する道を、また一歩さかのぼったのだ。私たちは、円を閉じようとしている。イエスは、「しみも、しわも」ない完全な教会のために戻って来られる。主は、十あまりのからだではなく、「一つのからだ」のために来られるのだ。主はかしらである。かしらとして、百ものからだを持つ怪物ではない。『みんなの者が一つとなるためであります。それによって、世が信じるようになるためであります』。結局、これこそが、世に対するもっとも大きな「しるし」なのだ。『たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ（以下略）』（第一コリント一三章）。「異言」で語る経験のあと、私は、外国語がたやすく身につくだろうと感じた。はたしてそのとおりになった。また私は、御霊によって歌うことも覚えた。私は歌い手であったことはなく、音楽の心得もないのだが。

私は「異言」を求めたことは一度もなかった。私の生まれつきの思いは、その考えに逆らった。この現象は、どうしても人間の理性に反する。それは、そのあいだ、理性の働きを手放すことを意味する。そして、たいていこれが、最後に明け渡す点なのだ。この働きの中では、人間の思いはすっかり止められている。そして生まれつきの思いや理性にとって、これは「愚かなもの」であり、つまずきの石である。それは超自然のものなのだ。自分の人間の霊においてこの深い明け渡しに達していない人、自分の理性に死んでいない人もいる。そういう人がこれを受け入れたり理解したりすることは、期待しなくてよい。このことでは、生まれつきの理性を明け渡さなければならない。理性と啓示とのあいだには、渡らなければならない深い淵がある。しかし経験において、この原理こそが、使徒行伝にあるような「ペンテコステの」バプテスマに導くのである（使徒二・四）。それは「バプテスマ」の根底にある原理なのだ。そしてこれが、素朴な人々が真っ先に入るわけである。もっとも彼らは、ほかの点では、必ずしも釣り合いがとれていたり、有能であったりするわけではないかもしれないが。卑近なたとえを使えば、彼らは泳ぎに行く小さな男の子たちのようなものだ。脱ぐ服がいちばん少ないので、真っ先に水に入るのである。私たちはみな、「裸で」この経験に入らなければならない。自分がすっかりなくなって。

初代教会は、これをふだんの空気として、その中に生きていた。だから初代教会は、御霊の働きに明け渡し、超自然の「賜物」と力を持っていたのだ。私たちの中の物知り顔の人々は、ここに達することができない。ああ、愚かな者となり、自分では何も知らない者となりたい。キリストの思いをすっかり受け、ただ聖霊だけに、いつも教え導いていただくために。絶えず「異言」で話さなければならない、と言うつもりはない。「バプテスマ」は、「異言」がすべてではない。この照らしと明け渡しの場所に生きながら、自分の国の言葉で話すことはでき

る。聖書は「異言」で書かれたのではない。しかし、私たちは確かに、いつも御霊のうちに生きることができる。いつもそうしている人は、いるとしても、ごくわずかかもしれないが。ああ、自分がすっかりなくなる、明け渡しの深さよ。御霊が教え、与えてくださるもののほかは、何も知らず、何も持っていないと自覚すること。これこそが、奉仕の務めにおける力、神の力の、本当のありかである。神、すなわち清い御霊のほかには、何も残っていない。生まれつきのものへの望みも、自分にできるという感覚も、すべてなくなっている。いわば、私たちは神の息によって生きるのだ。「ペンテコステ」の日の「風」は、神の息だった（使徒二・二）。しかし、これ以上何が言えようか。それは経験してみなければわからない。説明できるものではないのだ。確かに私たちは、これがなくても、これまでいくらかの御霊を受けてきた。このことは、すべての歴史があかしている。教会は、堕落して以来ずっと、正常でない状態にあるのだ。しかし、これがなければ、初代教会が受けたような「ペンテコステの」バプテスマを受けることはできない。使徒たちは、それを突然、そして完全に受けた。素朴な信仰と明け渡しだけが、それを受けることができる。人間の理性は、それにあらゆる欠点を見つけ、愚かに見えるところを見いだすことができる。

この最初のとき、私はたぶん十五分ほど「異言」で語った。それから、その場の霊感は、ひとまず過ぎ去った。それ以来、ときどき語ったこともある。しかし私は、それをまねて再び起こそうとは決してしない。それは、神が主権をもってなさることでなければならない。それをまねようとするのは、愚かで、神を汚すことだろう。その経験は、あとに、主にまったく明け渡している状態の自覚を残した。それは、自分のわざや思いの働きをやめた、完全な安息の場所だった。それは私に、神にまったく治められているという自覚を残した。そして当然、それに見合う神の臨在の自覚も残した。このうえなく神聖な経験だった。多くの人が、この原理と、御霊に占領されることを、まったく愚かにもてあそんできた。彼らは御霊のうちにとどまりそこない、多くの人をつまずかせた。これは大きな害をもたらした。しかし、この経験は、歴史においても、今日の実感においても、事実として今も残っている。初代教会が御霊を失って以来、たいていのクリスチャンの神についての知識は、その大部分が、ずっと頭の知識である。彼らの神のみことばと原理についての知識は、おもに生まれつきの理屈と理解による、頭の知識である。神の御霊からじかに来る啓示や照らしや霊感は、ほとんど持っていない。

「異言を語る」ことについて、よく知られた著者たちから、興味深い一節をいくつか引いてみよう。フィリップ・シャフ博士は、『キリスト教会史』第一巻116ページで、こう言っている。「異言で語ることとは、意志によらない、詩篇のような祈りや歌である。それは霊的な忘我の中から、聖霊の霊感による特別な言葉で発せられる。魂は、ほとんどまったく受け身であって、聖霊がその天の調べを奏でられる楽器なのである」。

注解者のコニベアとハウソンは、こう書いている。「この賜物（異言を語ること）は、超自然のものが突然、信者に流れ込んだ結果であった。その影響の下では、理解の働きは止まり、霊は神の御霊からじかに与えられるものによって、恍惚の状態に包まれた。この恍惚とした忘我の中で、信者は、あらがえない力に迫られて、感謝と喜びの思いを、自分のものではない言葉で注ぎ出した。たいていは、その意味さえ知らなかった」。紙面の都合で、この問題についてのほかの定評ある注解者から引くことはできない。多くの人が同じ問題について、ここに引いた人々とおおむね同じ趣旨で、たいへん啓発的なことを書いている。書き手をもう一人だけ引こう。

ストーカーは、『パウロの生涯』102ページで、次のように言っている。「それ（異言を語ること）は、一種の忘我の中での発語であったようだ。語る者は、熱情のこもった言葉をほとばしらせ、それによって、その人の信仰は言い表されるとともに、高められた。自分が語っていることの意味をほかの人に伝えられない者もいれば、その力もあわせ持つ者もいた。また、自分では異言で語らないが、霊感を受けて語る者の言うことを解き明かすことのできる者もいた。どの場合にも、一種のじかの霊感があったようだ。だから、彼らのしたことは、計算や準備の結果ではなく、その場の強い衝動の結果だった。これらの現象はあまりに並はずれているので、もし歴史書に語られていたら、クリスチャンの信仰をひどく試すことだろう。それは、キリスト教が初めて世に入ったとき、触れた人々の霊を、どれほど強い力でとらえたかを示している。御霊の賜物そのものが、ゆがめ

られて罪の道具となった。奇跡や異言のような、より人目を引く賜物を持つ者たちが、それを見せびらかしすぎ、誇りの種にしたからである」。特権には、いつも多かれ少なかれ危険が伴う。子供は、よく切れるナイフで、しばしば手を切る。しかし、神を信頼して前に進むよりも、今いる所に立ちどまってよどんでいるほうが、確かにずっと危険である。

「バプテスマ」を受ける前の、私自身のいくつかの経験について、私は『クリスチャン・ハーベスター』に次のように書いた。「私自身の心が探られ、増し加えられた光の下で、私はついに叫んだ。『神よ、私を、宗教的な自意識から救い出してください！』神の目から見た私の最善のものを示されたときほど、へりくだりと恥とはずかしめのうちに苦しんだことは、めったにない。私の宗教上の美しさは、まことに腐れに変わった。私は、それを二度と聞くことも、考えることさえも耐えられないと思った。自分の名前も、自分がだれであるかも、喜んで忘れたいと思った。私は、これまで神のためになしとげたことの記録を、このうえない満足をもって処分しさえした。私の目が、好んでながめていたものである。今や私は、それらを、自分を高めさせようとする悪魔からの誘惑として忌み嫌った。宗教上の奉仕をほめた推薦の手紙、私にはすぐれて見えた著作、知識においても組み立てにおいてもすばらしく思われた説教。そういうものが、そこに見つかった自分の誇りのために、今ではじつに胸の悪くなるものとなった。私は、神の恵みと報いを期待して、多かれ少なかれ、これらにより頼むようになっていたことに気づいた。『ただイエスの血潮のみ』を、少なくとも部分的には見失っていたのだ。私は、自分を神に推薦してくれるものとして、ほかのものにも頼っていた。そして、そこに大きな危険があった。今や私は、これらの大切にしていた書類、偽りの証拠を、まむしを殺すように処分した。キリストの功績だけが持つ力から、それらが私を誘い出さないためである。それは、心を深く探ることだった。この点について、これほど深く取り扱われているホーリネスの指導者を、私はわずかしか知らなかった。

過去の奉仕は、今や私にとってまったくの空白となった。そして、それは私にとって、このうえない安堵だった。私は、まるで何もなしとげたことがないかのように、神のために再び始めた。神の前に、手ぶらで立っていると感じた。試みの火が、私の宗教的なわざをすべて焼き払ったようだった。神は、私がそれらに安んじることを望まれなかったのだ。これから先、私は神のために何をしても、なしとげたらすぐに、それをすっかり忘れることになった。それが、それ以上私のわなとならないためである。そして、神のために何一つしたことがないかのように進むのだ。これが私の安全だった」。疑いもなく、宗教上の奉仕において、ほんのわずかでも自分に満足することが、神の祝福と恵みをもっとも大きく妨げるのである。それは、へびを避けるように避けなければならない。

第四章　八番街とメイプル通りの集会（その二）

八番街とメイプル通りでは、すばらしい集会が続いた。主は私に、この働きが、そのとき私たちが達していたどんなものよりも、さらに深くなることを望んでおられると示された。主は「アズサ」の働きにさえ、十分には満足しておられなかった。それほど深くまで進んでいたのにである。私たちのあいだには、まだ自我の生活、宗教的な自我があまりに多かった。当然、それは敵との激しく苦い戦いになるということだった。私たちの所は、一種の「選別所」となるはずだった。肉的なふるまい、偽りの現れ、そして宗教的な自我全般を取り扱う所である。私たちが求めていたのは、本物の経験だった。永続し、確立し、神のような品性を伴い、逆戻りすることのない経験である。

ホーリネスの人々は、とりわけ、自分たちが達したものと立場にしがみついていた。実際、彼らの多くは、心のかたくななパリサイ主義に満ちていた。彼らの状態と必要について光を届けられるのは、神だけだった。彼らはおおむね「初めの愛」を失っていて、信仰告白の殻のほかには、ほとんど何も残っていなかった。教会の人々のほうが、まだ望みがあるように思われた。彼らは全体として、それほどかたくなでも、あら探し好きでも、批判的でも、偏狭でもなかった。私たちの「シボレテ」も、さおの上に掲げて拝む「青銅のへび」になりかねない。そうなれば、それはもう私たちをいやさなくなる。そして、打ち砕かれるべき「ひとかけらの青銅」になる（列王紀下一八・四、欄外の読み）。

私はまた、お金のことでひどく試された。ある日、電車賃さえなかったので、町まで二十五ブロックを歩かなければならなかった。私とほとんど同じくらい貧しい兄弟が、帰りの電車賃にと5セント硬貨をくれた。同じころ、集会は栄光に満ちていた。多くの人が力の下に倒れ伏した。ある夜、悪魔は、働きをわき道にそらそうと、二人の手ごわい人物を送り込んできた。心霊術者の女が、鼓笛隊長のように先頭に立って、歌を導こうとした。私は祈って、彼女を教会から追い出した。もう一人は、窓をがたがた鳴らさんばかりの声の、狂信的な説教者だった。私は彼を公然としからなければならなかった。彼は集会全体を乗っ取ってしまったのだ。うぬぼれが、彼の全身からにじみ出ていた。御霊はひどく悲しまれた。神は働くことがおできにならなかった。私はこの働きのために、あまりに多く苦しんできた。それをそうやすやすと悪魔に明け渡すわけにはいかなかった。そのうえ、私には魂に対する責任があり、家賃の責任もあった。それで、彼に出て行くようにと言わなければならなかった。

私たちは、そういう霊と激しく戦った。放っておけば、彼らはすべてを台なしにしていただろう。悪魔には良心がなく、「肉」には分別がない。集会のために初めて教会を開けたとき、最悪の狂信者で宗教上のぺてん師の一人が、階段に座って私を待っていた。彼はその場所を取り仕切りたがっていた。説教者だった。私は、ネヘミヤがヨイアダの子を追い出したように、彼をそこから追い払った（ネヘミヤ一三・二八）。これほど多くの人の中に、これほど多くの悪魔が入っているとは、夢にも思わなかった。町はそういう人でいっぱいのようだった。それは聖徒たちを争いに誘い、御霊を妨げた。こういうぺてん師や変わり者が、真っ先に集会に来た。私たちは、大がかりな一掃の時を迎えた。とくに、古くから信仰を告白している人々の場合がそうだった。職業的な、宗教上のいかさまが多くあった。さばきは「神の家から始められ」なければならなかった。ルターも、その時代に、わがままな宗教上の狂信者たちにひどく悩まされた。彼はそのころ、ワルトブルクに身を隠していた。そこからウィッテンベルクのメランヒトンに、そういう狂信者を見分ける試金石を書き送った。「この預言者たちに尋ねなさい。あの霊の苦しみ、あの神による創造、そして本当の分離に伴うあの死と地獄を、味わったことがあるかと」。ルターがウィッテンベルクに戻ると、彼らはルターに魔術を試みた。ルターは次のような荒っぽい言葉で立ち向かった。「おまえたちの霊の鼻づらをひっぱたいてやる」。その挑戦に、彼らは悪魔のようにふるまった。しかし、それで彼らの魔力は破られた。

極端な場合には、断固として取り扱わなければならなかった。しかし、たいていは、御霊が乱れを見過ごし、取りのけてくださった。それ以上、人目にさらすことはなかった。今日では集会をすべての人に開くことはできない、と言う人が多い。それなら、神をも締め出さなければならない。私たちに必要なのは、もっと神が来てくださって、集会を治めてくださることである。どんな犠牲を払っても、神が自由に現れてくださるようにしておかなければならない。聖徒たち自身が、あまりに多く混乱と反逆の中にある。祈りと、自分を低くすることを通して、神が集会を引き受けてくださるのだ。これが、初めのころの秘訣だった。私たちは祈りと愛と一致のうちに結び合っていた。どんな力も、これを壊すことはできなかった。しかし、自我は焼き尽くされなければならない。集会は、御座を通して治められなければならない。へりくだりと祈りを通して、サタンが住めない霊的な雰囲気が作られなければならない。そして初めのころ、私たちはこれを実際に味わっていた。それは、宗教的な熱心や、肉的な宗教上の野心とは正反対のものだった。私たちは、今日の「元気」や「てきぱきやれ」といったやり方を、何も知らなかった。「ペンテコステ」に関するかぎり、そのしくみ全体が、まがいものの産物である。聖くなるには時間がかかる。世は急ぎ足で進む。しかし急いでも、神のもとでは少しも進まない。

「アズサ」の働きが深かった理由の一つは、働き人たちが新参者ではなかったことである。彼らの多くは、ホーリネスの陣営や宣教地などから召され、何年も備えられてきた人々だった。彼らは焼き尽くされ、試され、確かめられていた。その多くは、鍛えられた古参兵だった。彼らは神と共に歩み、神の御霊について深く学んでいた。彼らは開拓者であり、「突撃隊」であり、火を世界じゅうに広げるためのギデオンの三百人だった。ちょうど弟子たちがイエスによって備えられたのと同じである。今では私たちは、「入り混じった群衆」を抱えこんでいる。そして背教の種が、働くだけの時を得てしまった。「初めの愛」も、おおむね失われている。多くの場合、犬は「自分の吐いた物に帰って」しまった。バビロン的な教えと慣わしに戻ったのである。弱りはてた母親に、健やかな子供を産むことはほとんど期待できない。

初めのころは、御霊がたいへん深く取り扱われ、人々もたいへん飢え渇いていた。そのため、肉的な人間の霊が集会に持ち込まれると、ほとんど必ず、御霊の働きを大きく妨げた。それは、内輪の選ばれた集まりに、よそ者が押し入ったようなものだった。その存在は、痛いほど目立った。人々は神を求めていたのだ。神はその聖なる宮におられ、地（人間的なもの）はそのみ前に沈黙しなければならなかった。人間の霊は、悲しみと痛みをもたらすだけだった。今日のいわゆる、とどまって待つ部屋や祈りの部屋は、かつての部屋の影にすぎない。あまりにしばしば、人間的な熱狂を発散する所や、聖霊によると称して精神的に酔いしれる所になっている。その多くは一種の死の部屋であって、神の清い御霊はほとんどない。こうであってはならない。ホーリネス運動にも、ものすごく多くの狂信があった。初めのころ、「ペンテコステのミッション」でまず考えられ、まず備えられたのは、「とどまって待つ」部屋だった。そこは神聖な所、一種の「聖なる地」とされていた。互いへの思いやりもあった。人々はそこで、自分のあまりに活発な思いと霊の働きから離れて、静まろうとした。しばらく世をのがれ、ただひとり神と向き合おうとしたのだ。そこには、騒がしく荒々しい、人を興奮させる霊はなかった。そういうことは、少なくともほかの場所でならできた。容赦のない世の要求と混乱は、締め出されていた。そこは、こうしたものからの一種の「のがれの町」であり、「憩いの港」だった。そこでは神の声を聞くことができ、神が彼らの魂に語ってくださった。人々はそこで、何時間も黙って過ごした。人知れず自分の心を探り、これからの行いについて主のみこころを確かめたのである。今日の環境の中では、こういうことはほとんど不可能に思われる。私たちは、神のみ前に出ることによって、自我に死ぬ。そしてそのためには、霊が深く静まっていなければならない。私たちには「至聖所」が必要なのだ。昔のユダヤ人のだれが、今日私たちがミッションでしているようなふるまいを、神の宮であえてしただろうか。そうすれば、死を招いたことだろう。私たちは、愚かさと狂信的な自己主張に満ちている。形式的なローマ・カトリックの人々でさえ、全体として、私たちよりも敬う心を持っている。

8月26日の日曜日、ペンドルトン牧師と、その教会員の四十人ほどが、私たちと共に礼拝するために八番街とメイプル通りに来た。彼らは自分たちの教会で

「バプテスマ」を受け、「異言」で語っていた。ホーリネス教会は、このことを理由に、彼らを彼ら自身の建物から追い出していた。教会にとっては、それは許しがたい罪だったのだ。この会衆は、自分たちのお金で会堂を建てていた。その財産は1万ドルの値打ちがあった。しかし彼らは、イエスに従うために、喜んでそれを手放した。その建物は、協会の名義になっていた。このような場合、それは大きな誤りであるように思われる。財産は、その地の集会のものであるべきだ。この数週間前、私は「アズサ」でペンドルトン兄弟に会った。そのとき、いつか私たちは共に礼拝することになると思う、と彼に言うように示された。それは、八番街とメイプル通りを手に入れる前のことでさえあった。そのころ私は、自分の集会を持っていなかった。しかし、その示しは主から来たものだったことがわかった。そのとき彼は、ほかに礼拝の場所が必要になるとは、思ってもいなかった。彼はまだ「バプテスマ」を受けていなかった。教会が彼を異端のかどで裁こうとしていると聞いて、私は、もし追い出されたら私たちの所に来るようにと、彼らを招いた。二日後、彼らは追放され、私の招きに応じた。彼らは一団となってやって来た。私は、まさにこういう助けを求めて祈っていた。このころには、体がひどく疲れきっていたからである。

伝統は、人を奴隷にするその力において、恐ろしいのろいである。ホーリネス教会は、ペンドルトン兄弟とその群れがすっかり道を踏みはずしたと、疑いもなく本気で信じていたのだ。その教団に、彼ら以上の牧師も教会員もいなかったのだが。この経験のあと、ペンドルトン兄弟は、二度と自分の頭の上に教理の屋根をかけはしない、と宣言した。彼は神のために進み続けると決心していた。多くの人が、教会の制度の中に、党派の境界の内側に閉じ込められている。そのあいだにも、神の大きく自由な牧場が、目の前に広がっているのだ。その牧場を限るのは、周りを囲む神のみことばだけである。『ついに一つの群れ、ひとりの羊飼となるであろう』（詩篇二三篇参照）。伝統的な神学、すなわち部分的な真理と啓示は、たちまち律法になる。良心は、中国の纏足のように、すっかり縛られ、それ以上進めないように閉じ込められてしまう。

私がダニエル・オーリー兄弟に初めて会ったのは、ここ八番街とメイプル通りでだった。彼は集会に来て、私たちは共に笑いの祝福にあずかった。のちに私は、インドと中国で彼と一緒になった。彼は最後にアフリカで亡くなった。そのころ、私たちは魂のためにひどく重荷を負っていた。教会で何度も徹夜の祈りをした。一晩じゅう祈り続けるのは、たやすいことに思えた。たいていは、気づく間もなく夜が明けていた。眠くはならなかった。私たちは、時のない永遠のいのちに入っていたのだ。主の臨在は、驚くほど現実だった。ときには、一夜が三十分ほどにしか思えなかった。それほど私たちは、御霊によって生かされ、高揚させられていた。

9月9日の日曜日は、すばらしい日だった。何人もが、何時間も力の下に倒れて横たわっていた。祭壇の前は一日じゅういっぱいで、集会はほとんど途切れなかった。何人かが「バプテスマ」を受けた。そのころ、私たちはほとんど説教をしなかった。人々は神に心を奪われていた。集会のあいだ、ペンドルトン兄弟と私は、たいてい低い壇の上に長々とうつぶせに伏して祈っていた。そのころは、うつぶせにならずにいることは、ほとんどできなかった。主の臨在が、それほど現実だったのだ。そして、この状態は長いあいだ続いた。私たちは、集会を導くことにはほとんどかかわらなかった。だれもが、ただ神だけを仰いでいた。知らせのために人々の注意を引かなければならないときには、謝りたいような気持ちになったほどだ。勝利が絶え間なく押し寄せていた。神が人々の注意をとらえておられた。会衆は、ときに悔い改めのあまり身をふるわせた。そのころ、神は罪を深く取り扱われた。罪は宿営の中にとどまっていることができなかった。

ときには、お金についての私の祈りが、驚くほどかなえられた。私は、家の家賃に10ドル、トラクトの代金に5ドルが必要だった。家主は、私が何も言わないのに、その月の家賃を帳消しにしてくれた。それから、ある姉妹が、封をした封筒を私に手渡した。開けてみると、ちょうど5ドルが入っていた。私は、自分の必要について一言も話していなかった。

このころ、新約教会が分裂した。私はそれにかかわっていなかったことを喜んだ。スメール兄弟は、「バプテスマを受けた」聖徒たちを窮地に追い込んでいた。彼はついに、彼らの証しを退けたのだ。そこでエルマー・フィッシャー兄弟が、サウス・スプリング通り327½番地に、もう一つのミッションを始めた。「アッパー・ルーム」ミッションとして知られた所である。「アズサ」の白人の

聖徒の大部分が、新約教会の「バプテスマを受けた」人々と共に、彼について行った。ここはのちに、一時期、町でいちばん力のあるミッションになった。このころには、「アズサ」も新約教会も、おおむね神の期待を裏切っていた。私はまもなく、八番街とメイプル通りをペンドルトン兄弟に引き渡した。疲れきっていて、それ以上、集会で絶えず奉仕を続けることができなかったのだ。私は長いあいだ、祈りと集会で絶えず張りつめていた。休息と気分転換が、どうしても必要だった。

「ペンテコステの」働きの初めに、私は御霊のうちにひどく心を砕くようになった。聖霊と、御霊の「賜物」とを高めることによって、イエスが軽んじられ、「宮で見失われ」ることのないように、と。イエスが「すべてであり、すべてのもののうちにいます」ことを見失う大きな危険があるように思われた。私は、イエスを、人々の前で中心の主題、中心の人物にしておこうと努めた。イエスこそが、私たちの説教の中心であるべきだ。すべては、イエスを通し、イエスのうちにあって来る。聖霊は、「キリストのものを知らせる」ために与えられているのだ。カルバリのわざ、すなわちあがないが、私たちの思いの中心でなければならない。聖霊は決して、私たちの注意をキリストからご自身へとそらされない。むしろ、キリストをいっそう豊かに現してくださるのだ。今日も、私たちは同じ危険の中にある。キリストを知ることより深いものも、高いものもない。すべては、そのために神から与えられている。「一つの御霊」も、そのために与えられている。キリストは私たちの救いであり、私たちのすべてである。それは、私たちが「キリストの愛の長さ、広さ、高さ、深さ」を知るためである。また『知恵と啓示との霊』を持って、彼（キリスト）を知るためである（エペソ一・一七）。パウロが追い求めたのも、「彼（キリスト）を知る」ことだった。ある夜、私は導かれて、八番街とメイプル通りの会衆に、突然イエスを示した。彼らは、聖霊と「賜物」を高めるあまり、イエスを忘れかけていたのだ。そこで私は、キリストを彼らの前に差し出し、思いめぐらすように促した。彼らはまったく不意をつかれ、たちまち罪を示された。神が私にそうさせられたのだ。そのとき彼らは、自分たちの誤りと危険に気づいた。このころのある夜、私はキリストを宣べ伝え、ふさわしい位置にキリストを置いて、人々の前に示していた。すると御霊が、それを喜んでおられることを強くあかしされた。私はその臨在に圧倒され、魂にイエスが力強く現されるうちに、力なく床に倒れた。パトモス島のヨハネのように、私はイエスの足もとに倒れたのだ。

このころ、私はトラクトを書いた。次はその抜粋である。「私たちは、キリストにあってでなければ、教理を持つことも、経験を求めることさえも許されない。多くの人が、手の届くかぎりのあらゆる電池から、すすんで『力』を得ようとする。奇跡を行い、人々の注意と崇拝を自分に引きつけるためである。こうして彼らは、キリストから栄光を奪い、肉において見えを飾っている。今日、宗教上もっとも必要なのは、柔和で心のへりくだったイエスに、本当に従う者たちであるように思われる。宗教的な熱狂は、すぐに衰えてしまう。人間の霊、見せびらかしたがる宗教的な霊が、あまりに幅をきかせている。しかし私たちは、私たちの説教の題であるキリストから離れてはならない。キリストだけが救うことがおできになる。人々の注意は、何よりもまず、そしていつも、キリストに向けられていなければならない。本当の『ペンテコステ』は、罪の強い自覚と、神への立ち返りを生み出す。偽りの現れは、興奮と驚きを生むだけである。罪や自我の生活は、それによって実質的には少しも痛手を受けない。私たちは、自分の確信が求めるものを手に入れなければならない。自分の心の飢え渇きを信じて、神と共に進みなさい。悪魔に、本当の『ペンテコステ』を奪われてはならない。聖霊や『賜物』をイエスよりも高めるような働きは、どれも最後には狂信に行きつく。私たちにイエスをあがめさせ、愛させるものは、何であれ良く、安全である。その逆は、すべてを滅ぼす。聖霊は大いなる光である。しかし、その光はいつもイエスに向けられ、イエスを現すのだ」。

新約聖書の翻訳者A・S・ウォレルは、「ペンテコステ」の熱心な友であり、「バプテスマ」を求める人だった。彼は『ウェイ・オブ・フェイス』に次のように書いた。「これらの集会では、ほかではめったに見たことがないほど、イエスの血があがめられている。イエスをあかしすることのうちに、大きな力が現れていて、魂に対するすばらしい愛が伴っている。また、『御霊の賜物』も授けられている。集会の場所は、アズサ通りと、ジョセフ・スメールが牧師をしている新約教会と、八番街とメイプル通りである。スメールの教会の人々の何人かは、最初

に『異言』で語った人々の中にいた。しかし、その大部分は、彼の教会で束縛を感じて離れていった。八番街とメイプル通りでは、バートルマン牧師とペンドルトン牧師がおもな指導者である」。

第四章　八番街とメイプル通りの集会（その三）

1906年9月、『ウェイ・オブ・フェイス』に次の手紙が載った。書いたのは、カナダのトロントのW・C・ダンブル博士で、そのころロサンゼルスを訪れていた。しかし、まずパイク編集長自身の前書きを引く。

彼はこう書いた。「この数か月、私たちは親愛なるバートルマン兄弟から、ロサンゼルスでの聖霊の大いなる働きについての手紙を受け取ってきた。私たちが載せた報告には、いくらかの批判があった。そこで、現地のほかの人々に手紙を書こうとしていた。ちょうどそのとき、親愛なる兄弟W・C・ダンブル博士が、次のたいへん興味深い記事を寄せてくれた。博士がそこで見て感じたことを伝えるものである」。次はダンブル博士の記事である。「読者の中には、ロサンゼルスを訪れたよそ者の印象に、興味を持つ人がいるかもしれない。ここでは、ウェールズと同じような御霊の恵みの働きが進んでいる。しかし、ウェールズの働きはおもに教会の中にあるが、ここの働きは外にある。諸教会はこれを受け入れようとしない。あるいは今までのところ、批判し、責める霊で、遠巻きにしている。ウェールズの働きと同じように、これは聖霊によって導かれる信徒のリバイバルである。働きのために借りられる会館や、崩れかけた古い建物で行われている。

これは驚くべき運動である。『異言の賜物』が現れることが、その特色だと言えるだろう。この不思議な異言を聞くことのできるミッションは、三つある。私はゆうべ、バートルマン牧師の集会で過ごすという、めったにない喜びにあずかった。もっと正確に言えば、彼とペンドルトン牧師が名目上の指導者であって、実際には聖霊が治めておられる集会である。イエスがかしらであり、聖霊がその執行者であると宣言されている。だから、説教も、聖歌隊も、オルガンも、献金集めもない。献金は、めいめいがすすんでテーブルに置くか、壁の箱に入れるものだけである。そして、ゆうべは神が力強く臨在しておられた。だれかが歌いはじめる。ハレルヤやアーメンをはさみながら、賛美歌が三つ四つ歌われる。すると、重荷に耐えかねた魂が立ち上がって叫ぶ。『イエスに栄光あれ！』そして、すすり泣き、涙を流しながら、大きな戦いと大きな救いについて語る。それから、三、四人が、顔を輝かせて床に倒れている。一人が神を賛美しはじめ、やがて手を挙げて、『異言』を語り出す。今度はペンドルトン牧師が語る。彼は必要を感じて、『バプテスマ』を求めた。すると神は、それまで味わったことのない神の臨在と愛と大胆さの経験をもって、彼にバプテスマを授けてくださった。そのために、彼の教会の役員たちは、彼に身を引くように求めた。彼の教会の人々の何人もが彼と共に出て、バートルマン牧師と力を合わせることになった。次に、やさしい顔をしたドイツ人のルーテル派の老婦人が語った。人々が『異言』で神を賛美するのを聞いて、彼女は不思議に思った。そして、御霊のバプテスマを受けられるようにと祈りはじめた。床についたあと、彼女の口から『異言』があふれ出た。彼女は夜通し主を賛美し、子供たちを驚かせた。

次に、バートルマン牧師の口から、『異言』による勧めが、とても甘美に語られる。すると、一人また一人と急いで祭壇へ進み出て、ついには手すりの前が求める人々でいっぱいになる。この働きにどんな批判があるにせよ、神がこれを認めておられることは明らかである。主は『救われる者を日々仲間に加えて』くださっている。このリバイバルは、まだ始まったばかりだと信じられている。大きな注ぎが目前に迫っていること、私たちがこの時代の夕暮れにいることの確信が与えられている。『異言』のおもな内容は、『イエスはまもなく来られる』である」（W・C・ダンブル、カリフォルニア州ロサンゼルス、1906年9月6日）。

ダンブル博士は、同じ新聞にまた書いた。「バートルマン牧師の教会では、毎晩、日曜日は一日じゅう、金曜日は毎週夜通し、集会が開かれている。式次第はなく、集会は神の定める順序で進むものとされている。尊い聖霊が、すべてを取り仕切る執行者である。指導者たち、つまり牧師たちは、たいてい床にうつぶせになっているか、ふつうなら説教壇のある所にひざまずいている。しかし、説教壇も、オルガンも、聖歌隊もない。ある若い婦人が、初めてこの集会に来て、御

霊の力の下に置かれた。彼女は三十分のあいだ、顔を輝かせて横たわっていた。周りのことはまったく忘れて、言い表せない幻を見ていたのだ。やがて彼女は、『栄光！　イエスに栄光！』と言いはじめ、不思議な異言をすらすらと語った。先週の安息日には、集会は朝早くから真夜中まで続いた。説教はなく、祈りと証しと賛美と勧めがあった」（W・C・ダンブル）。発表されたこれらの手紙には、ほかにも興味深いことが多く書かれていたが、紙面の都合で引くことはできない。

実際、初めのころは、壇も説教壇もできるかぎり取り払われていた。私たちは、それらが必要だとは感じなかった。祭司階級や、教会制度の悪弊は、すっかり一掃されていた。私たちはみな「兄弟」だった。だれもが自由に神に従った。神は、だれを通してでも、お望みのままに語ることがおできになった。神はその霊を『すべての人に』注ぎ、男女の僕たちにさえ注いでくださったのだ（使徒二章）。私たちが人を重んじたのは、神から与えられた「賜物」と務めのためだけだった。運動が背教に向かいはじめると、壇はより高く造られ、上着のすそはより長くなった。聖歌隊が組織され、人々を「ジャズ」で浮かれさせるための弦楽隊が現れた。王たちが再び王座に戻り、主権を取り戻した。私たちは、もはや「兄弟」ではなかった。そして分裂が増えていき、ほかにも同じようなことが続いた。シーモア兄弟が「アズサ」で古い空き箱の中に頭を入れていたあいだは、すべてがうまくいっていた。のちに、人々は彼のためにも王座を造った。今では、位階制度は一つではなく、たくさんある。（これを書いている今、「アズサ・ミッション」は人けがなく、シーモア兄弟は天にいる。）ここで、キプリングの不朽の詩を思い起こしてよいだろう。「騒ぎも叫びも消え、将たちも王たちも去っていく。それでもなお、あなたへのいにしえのいけにえは立っている。へりくだった、悔いた心が」。神は、私たちが人や場所を拝むことをお許しにならない。

1906年、私は別の宗教新聞に次のように書いた。「私たちは不信仰にのろわれながら、やっとのことで上に向かってもがいている。かつて教会に豊かに授けられながら、とうの昔に失われた、あの栄光の光と力を取り戻すためである。教会の堕落によって、私たちは不信仰のやみに投げ込まれた。そのやみに、私たちの目はあまりに長く見えなくされてきた。目が弱っているので、私たちは光に逆らうのである。私たちは、教会として、それほど深く堕ちていた。ルターが『信仰による義認』の真理を回復しようとしたとき、当時の教会は、それを極悪の異端として戦い、抵抗した。人々はそのために、いのちで代価を払ったのだ。そして、ウェスレーの時代にも、ほとんど同じだった。しかし今、私たちは『ペンテコステ』の経験そのものの回復を目にしている。『後の雨』と共に、力が回復しているのだ。始められた働きを仕上げるために、さらに大きな栄光のうちに回復しているのである。私たちは再び、かつての教会の高さにまで引き上げられるだろう。教会の働きを完成するためである。私たちは、初代の人々が失敗に陥ってやめた所から始める。そして最後の大宣教命令をすみやかに果たし、キリストの来臨への道を開くのだ。

私たちは、教会が失敗した幾世紀、長く陰うつな『暗黒時代』を飛び越えることになる。そして時を縮めて、今、初めのころの力と勝利と栄光に、すっかり回復されるのだ。私たちは神の恵みによって、腐敗し、堕落した、偽りのキリスト教から抜け出そうとしている。高ぶった偽善の教会の会堂が、私たちをうそつき呼ばわりしようと、私たちに対して陣を敷いている。『雇人』たちは、私たちの血に飢えている。律法学者とパリサイ人、祭司長たち、会堂司たちは、みな私たちとキリストに敵対している。

神のみこころでは、ロサンゼルスこそがその場所であり、今こそがその時であるように思われる。教会が、かつての地位と恵みと力とに回復される場所と時である。教会が完全に回復されるための、時が満ちたように思われる。神は世界の各地でご自分の僕たちに語り、その多くをロサンゼルスに送ってこられた。彼らは昔のように、再び天下のあらゆる国々を代表して、『ペンテコステ』のために上って来たのだ。救いの喜ばしい知らせを携えて、再び全世界に出て行くためである。後の『ペンテコステ』のために、働きの拠点は古いエルサレムからロサンゼルスへ移された。そして、いたる所で、神から与えられた、この経験へのすさまじい飢え渇きがある。ウェールズは、世界じゅうに及ぶこの神の力の回復の、ゆりかごとして定められていたにすぎない。インドは、主が『お育ちになった』

ナザレにすぎなかったのだ」（F・バートルマン、1906年10月、『アポストリック・ライト』）。

私はまた、同じ新聞に書いた。「もし人々がこの神の働きを支配し、独占し、所有しようとするなら、御霊は働くことを拒まれるだろう。自分の栄光のためであれ、組織の栄光のためであれ、同じである。栄光は去ってしまう。これを、神をふさわしい位置にお迎えする働きとしよう。そうすれば私たちは、人がまだ夢見たこともないような働きを見るだろう。もし私たちが御霊を独り占めしようとしたら、神はその尊い御霊を私たちから取り去るか、与えるのを控えなければならなくなる。このような時にそうなったら、恐ろしいことだろう。私たちの務めは、ただ神を人々に届けることである。このために、ただこのためだけに、自分を明け渡そう。これまでの経験の中で、『とびいなご』となってきたものがある。党派の霊、地域による違い、偏見などである。それらはみな肉的であって、愛の律法に、キリストの『一つのからだ』に逆らい、それを壊すものである。『わたしたちは皆、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受けた』（第一コリント一二・一三）。自己満足は、いつも敗北を招く。ああ、兄弟よ。草一本生えなくなった、習慣で踏み固めた古い道を、ぐるぐる回るのはやめなさい。生ける水のほとりの、緑の牧場に踏み出しなさい」（F・バートルマン、1906年12月）。

私は『ウェイ・オブ・フェイス』に、次のように書いた。「私たちは、教会の堕落と没落の『暗黒時代』から戻りつつある。私たちは、時の歴史の中で、もっとも重大な時に生きている。御霊は、私たちの計画も、たくらみも、骨折りも、理論も、すべて払いのけて、ご自身が再び働いておられる。私腹を肥やしてきた多くの人々が、激しく抵抗している。彼らは、この状況にふさわしく立ち上がるための犠牲を払うことができないのだ。

真理の尊い鉱石、すなわち人の支配の束縛からの教会の解放は、初めはどうしても粗い形で、掘り出したままの鉱石としてもたらされた。自然界と同じように、それはあらゆる種類の、値打ちのない有害な成分に囲まれてきた。度を越した、乱暴な人々が、この働きの仲間になろうとしてきた。巨大な真理が、地の底でもがいている。教会の歴史の中で逆戻りしていった悪の地すべりによって、生き埋めにされていたのだ。しかし、それは今、噴き出しつつある。今はやむをえずまだまとわりついている、好ましくないものを、まもなく振り払って自由になるだろう。キリストはついにかしらと宣言されている。聖霊がいのちである。肢体は、原理においてはみな『一つのからだ』である」（F・バートルマン、1906年12月）。

もう一つ、『ウェイ・オブ・フェイス』の記事から抜粋する。「今この時、私たちのあいだに起こっている現れのうちに、新しい秩序が立ち上がってくるのが見てとれる。過去の混乱と失敗の中から立ち上がってくるのだ。あたりは、理想を待ち望む、心を奮い立たせる期待に満ちている。しかし、不信仰が私たちの前進を遅らせる。私たちの先入観は、機会を前にして私たちを裏切る。それは損失と破滅に導く。しかし今日、世は目覚めつつある。安逸と死の、罪深い眠りから驚いて起き上がっているのだ。四方八方から、世界の各地から、手紙が殺到している。『これは、いったい、どういうわけなのだろう』と、熱に浮かされたように尋ねてくるのだ。ああ、私たちは人類の、とりわけ今日の教会の脈をとっている。大きな期待がある。そして、この飢えて待ち望む子供たちが、パンを求めて泣いている。冷たい知的な思索は、彼らに拒絶のほかは何も与えてこなかった。御霊の領域には、知性だけで達することはできない。奇跡は再び私たちを驚かせ、神が今も生きておられ、私たちのあいだで働いておられるという事実に気づかせた。

古い形は崩れ、過ぎ去りつつある。その弔いの鐘が鳴らされている。新しい形、新しい秩序といのちが現れつつある。当然、大きな戦いがある。サタンは、妨げるために地獄の軍勢を動かしている。しかし、私たちは勝利する。尊い鉱石は、掘り出したあとで精錬されなければならない。『尊いもの』は『卑しいものから取り分け』られなければならない。荒削りの開拓者たちが、深いやぶを切り払って、私たちが進む道を開いてくれた。この働きには、英雄的で積極的な精神が必要である。しかし、もっと純粋な形があとに続くだろう。

時代を通して、人々が語ってきた。しかし今日、私たちを呼んでいるのは、御霊なる神の声である。初代教会が神の前での力と地位を失って以来、私たちはもがきながら戻ろうとしてきた。私たちは、『～派』と『～主義』、理論、信条、教

理（そして分派）、争点と運動、祝福と経験と信仰告白を通って、はい上がってきた。流れは、その源より高くは上れなかった。私たちには、もう神学も理論もいらない。そんなものは悪魔にくれてやれ。神のもとへ行こう。多くの人が、今の経験の中に縮こまっている。悪魔に捕まるのではないかと、もっと神を求めることを本当にこわがっているのだ。そんな愚かな束縛は捨ててしまえ！　自分の心に従いなさい！　自分の心の飢え渇きを信じて、神のために進みなさい。私たちは底にこびりついている。私たちには神の火が必要なのだ。拘束服のようなやり方と宗教上の規則が、私たちの霊的ないのちを、ほとんどすっかり押しつぶしてしまった。神を悲しませるよりは、すべての人を悲しませるほうがよい」（F・バートルマン、1907年1月）。

「アズサ」の注ぎの前には、すべてがコンクリートのように固まって、人に縛られていた。何一つ、神のために動くことができなかった。このかたまりを解き放つには、ダイナマイト、すなわち聖霊の力が必要だった。そして神は、それを備えてくださった。かたまり全体が、再び解き放たれた。私たちの「ヨベルの年」が来たのだ。前のヨベルの年は、五十年前、1859年の大リバイバルで実現していた。

私たちが住んでいた家が売られ、引っ越さなければならなくなった。いくつかの部屋を見に行くと、とても感じがよく広く見えたので、すぐに借りた。それは、神が私たちのために備えてくださった場所で、サン・ペドロ通り1319番地にあった。しかし、これについては不思議な経験をした。引っ越してみると、同じ部屋とはとても思えなかった。ずっと狭く見えたのだ。それは、御霊による神の「目の錯覚」だった。しかし、神は私たちを満足させてくださった。前はとても住みよい所にいたので、大きな変化だった。家主は、家の片側に住んでいて、たいへん悪い人だった。あいだには共同の通路が一本あるだけで、両方の家で使う「硬貨式」のガスメーターが一つあった。25セント硬貨を入れるのがだれの番かで、ずいぶんもめた。しかし主は、私たちを穏やかに保ってくださった。家主はよく酒を飲み、浮かれ騒いだ。身持ちも悪いのではないかと、私たちは疑っていた。彼女は家族のいるやもめだった。男の訪問者がいた。そこにとどまるには、多くの恵みが必要だった。しかし、そのときは、それが神の私たちのための選びだったのだ。

今度は、教会の家主のユダヤ人が、家賃を上げてきた。どうやら、私たちがあまりに栄えていると思ったらしい。このころには、私は祈りと絶え間ない集会とで、すっかり疲れきっていた。そこで、牧会をすべてペンドルトン兄弟に引き渡した。彼は以前から牧師だった。それから私は、休んで体を回復させるために、家にいることが多くなった。私は多くのものを書き、絶えず集会に出ていた。そのうえ、注ぎの前にもあとにも、すさまじい祈りの包囲戦をくぐり抜けてきた。それで、私の神経はすっかりまいっていた。このころは、ふつうのはがきを書くことを考えるだけでも、心が苦しかった。今、私は、主が導かれるままに、祈りと、みことばの学びと、伝道の働きに身をささげることにした。それまでは、昼も夜も八番街とメイプル通りの集会に縛られていた。エバン・ロバーツがウェールズのリバイバルのあとで神経を病んだことに、私は同情できる。八番街とメイプル通りの集会は、このあとも何年も、自由なミッションとして続いた。私たちは、それに名前を付けなかった。神は、それを驚くほど用いてくださった。ヨーカム博士が、ペンドルトン牧師と共に、長いあいだそこで集会を開いた。何百もの魂が、そこで救われ、祝福された。ペンドルトン兄弟はついに亡くなり、土地は売られ、建物は取り壊された。八番街とメイプル通りでなされた善いこと、祝福を受けた魂と体は、天だけが明らかにするだろう。もう一度繰り返しておきたい。八番街とメイプル通りのミッションと「アズサ」とのあいだに、ねたみや張り合いがあったことは一度もない。神が、私たちをその霊から守ってくださった。そういう霊があったら、私たちは神の祝福を奪われていただろう。シーモア兄弟はいつも、私には御使の一団が付き添っている、と言っていた。

私は幾晩も夜通し祈った。それは苦労とは思えず、特権に思えた。主がとても近くにおられた。体はとても弱っていたが、新しいトラクトもいくつか書いた。私の霊は、絶え間ない奉仕から休むことができなかった。メッセージが私の上にあった。伝統的な教えが、人々の中にあまりに深く根づいていた。そのため御霊は、このトラクトの働きを通して、絶えず彼らを解き放とうとされた。

「私たちは、人間のあらゆる意見と格言を、試金石に当てるように聖書に当てて、試すべきである」（ルター）。ルター自身も、ローマの伝統から離れるときに、ゲツセマネの苦しみを何度も味わった。私たちの信仰のあり方そのものの一部となっているものから離れるのは、死ぬようなことである。伝統は、神のみことばそのものと同じように私たちを縛るようになり、みことばと同じものとして受け入れられてきた。しかし、どれほど多くの伝統が、聖書に照らしてまったくの誤りだと証明されてきたことか。

私は気分を変えるためにサンタバーバラに行き、「フェイス・ミッション」と、そこのホーリネス教会で説教した。それから、サン・ペドロのペニエル・ミッションで、ハリー・モース兄弟と共に日曜日を過ごした。説教をして、恵まれた時を過ごした。私の時間は、おもに八番街とメイプル通り、「アズサ」ミッション、パサデナ、ハーモンでの集会に分けられていた。サウス・スプリング通り327½番地の「アッパー・ルーム」ミッションにも、たびたび行った。1月、私たちはきびしい試みに遭った。私にはお金がなく、食べ物もほとんど尽きていた。そのうえ悪魔が、ひどい胃の神経痛で私を襲った。ひどく苦しかったので、私は必死に主に叫んだ。主は私に触れて、たちまち痛みを取り去ってくださった。私は集会に行って、主に栄光を帰することもできた。

ミッションは再び人の手に流れつつあり、ときには多くの「肉」が現れた。私は「天よりの啓示」に忠実であろうと努めた。ときには、現れが、御霊がほとんどないように思われるものになった。それらは、跡形もなく消えてしまうのだった。またあるときには、集会はとても力強かった。しかし誘惑は、今日と同じように、いつも中身のない現れに向かっていたようだ。それには、とくに十字架を負うことも、自我の生活に死ぬことも要らない。だから、いつも人気があるのだ。しかし「古き人」に対しては、安全で正直なやり方が一つしかない。顔を下にして、二メートル近い土の下に埋めてしまうことである。強くひっかけばひっかくほど、深く沈んでいくだろう。

私は再びサン・ペドロに行き、ペニエル・ミッションで使徒行伝二章四節から説教した。私が「まだ語り終えないうちに」、御霊が下った。私たちはすぐに祈りに入り、すばらしい時を過ごした。ハーモンでは、何度か説教した。

神は私に、すばらしいトラクトの働きを与えてくださっていた。二年のあいだに、私は初めに1ドルもなしに、ただ信仰によって、五十八種のトラクトを出していた。そのうち五十種ほどは、自分で書いたものだった。私は二十五万部を配った。費用は少なくとも500ドルかかった。お金を求めたことはなく、何千部も、世界の各地へ無料で郵送した。私は、1ドルも持たずにその働きを終えた。その働きで、お金をもうけたことは一度もなかった。

このころのある晩、私はパサデナの小さなアリー・ミッションに行った。集会のあいだ、私は祈りの重荷を重く負っていた。そこに、ボランティアーズ・オブ・アメリカの元士官だった、若い妻がいた。彼女は数年のあいだ、信仰から離れていた。神は彼女のことを、重く私の心に置かれた。私は、彼女はその夜救われなければならないと感じた。集会は終わろうとしていたが、彼女はまだ心を動かされずに座っていた。11時を過ぎていた。私は彼女に話しかけ、これが最後の機会かもしれないと警告した。それでも彼女は、無関心なまま座っていた。そこで私は、彼女に懇願しはじめた。私が決心を迫ると、人々はそれに腹を立てた。私が行き過ぎていると思ったのだ。しかし、彼女の魂のための苦しい祈りが、私の上にあった。私は、敵ばかりでなく、ほかの働き人のほとんどの反対にも抵抗しなければならなかった。まる一時間、私はこうして、ほとんどひとりで戦った。ときには、勝ち目のない戦いに押し返された。神のみこころを取り違えたに違いない、と思う誘惑にさえ遭った。ついに私は、彼女のための本当の魂の産みの苦しみのうちに、床に倒れた。それが山場だった。私のいのちが、ほとんど押し出されてしまうように思われた。イエスが私たちのためにゲツセマネで感じられたに違いないものを、ほんの少し感じた。この種の祈りには、代価が要る。すると突然、重荷が私から離れた。それは彼女の上に下った。罪の自覚が彼女を捕らえた。彼女は撃たれたように床に倒れ、魂の苦しみのうちに泣き叫びはじめた。こうして三時間近く、彼女は砕かれた心で、もがき、泣きながら、カルバリへ、そして回復へと進んで行った。彼女が立ち上がったのは、午前3時ごろだった。顔には御使のような輝きがあり、完全な勝利のうちにあった。神にすがり続け、自分の確信に従い、御霊に従ったかいがあったのだ。彼女は、その夜、神に逆らって「死線」のすぐ近くまで来ていたと告白した。この姉妹は、のちにとり

なしの務めを受け、集会での魂の産みの苦しみにおいて、驚くほど神に用いられた。

ある夜、私がハーモンで説教していると、一人の説教者が跳び上がって、私のメッセージをさえぎった。彼は、家に帰らなければならないので、証しをしたいと言った。しばらく話したあと、彼は腰をおろした。彼は私のメッセージを台なしにし、御霊はたいそう悲しまれた。私は彼に逆らわず、事のすべてを神にゆだねた。集会は台なしになった。私はそれ以上話そうとしなかった。彼は、話し終えたあとも、少なくとも三十分はその場に残っていた。この同じ男は、以前にもほかの集会で私に反対していた。悪魔は、私の奉仕を妨げるために、彼に私の後を追わせていたのだ。しかし今度は、彼はやり過ぎた。神が彼を打たれた。二日後、彼は私に手紙をよこして許しを求め、もう二度と私に反対しないと約束した。また、ハーモンに戻って来て、集会でおおやけに許しを求めた。

私は再びパサデナに行き、小さなアリー・ミッションで話した。私のメッセージは警告だった。罪人たちは、ひどく神をもてあそんでいたのだ。私が話していると、祈りの霊が二人の姉妹の上に下った（メイミー・クレイビルと、ジェシー・ヒューイットである。ジェシーは、ついこのあいだ驚くほどみごとに立ち返った姉妹である）。私は集会を閉じて、働き人たちを祈りに招いた。しかし、この二人の姉妹のほかは、だれも残らなかった。二人は離れることができなかったのだ。ほかの人々は、戦いの中で私たちを見捨てた。私は、姉妹たちだけを残して行くことはできなかった。二人はひざまずいて、重い祈りの重荷を負っていた。主が二人を捕らえておられた。それから、祈りの霊が私をも捕らえた。私たちがそこで主の前に祈り、泣いていると、罪人たちが私たちのほうに押し寄せて来た。私たちの重荷は、彼らのためのものだった。そのごろつきの一団は、逆らうあまり、ほとんど悪霊につかれたようになった。それは「やみの支配の時」だった。ミッションそのものは、暗い路地を入った、ブロックの真ん中にあった。そこには街灯もなく、警察の守りもなかった。御霊は三度、私のいのちが危ないと警告された。このころには、ならず者たちは私の血に飢えているようだった。彼らを率いていたのは、ひどく悪い無神論者のドイツ人だった。

今度は彼らは、私が二人の姉妹に催眠術をかけたと責めた。私たちは獅子の穴の中にいて、人の力で逃れる道は一つもなかった。この一団は福音を聞き、集会に座り、御霊に逆らってきた。そしてついには、どんな残酷なことでもしかねない者になっていたのだ。必要なら、彼らの手にかかって殉教することも受け入れなければならなかった。これが、私の直面した本当の試みだった。私は、ロサンゼルスの家にいる妻と子供たちのことを思った。しかし神は、その瞬間、私からすべての恐れを取り去ってくださった。それはすばらしい経験だった。ついに、ほかの者より大胆な一人が私の肩をつかみ、立って祈るのをやめろと命じた。私は少しも逆らわず、両手を挙げて神を呼び求めた。殉教者の霊が私の上にあった。神の火が私を取り囲み、私を占領しているようだった。私は少しも恐れを感じなかった。次の瞬間、驚いたことに、私を襲った男が前によろめいてひざをつき、自分のために祈ってくれと私に頼みはじめた。彼はやり過ぎたのだ。神が彼を打たれたのである。残りの群衆も、しばらくは神妙になった。しかし、すぐに元に戻った。

彼らのうち二人が、姉妹の一人をつかまえた。彼女は両腕を挙げて、勝利を叫んだ。神の力が彼女の上に下った。恐れが再び一団の上に下り、彼らは彼女を放した。もう一人の姉妹は、このときには立ち上がって神を賛美していた。二人は兵士のように試みに耐えた。その夜、二人は主のために死ぬことさえ喜んで受け入れただろうと、私は信じている。真夜中になり、私たちがそこでできる善いことは、もうなかった。私たちは悪霊の巣の中にいた。私は明かりを消し、姉妹たちが無事であることを確かめるために、二人を先に外に出した。二人は無事に群衆のそばを通り抜けた。しかし、一団は外で私を待ち構えていた。ドイツ人の無神論者が、短いこん棒を手にして、私を待ち受けて立っていた。私は、最初に出会った二人のごろつきと握手をし、首領をかわした。そして神のあわれみによって、かすり傷一つ負わずに彼らのただ中を通り抜けた。彼らは私に手を触れることができなかった。彼らはきっと、私がおびえるのを期待していたのだろう。しかし神は、私を少しも震えさせずに、平安のうちに守ってくださった。彼らは私たちの後を追うことさえできなかった。私たちはまもなく明るい通りに出て、無事だった。荒っぽい経験だったが、主の御使が私たちを守ってくれたのだ。そし

て私たちは、主の期待を裏切らなかった。姉妹たちは、本当の女傑だった。家に着くと、妻が私に話した。彼女は（ちょうど私たちがいちばん危なかったときに）眠りから目を覚ました。そして、何が起こっているかは何も知らないまま、私の無事を祈ったという。私が危ないと感じたのだ。

その夜、その一団は、彼らのための私たちの涙と祈りをあざけった。しかし彼らがあざけったのは、私たちではなく、キリストだった。私はそれまで、それほど大胆不敵なものを見たことがなかった。彼らはその報いを受けなければならないかもしれない、という気がした。悪魔そのものが、彼らにとりついているかのようだった。中には、クリスチャンの親を持ち、分別のあるはずの者もいた。このことのほんの少しあと、その同じ若者たちの何人かが、突然の、不自然な、恐ろしい死を遂げた。一人は、オートバイに乗っていて、列車に首をはねられた。もう一人は、電柱のてっぺんで、電気の通じている電線に触れて黒焦げになった。彼は架線工だった。三人目は、ガソリンで焼け死んだ。彼は、この同じミッションの近くの路地で、オートバイで修理工場の前を通りかかった。そのとき一人の男が、ガソリンのしみた燃えているぼろ切れを、工場の外へ投げた。それは、たまたま火がついたものだった。それがその若者の顔にまともに当たり、彼は死んだ。

第五章　カリフォルニアからメインへ（その一）

1907年3月の終わりに、オハイオ州コノートに来てほしいという招きを受けた。50ドルの小切手が同封されていた。そこでは「ペンテコステの」集会を望んでいた。指導者は、自分たちは「ペンテコステ」に飢えている、と書いてきた。私は、それが東部へ行けという神の召しだと感じた。しかし、彼らが自分たちのために何を招こうとしているのか、本当にわかっているのだろうか、と思わずにはいられなかった。その手紙は熱狂に満ちているようだった。ジョン・ウェスレーが強くいさめ、戒めたものである。ウェスレーの「狂信」の定義は、「手段なしに目的を期待すること」だった。私は小切手を現金に換えなかった。私とのかかわりが終わったとき、彼らががっかりするかもしれないと恐れたからである。彼らは、「ペンテコステ」とは、自我の生活、肉的な野心、高ぶりなどに死ぬことだと学ばなければならなかった。それは、ただ人受けのする楽しい時を過ごすことではなく、「キリストの苦難にあずかる」ことだった。このことを、彼らはわかっていないと私は感じた。本当のクリスチャンとは、なんらかの形で、どうしても殉教者になるということなのだ。本当のクリスチャンになるために、代価を払おうとする人は少ない。仲間はずれにされ、偽って訴えられ、人から責められることを、受け入れようとする人は少ない。しかし、神がご自分の教会に求められる標準は、いつの時代も一つしかない。今日の信仰告白は、大部分がただの見せかけである。本物は、そのほんのわずかにすぎない。

ある人がルターに、楽しくて役にも立つ本を薦めてほしいと頼んだ。ルターは答えた。「楽しくて役にも立つ本だって！　そういう問いは私の手に余る。良いものほど、人を喜ばせないものだ」。

イエスは、『すべて』を捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはできない」と言われた。実際にどう行うかについては、いくらか条件や説明が要るかもしれない。しかし、その原理は、すべての人にとって同じである。初めの数世紀に堕落して以来、教会は、自分の召しについても救いについても、まったく誤った考えを持ってきた。すべての信者は、百パーセントの献身に召されている。神は、外国の宣教師と、国内のクリスチャンとで、献身の標準を二つに分けてはおられない。そういうことは、聖書には見当たらない。どちらも、神の管理人として、自分の場と召しにおいて、自分のすべてをささげるように召されている。ある人は行き、ある人は祈り、ある人はささげる。この三人がそろって、初めて一人の宣教師ができるのだ。『これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか』。

「堕落」以来、神が人類に対して持っておられた目的と関心は、ただ一つである。それは、人を神のもとに連れ戻すことだった。旧約の時代の全体も、そこでの摂理の取り扱いも、この一つの目的のためにあった。神には、ご自分の民と認められた一つの民、ユダヤ人がいた。この国民に対して、神は一つの目的を持っておられた。彼らのすべての営みは、一つの目的に向かっていた。彼らのすべての礼拝は、その一つの目的を指し示していた。人類を、諸国民を、神についての本当の知識に連れ戻すこと、そして世界のメシヤを迎え入れることである。イエス・キリストがこの地上に来られたとき、その関心はただ一つだった。主の再臨もまた、ただこの一つのことを待っている。この福音が全世界に宣べ伝えられたとき、「それから最後が来る」のであり、「のろい」が取り除かれるのだ。教会は、持てるすべてを用いて、この一つの目的のために、この一つの目標に向かって働いているだろうか。それは確かに、本当に必要な以上の財産や富を、自分勝手に積み上げることではない。自分のほしいものをすべて手に入れてから、要らない1ドルを主に投げ与えることでもない。初代教会が堕落して以来、私たちは順序をまったく逆にしてきた。神は、すべての人にまったく同じ献身を求めておられる。そして、ここにこそ、アナニヤとサッピラの問題が入り込んできたのだ。この時代には、「十分の一」ではなく、「すべて」である。私たちのからだは聖霊の宮であり、私たちはいつも百パーセント主のものでなければならない。私

たちは主のものである。私たちは、自分のものではなく主のものである財産を、悪魔に抵当に入れてしまった。そのあとで、私たちを造られた主が、私たちを買い戻し、あがなってくださったのだ。どんな意味でも、私たちは自分自身のものではない。私たちは「血」によって、あがない戻されたのである。この法則のもとで世界に福音を伝えるなら、どれほどかかるだろうか。あるいは、どれほどかかっただろうか。これらのことを心にとめなさい！　教会は、神の秩序のうちに、正常に動いているだろうか。初代教会以後も今日も、政治と宗教の入り混じった制度は、おおむね雑種の、混ぜものの組織である。それは、身勝手と不従順と腐敗に満ちている。その国は、「天にある国籍」と天の召しを持ち、霊の武器で戦うものではなくなった。そして「この世のもの」となってしまった。

　教理の問題もまた、大きな戦いだった。「アズサ」では、多くの人があまりに独断的だった。教理は、結局のところ、建物の骨組みにすぎない。それは「からだ」の骨格である。骨の上に肉が要り、いのちを与えるために、内に御霊が要るのだ。人々に必要なのは、生きておられるキリストであって、独断的な教理の言い争いではない。初めのころ、分別のない熱心が、働きに多くの害を与えた。いつものことだが、運動にもっとも害を与えたのは、その内側にいる人々だった。しかし神には、頼りにできる本当の英雄たちがいた。その大部分は、まったく無名の所から、突然、名と力を得た人々だった。そして働きが終わると、同じようにすみやかに退いていった。ある人がうまいことを言っている。「人は、星のように、神の命令によって地平線に現れる」。これこそ、本当の神の働きの確かなしるしである。これも、ある人が正しく言っているとおりである。人が時代を作るのではなく、時代が人を作るのだ。その時が来るまでは、だれもリバイバルを起こすことはできない。人々が備えられなければならず、用いられる器も同じように備えられなければならない。

　歴史家ドービニェがうまく言っている。「神は、大いなることをなしとげようとされるとき、その弱い器を、もっとも深い隠れ家から引き出される。そして、しばらくのあいだ晴れの舞台でまばゆく輝くことをお許しになる。そのあとで、再びもっとも深い無名の中へと去らせられるのである」。またこうも言う。「神がご自分の僕を戦場から退かせられるのは、たいてい、もっと強く、もっとよく武装させて連れ戻すためにほかならない」。ルターの場合もそうだった。ウォルムスで地上の大いなる者たちに輝かしい勝利を収めたあと、彼はワルトブルクに閉じ込められたのだ。

　ドービニェはまた書いている。「チャールズ二世やナポレオンのような世の人々の歴史には、その生涯と名声を決める瞬間がある。それは、自分の力が突然、自分に示される瞬間である。神の英雄の生涯にも、それに似た瞬間がある。しかし、それは逆の方向に向かっている。それは、自分の無力と無であることを初めて認める瞬間である。その時から、彼らは上から神の力を受ける。神の大いなるわざが、人の生まれつきの力によってなしとげられることは決してない。神は、ご自分の光と新生といのちを地にまき散らそうとされるとき、その器を選ばれる。そして神が好んで器を選ばれるのは、枯れた骨と、やみと、死のちりの中からなのである。ツウィングリは、体格にも、性格にも、才能にも恵まれた強い人だった。その欠点は、まさにこの強さにあった。神が愛されるような器となるために、彼はその強さが打ち倒されるのを見る定めにあった。彼には、逆境と病の、弱さと痛みのバプテスマが必要だった。ルターは、あの苦悶の時にそれを受けていた。エルフルトの修道院の独房と長い回廊に、彼の鋭い叫び声が響きわたった時である。ツウィングリは、病と死に触れることによって、それを受けるように定められていた」（ドービニェ）。

　人は、神の力を知ることを望む前に、自分の弱さを知るようにならなければならない。人の生まれつきの力と能力は、いつも、神のわざと神の働きにとって、もっとも大きな妨げである。だからこそ、「アズサ」ミッションの初めのころには、あれほど深く自分に死ぬことがあったのだ。とくに働き人や説教者たちがそうだった。神は、ご自分の働き人たちを、その使命のために備えておられたのである。

　祈りに答えて、主は、私たち一家のために東部への道を開いてくださった。私は、オハイオ州コノートからの小切手を、現金に換えずにポケットに入れていた。妻は、ニューヨーク州にいる身内に会いたがっていた。そして私は、いつカリフォルニアに戻れるようになるか、わからなかった。私は、神のみこころのすべてに自由に従えるようにしておきたかった。そのとき私は初めて思い出した。

ピッツバーグを出て西部へ向かったとき、私は、五年後には戻って来ると預言していたのだ。神が示してくださったに違いない。今ちょうど五年たっていたからである。

刑務所伝道者のマザー・ウィートンと、エイミル・アレン兄弟が、私たちと一緒に旅をした。途中までは無料の乗車券をもらった。ソルトレーク・シティではモルモン教の神殿を見て、刑務所で集会を開き、それからデンバーへ向かった。二人の子供、ルースとジョンがひどい病気になったが、神が救い出してくださった。デンバーでは、ある夜、ホーリネスの本部で説教した。カリフォルニアに来る前、私たちはここの会員で、ここで働いていたのだ。ペンテコステ会館では、フィンク兄弟のために説教し、力強い時を過ごした。何人かの魂が救われ、その中には一家族全員もいた。聖徒たちはすばらしく養われた。何人かが「バプテスマ」を受けた。集会は全部で三回だった。ここでは、神が二人の小さな女の子をすばらしく用いられた。二人とも「バプテスマ」を受けていて、本当の祈りの務めを持っていた。二人が救われていない人々に懇願すると、会場じゅうが泣き崩れた。二人が少しも自分を意識していないことは、私たちみなにとって力強い教訓だった。それは、神の異なったわざ、不思議な務めだった。救われていない人々に、すさまじい罪の自覚が臨んだ。「幼な子のようにならなければ」ということを、私たちは新たに学んだ。どうやら、魂が救われるためには、今の伝道の方法がどうしても必要だというわけではないようだ。その方面では、諸教会のほうが私たちよりうまくやれるだろう。私たちは、たとえそれが「異なったわざ」であっても、私たちに与えられた独特の賜物から離れないほうがよい。そのほうが、うまくいくだろう。神にお任せしよう。そのころは、私たちのあいだにある神の力と臨在によって、罪人が座ったまま回心することがよくあった。罪人を祭壇へ引きずって行き、彼らと格闘して救いに導く必要はなかった。彼らは、神と戦うために祭壇に来たのではなかった。デンバーでも、「アズサ」と同じように、「御霊による歌」が多くあった。この独特の「賜物」は、働きが起こる所ではどこでも、それに伴っているようだった。

シカゴでは、ビューラ救護ホームに滞在した。私はそのホームで説教し、ノース・アベニューのダラム兄弟のミッションでも、このうえなく尊い油注ぎのもとで説教した。小さな本『ウェールズの大リバイバル』の著者、S・B・ショーのミッションでも、三回説教した。私たちはついに、4月30日、吹雪の中をオハイオ州コノートに着いた。神はロサンゼルスで、私がそこで5月1日に集会を始めることを示しておられた。彼らは、私たちを一か月早く呼び寄せようと急がせた。しかし私たちは、神の秩序を守った。コノートでは、初めから主の臨在が私たちと共にあった。そこはホーリネスのミッションだった。私たちがすることは、たいてい、神が働かれるのを見守ることぐらいしかなかった。御霊が集会を導かれた。実際、私たちはほとんどの時間、うつぶせになって祈っていた。コノートでは、うつぶせにならずにいることがほとんどできなかった。戦いは主の戦いだった。そこでは、ほかのだれにも、その戦いを戦うことはできなかっただろう。私たちは、きわめて頑強な抵抗に直面していた。主は、ロサンゼルスを出る前に、この状況について私に警告しておられた。私を招く手紙を書いた指導者は、私が恐れていたとおり、「ペンテコステ」が何を意味するのか、少しもわかっていなかった。彼は、盛大な時を望んでいた。ミッションの人数を大きく増やし、働きを数の上で大きくすることなどを望んでいたのだ。

まもなく私は、彼がまさに道をふさいでいることに気づいた。彼は、聖潔を告白しながら、自分の偉さにおそろしく敏感だった。神は、どんな人もミッションも高めはされない。むしろ、すべてを共にちりの中に低くされる。神おひとりがあがめられるためである。『心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている』。それを知っておられるのは、神だけである。「アズサ」から来たアイビー・キャンベル姉妹が、そこに私たちと一緒にいた。神は、しばらく前に、私たちのために道を切り開かせようと、彼女を先に遣わしておられた。彼女の家はオハイオにあった。ウェスレアン・メソジストの説教者ケネディ兄弟が、彼らのために説教していた。彼は、このうえなくへりくだった神の人だった。

主は、たいへん深く働かれた。あるときは、何人もが一晩じゅう力の下にあった。今日の説教者たちは、人々を引き留めておくために、9時きっかりに集会を閉じなければならない。しかし、そういうことはなかった。そのころ、私たちは神を求めていた。神よりも先に求めるものが、ほかに千もあるわけではなかった。そして神は、私たちを失望させられなかった。ある姉妹は、まる五時間、

「異言」で歌い、語った。魂が救われた。聖徒たちは、主の臨在によって、すばらしく養われ、強められた。何人もが「バプテスマ」を受け、ミッションは一人前の「ペンテコステの」ミッションになった。ある日曜日の夜には、会館は通りの真ん中まで人であふれた。ある朝、家に帰って来なかった人々を探しに、会館へ行った。何人かは夜通しそこにいたのだ。行ってみると、彼らは神のほかは何もかも忘れていた。その場を離れることができなかったのである。まさにシェキナの栄光が、その場所に満ちていた。それは恐ろしいほどだったが、栄光に満ちていた。

大きな戦いは、私を呼び寄せた指導者とのものになった。集会がいくらも進まないうちに、彼がまさに道に割り込んでふさいでいることがわかった。ある姉妹は、彼のための魂の産みの苦しみで、死にそうになった。彼は肉的で、高ぶり、うぬぼれていて、集会がそれ以上深まるのを許さなかった。私たちは、それ以上進めなかった。彼は、ほかの私たちと一緒に自分を低くする気など、少しもないようだった。しかし、彼は降りて来なければならなかった。神は私に、彼を取り扱わなければならないと示された。従うか、やめるか、どちらかだった。そのまま進んでも、むだだった。私たちは彼の食卓で食べ、彼の寝台で寝ていた。それをしなければならないのは、つらいことだった。しかし、私は彼に向かって行った。私たちは角を突き合わせ、彼は激しく私に抵抗した。しかし、神が彼を引き降ろされた。御霊が彼に罪を示されると、彼はくずおれた。倒れたとき、建物が揺れるほどだった。彼は五時間、長いすの下に横たわり、神が見ておられるとおりに自分を見はじめた。御霊は彼をすっかりばらばらにし、その高ぶりや野心などを示された。ついに彼は、一言も言わずに起き上がって、家に帰った。そして自分の部屋に鍵をかけて閉じこもり、神が彼に会ってくださるまで、そこにいた。その会見から出て来た彼は、小羊のように柔和になっていて、自分の至らなさを告白した。妨げが取りのけられ、集会は力強く進んでいった。彼自身も、私たちが去ってしばらくしてから、「バプテスマ」を受けた。

私が発つ前に、ケネディ兄弟が新しい服を一着買ってくれた。こうして主は、私の忠実さに報いてくださった。しかも主は、その指導者に頼らずにそうしてくださったのだ。神に従えば、それだけのかいがある。クリーブランドでは、『クリスチャン・ハーベスター』の編集者トマス・K・ドーティ兄弟を訪ねた。ここでも、キリスト者宣教同盟で、クレーマー兄弟のために、豊かな油注ぎのもとで説教した。まる二時間語った。私はここで、東部に来るためにとコノートから送られた小切手を、現金に換えた。集会は成功し、みなが満足していた。そのうえ、彼らは献金もくれた。

次の集会は、オハイオ州ヤングズタウンだった。ここでは、キリスト者宣教同盟のために説教した。ある夜などは、夜が明けるまで会館を離れられなかった。その場を去ることができなかったのだ。神がとても近くにおられたので、だれも疲れも眠気も感じなかった。私はここで、本当の魂の産みの苦しみを多く味わった。集会によっては、聞こえるのは押し殺したうめきぐらいだった。どの集会も、祈りがたいへん多いのが特色だった。私たちは一つ一つの動きについて御霊を待ち望み、御霊が完全に治められた。同じ集会は二つとなかった。ある集会では、天の静けさそのものが、四時間ほど私たちを占領した。物音一つ、ほとんど立たなかった。その場所は、祈りに深くひたされ、神聖なものとなっていた。それで私たちは、戸をそっと閉め、同じようにそっと歩いた。互いにほとんど口をきかず、話すとしてもささやくだけだった。別の夜には、私たちは何時間も礼拝と賛美の中にとどめられた。まるで神の御顔そのものをのぞき込んでいるようだった。これらの集会には騒々しさはなく、終始、静まった霊があった。

また別の夜には、私たちはみな神の愛によって砕かれた。まる一時間、泣くことしかできなかった。どの集会も違っていて、どれも前より深くなっていくようだった。二晩か三晩は、夜通し祈って過ごした。ある夜には、御霊が、電気を帯びた雨のように私たちの上に降り注いだ。何人もが床に倒れ、そのあいだ神が主人となられた。これほどの御霊による歌、「天の合唱」を、私はめったに聞いたことがない。何人もが「バプテスマ」を受けて、「異言」を語った。しかし、ここでも私たちの戦いは指導者とのものだった。彼は激しく私に反対した。彼は神との関係が正しくなく、明け渡そうとしなかった。彼の妻は、そのころ力の下にあって、「バプテスマ」を求めていた。しかし彼は「肉」によってふるまい続け、ついに御霊はひどく悲しまれた。悪魔はしばしば説教者の上着の中に入り込む。集会の初めのころ、サタンは執拗に彼を用いた。しかし神は、彼がいたにも

かかわらず、勝利を収められた。彼は明け渡さなかった。悪魔がある説教者たちをつかんでいる力には、驚くほかない。

ある夜、オハイオ州アクロンで、マッキニー兄弟のために説教し、大いに祝福された。それから、ペンシルベニア州ニューキャッスルで、再びキリスト者宣教同盟と共に、五回の集会を持った。ここでも神は大いに祝福してくださった。ここから、ペンテコステの野営集会のために、オハイオ州アライアンスへ行った。6月13日のことだった。すばらしい野営集会だった。北東部では、この種のものとして最初のものだった。私は説教者たちの集会を導いた。最初の日曜日の朝、私にはメッセージが与えられていた。しかし指導者は、かわりに午後に話してほしいと私に頼んだ。私は何も言わず、ただ祈った。数分すると、彼は戻って来て、午前に説教するようにと言った。そのころは、人は神なしには、たいして先へ進めなかったのだ。私は主の大きな助けを受けて、「聖霊の力による世界伝道におけるイエス・キリスト」という題で説教した。すべてはイエスを中心にしている。力も、賜物も、聖霊も、実際どんなものも、イエスより先に置いてはならない。主イエス・キリストよりも聖霊をさえ高めるミッションは、どれも、誤りと狂信の岩に乗り上げることになる。

これは、国のその地方で働きが始まるにあたって、たいへん重要な野営集会だった。私たちは二週間とどまり、私は全部で十一回説教した。力強い時を過ごし、各地を代表する大勢の人々が集まった。四百人が会場で野営した。集会はしばしば夜通し続いた。宣教への熱意が高まった。食事は、自由献金によってまかなわれた。神は豊かに備えてくださり、尊い一致の霊が満ちていた。私たちは「一つの御霊」によって「一つのからだ」となるようにバプテスマを受けた「兄弟」だった。こうして、「みんなの者が一つとなるため」というイエスの祈りがかなえられたのだ。説教者たちのあいだの調和は、とりわけ恵まれていた。これほどの愛の霊が現れるのを、私たちはめったに見たことがない。すばらしい日々だった。そのころの私たちは、まことに進んで互いに尊敬し合っていた、と言うことができる。

オルガンも賛美歌集も使わなかった。御霊が集会を導かれ、そういうものの入る余地はないようだった。何百人もが、はっきりと神に出会った。大勢が救われ、御霊のバプテスマを受け、いやされた。多くの人が外国への召しを受けた。本当の信仰による、聖書にかなったしかたで、神の真実を確かめるためである。本当の使徒的なしかたで、すみやかに世界に福音を伝えること、それが掲げられた目標だった。今の世代には、どうしても今の世代が福音を届けなければならない。さもなければ、その世代は失われてしまう。祭壇の前は、昼も夜も、求める人がいなくなることはめったになかった。ウェールズとインドの両方のリバイバルにいた人々が、これはどれよりも深い働きだと言った。私たちは、罪のほかの何とも戦わず、神のほかは何も恐れないと決心した。私は、さらに東へ進むのに必要な、ある額のお金を主に求めた。委員会は、私が少しもほのめかさないのに、祈ったとおりの額をくれた。神がしてくださったのだ。主をほめたたえよ！

第五章　カリフォルニアからメインへ（その二）

私は妻と子供たちを、ニューヨーク州ピークスキルの近くにある義父の家へ連れて行った。義父はメソジストの牧師だった。六マイル奥の山の中の、美しく人目につかない静かな所に住んでいた。私が大会などに出かけているあいだ、家族はここにとどまった。最初の日曜日には、義父のために三回説教した。しかし、義父も彼の教会も、霊的に死んでいた。役員の中には、たばこも吸えば酒も飲む者がいた。私には、彼らのためにほとんど何もできなかった。彼らは、私が持っているものを望んでいなかった。ニューヨーク市では、スティーブン・メリットを訪ね、キリスト者宣教同盟の本部の礼拝に出た。黒人のペンテコステの集会でも説教した。ニューヨーク州ナイアックのキリスト者宣教同盟の大会では、二回の集会で語り、大いに祝福された。だれかが、そこでの私の費用を払ってくれた。私は招かれていなかったのである。家族と数日休んだあと、フィラデルフィアへ行った。かつて会員だったグレース・バプテスト教会を訪ね、そこからピッツバーグへ足を延ばした。ここでは、キリスト者宣教同盟で、ホワイトサイズ兄弟のために午後と夜に説教した。その夜のうちにシンシナティ行きの汽車に乗るはずだった。しかし、時間までにメッセージをやめることができなかった。人々があまりに飢え渇いていたのだ。私は二時間説教した。彼らは15ドルをくれ、私は翌朝出発した。このお金で、ピークスキルからシンシナティまでの運賃がまかなえた。主が共にいてくださったのだ。

私はナップ兄弟の聖書学校に立ち寄り、翌朝、祈りの大会に出るためにケンタッキー州ウィルモアへ向かった。大会のあいだに、私はここで七回説教した。この野営集会の目的は、兄弟たちのあいだに一致を育て、とりなし手を起こすことだった。S・B・ショーとトマス・K・ドーティがそこにいた。私を招いたのはショー師だった。しかし、野営集会はかなり分裂していた。聖徒たちの多くは、もっと神を求めて飢え渇いていた。ところが、そこの状況は、そのことをひどく妨げるものだった。野営集会を取りしきっていたピケット兄弟は、入場料を取った。これは金目当てだった。そこに現れていた聖潔は、どちらかというと、とげとげしいものだと私は感じた。それは「ペンテコステの」野営集会ではなかった。

私はここでひどい熱を出した。しかし、インドから来た宣教師が祈ってくれ、神が熱を下げてくださった。食べ物も水も悪かった。大会は、私に20ドルを出すことを決めた。これで、家族の待つ家までの運賃がまかなえた。私は千八百マイルを旅していた。それまで家族から百マイル以上離れたことがなかったので、長い旅に思えた。南へ向かう途中、私たちの汽車が一人の男をひいて死なせた。人のいのちとは、なんと定めないものか！　ドーティ兄弟は、この野営集会について『クリスチャン・ハーベスター』にこう書いた。「もっと高尚な説教はあった。しかし、当面の働きのために祈る力としては、おそらくバートルマン兄弟とショー兄弟のほうが大きかった」。それで私は神に感謝し、さらに勇気を得た。

次に私は、ボストンで汽車を乗り換えて、メイン州オールド・オーチャードへ行った。オールド・オーチャードでは、キリスト者宣教同盟の大会が開かれていた。「ペンテコステ」に飢え渇いた何人かの人々が、森の中で集会を用意し、私に語ってほしいと招いてくれた。主は、このうえなくすばらしいしかたで、私たちを訪れてくださった。悪魔は、私がここに来ないようにしようとしていた。この旅には少なくとも20ドルかかるうえに、私は招かれていなかった。しかし私は、神が私を遣わされたことを知っていた。ある夕方、私は木立の中で、スコットランドから来ていた説教者と一緒に祈っていた。彼は突然私の腕を取り、壇の上へ連れて行って、自分の隣に座らせた。その夜は彼が説教することになっていた。彼は、私に自分のために祈ってほしかったのだ。大胆なことだったが、彼は恐れを知らない人だった。彼が語っているあいだ、私はひざまずいて祈った。そして神は彼を大いに助けてくださった。その夜より前に彼に会ったことはなく、名前さえ忘れてしまった。指導者たちは、私が壇の上にいるのを見てたいへん驚

いた。しかし、それは私がしたことではなかった。とはいえ、私が二度と壇に上がろうとすることはなかった。

二十人ほどの飢え渇いた人々が、村の牧師から鍵を借りて、夜通しの祈りのために村の教会へ移った。私たちは、野営地にとどまることを許されなかったのだ。その夜、ナイアックのキリスト者宣教同盟の学校の教師の一人が「バプテスマ」を受け、信仰から離れていた一人の人が立ち返った。次の日の午後と夜には、教会でこの小さな群れに語った。野営地では、この種の集会はいっさい許されなかったからである。すると、野営集会の委員会は牧師に迫って、私たちに教会を閉ざさせた。彼らは、自分たちの人々に「バプテスマ」を受けさせたくなかったのだ。私たちは再び森へ行った。そこで私は、翌日の朝と夜に、かなりの数の会衆に語った。私は、これらの集会を用意することには何もかかわっていなかった。「ペンテコステ」に飢え渇いた人々があまりに多く、彼らはどうしても私に説教してほしいと言ってきかなかった。私には、とても彼らを断ることはできなかった。その日、私は全部で四時間ほど語った。委員会には、野営地の外の森を取りしまる権限はなかった。イエスなら、これらの飢え渇いた魂に、いのちのパンを拒まれることはなかっただろう。私はそう確信している。森の集会には、百人を下らない人々がいた。しかも、みな神に飢え渇いていた。確かに神は、そのために私をそこへ遣わされたのだ。

彼らは30ドルほどのお金を、私の手に押しつけるようにしてくれた。こうして、悪魔がうそをついていたことがわかった。私は、すべての費用を払っても余りが出たのである。以前医者をしていたある姉妹が、ある日私を追いかけて来て、12ドルを受け取ってほしいと頼んだ。それは償いのお金で、彼女の良心をさいなんでいたのだ。彼女は、自分が損をさせた相手を見つけることができなかった。それで、そのお金を主にささげたのである。それは本当の神のわざだった。主が私たちの小さな集会をあまりに力強く祝福してくださったので、野営地全体がざわめき立った。これ以上、表立ったもめごとになるよりはと、聖徒たちは集会をやめるのがいちばんよいと考えた。そして私は、委員会がこの件でさらにはっきりした手を打つ前に、そっと野営地を去った。こうして私たちは、それ以上の不愉快な思いや争いを避けた。飢え渇いた人々は、私のあとをつけ回し、私に群がるほどだった。委員会は、私が人々に及ぼす影響を恐れるようになったのだ。

私は、マサチューセッツ州イースト・ノースフィールドのムーディの大会に数日立ち寄った。何年も前、若い学生だったころに出たことのある大会である。ここでよく休み、集会にもいくらか加わった。家族のもとへ戻ると、ペンシルベニア州ミッチェナーの両親の家へ家族を移した。私は何年も家に帰っていなかった。ここで私は、しばらく両親と一緒に過ごし、休みながらみことばを学んだ。両親は私たちに会って、とても喜んだ。二人は、まだ孫たちを見たことがなかったのだ。少年のころ、私はこの近くの農場で育った。近くのカーバーズビルでは、長老教会で説教した。兄のウィルは、ここで初めて私の説教を聞いた。

もう9月になっていた。私は南へ下って、サウスカロライナ州コロンビアへ行き、そこのオリバー福音ミッションで何度か説教した。このミッションは、J・M・パイク兄弟が編集者をしている『ウェイ・オブ・フェイス』の事務所と結びついていた。私は、この新聞に多くの記事を書いていたのだ。集会では大いに祝福され、それまで会ったことのなかったパイク兄弟とも、よい時を過ごした。ここにいるあいだに、記事を二つ書いた。ニューヨーク市のある姉妹が10ドルを送ってくれ、パイク兄弟は15ドルをくれ、また別の人が3ドルをくれた。こうして主は、再び私の費用を備えてくださった。私はノースカロライナ州ダンに立ち寄った。キャッシュウェル兄弟の家族が住んでいる町である。そこの小さなペンテコステの教会で、五回説教した。キャッシュウェル兄弟は、これより前に「アズサ」ミッションで「バプテスマ」を受け、南部に火を広めていた。このときは、家を留守にしていた。私が訪ねたあと、パイク兄弟は『ウェイ・オブ・フェイス』にこう書いた。「先週、バートルマン兄弟が思いがけず私たちを訪ねて来た。彼がいてくれたことは、私たちにも私たちの家にも祝福だった。彼の集会は、ペンテコステの祝福を心から慕い求める人々にとって、恵みとなった。彼と交わる人はだれでも、彼がまったく神に明け渡していることと、その内に御霊が満ちていることを疑えないだろう。彼は神のみこころのうちに生き、動き、存在している。神の最高最善のものを求めるすべての人に、私たちは彼を推薦する」（『ウェイ・オブ・フェイス』）。私はそれに値しないことを知っているので、こ

れほどの高い推薦の言葉を活字にして載せることには、ためらいがある。それでも載せるのは、これをいつも目の前に置き、そこに届こうと努める目標とするためである。

そのころ、主はすばらしく私たちと共にいてくださった。私はワシントンD.C.で六回説教し、ペンシルベニア州ミッチェナーの家族のもとへ、無事にまた帰り着いた。ニューヨーク市の四十二番街ミッション（「グラッド・タイディングズ会館」）では、力強い時を過ごした。私は、カリフォルニアでの長くたえまない働きのために、頭がひどく疲れていた。しかし、それが今、抜けはじめた。私に必要だったのは、気分を変えることだった。結局のところ、それがいちばんの休みなのである。私は再びニューヨーク州ナイアックを訪ね、キリスト者宣教同盟で三回説教した。それから家族を、フィラデルフィアの兄ウィルの家へ移した。ニューヨーク市に戻ると、タバナクルでのキリスト者宣教同盟の大会に出た。聖徒たちが、同盟の宿舎アライアンス・ハウスでの私の宿代を払ってくれた。私が着く直前まで、その宿舎には空いた部屋が一つもなかった。しかし、私が着いたとたんに、主が一つ空けてくださり、私はすぐにそこへ入ることができた。部屋はとても足りなかったのである。そのうえ、ある兄弟が10ドルをくれた。そこに着いたとき、主は私にこう語っておられた。『わたしたちの間に争いがないようにしましょう。わたしたちは身内の者です』。

ここにいるあいだ、ある夜、「グラッド・タイディングズ会館」で三時間語った。それでも人々は、私に続けてほしがった。彼らは、それほど「ペンテコステの」メッセージに飢え渇いていたのだ。私は午後11時40分にやめた。同盟の大会の集会が終わると、そこから働き人たちが次々にやって来た。しかし、集会の初めに、悪魔は外のやじ馬たちを使って、まさに地をひっくり返すほど暴れた。どうやら悪魔は、これから起ころうとしていることを、いくらか感じ取っていたようだ。次の夜、私は再び説教し、多くの人が力の下に倒れた。何人かは夜通しそこにいた。大会の夜の集会を受け持っていた伝道者も、タバナクルでの集会が終わったあと、自分でやって来た。

その次の夜、大会では夜通しの集会があった。一人の若い娘が力の下に置かれ、その霊が御座にまで引き上げられた。彼女は、言葉のない旋律を歌った。それはあまりに天的で、幕の内から聞こえてくるようだった。別の世界から来るように思われた。それに並ぶものを、私は前にも後にも聞いたことがない。その夜はA・B・シンプソン自身がそこにいて、その歌に深く心を打たれた。彼は「ペンテコステの」働きに強く反対していた。神は確かに、彼へのあかしとしてその歌を与えられたのだ。何人もが、力の下に打ち倒された。明け方近くには、主の臨在がすばらしかった。ちょうど夜が明けたころ、私は会館を出ようとして、「バプテスマ」に飢え渇いていたある姉妹と握手した。すると御霊が彼女の上に臨み、私は彼女の手を放せなくなった。やがて彼女は祭壇の前に倒れ、「バプテスマ」を受けて「異言」を語った。私は再び会館を出ようとして、飢え渇いていた別の姉妹と握手した。御霊が彼女の上に下り、彼女はその場で立ったまま「バプテスマ」を受けた。私が手を放す前に、彼女は「異言」を語っていた。すばらしい夜だった。

いよいよ、再びカリフォルニアへ向けて出発する時が来た。1907年10月16日、私たちはフィラデルフィアを発ち、ピッツバーグに立ち寄った。そこで再び、キリスト者宣教同盟で、ホワイトサイズ兄弟のために二回説教した。神は力強く私たちに臨んでくださった。何人もが「バプテスマ」を受けた。最後の人が受けたのは、午前1時だった。とくに頼まれて、汽車の乗り継ぎのあいだに、ペンシルベニア州ビーバー・フォールズで途中下車した。そこのキリスト者宣教同盟の大会で、二回説教した。神は、みことばを大いに重んじてくださった。オハイオ州アライアンスでは三回説教した。主は力強く私たちと共にいてくださった。それから私たちはシカゴへ進み、そこで再びビューラ救護ホームとダラム兄弟のミッションで説教した。セントルイスでは、しばらくシーリー・キニー兄弟の家に泊まった。私はここで、全部で十八回説教した。どこで出会った群れにも劣らず、飢え渇いて、へりくだり、よく受け入れてくれる人々だった。神はすばらしく私たちと共にいてくださった。またマザー・モイーズの救護ホームで二回、キリスト者宣教同盟の会館で四回語り、大いに祝福された。

カンザス州トピーカでは、フォスター兄弟のために五回説教した。ここでの集会の一つは、夜が明けるまで終わらなかった。神がすぐ近くにおられた。デンバーでは七回説教した。主は、ここでも人々のあいだで力強く働かれた。しか

し、指導者は誠実ではなかった。彼のために、私たちの幼い息子ジョンはもう少しで死ぬところだった。彼は、聖徒たちが私のためにささげた献金を渡さずにおいて、それで自分の靴を一足買おうとした。彼がすでに履いていた靴は、私の靴よりも上等だった。コロラド・スプリングズまでの切符を買いに行くと、お金が足りなかった。私は家へ引き返して、彼の秘書から運賃の残りをもらわなければならなかった。彼は私のお金を持ったまま、町を出てしまっていたのだ。私たちは汽車に乗り遅れ、夜になってからコロラド・スプリングズに放り出された。家族のための用意は何もされていなかった。向こうでは、私が一人で来るものと思っていたのだ。最初の夜、私たちは急いで、火の気のない家へ連れて行かれた。幼いジョンは肺のうっ血を起こし、死にかけた。凍えるような寒さだった。そして、これはすべて、デンバーの指導者の罪のためだった。彼は、そこでの私たちの集会で、御霊にひどく逆らっていたのだ。神はのちに、彼に私の献金を送らせられた。何年かのちに、彼は「ペンテコステ」を偽っていたと告白した。同じことをしてきた指導者があまりに多いのではないかと、私は恐れている。

コロラド・スプリングズでは六回説教した。御霊が油のように流れた。これほどの自由を、私はどこでもめったに味わったことがない。ああ、きよさと一致が支配する所には、なんと大きな可能性があることか！　ここではブレルズフォード兄弟が牧師だった。彼はのちに宣教師としてエジプトへ行った。次に立ち寄ったのは、コロラド州トリニダードだった。ここでは、たいへん飢え渇いた聖徒たちの群れに、十回説教した。彼らは大いに力づけられ、祝福された。しかし、標高が高いことは、私たちにはこたえた。それに、そこに着く直前に、悪魔が私たちの汽車を脱線させようとしたのだ。私たちはここから、サンタフェ鉄道でロサンゼルスへ向かった。ある夜、アリゾナの急な下り坂で、車輪が滑りはじめた。私は祈りでブレーキをかけた。主が私たちを無事に通らせてくださった。しかし、二晩のあいだ、私はほとんど眠れなかった。途中で、事故を起こした汽車をいくつも見た。カリフォルニアに着くまでに、私たちの汽車も二度、あやうく線路から飛び出しそうになった。標高が高いことは、私の神経にも大きな負担だった。夏のあいだの激しい働きで、私はとても疲れていた。再びカリフォルニアに戻れて、私たちはうれしかった。

次にどこに住むことになるかわからないまま、私たちはトランクをロサンゼルスまで預けていた。しかし、パサデナに着く前に、主は、そこで降りるようにと私に示された。私は、その汽車で帰るとベーマー兄弟に書き送ってはいた。しかし、だれかが迎えに来てくれるとは思っていなかった。行く当てもないままパサデナに着くと、駅でベーマー兄弟が私たちを待っていた。彼は、アリー・ミッションに付属して開いたばかりの、メアリー通りのミッションの家へ私たちを連れて行った。こうして神は、私たちの知らないうちに、すべてを整えておいてくださった。私たちは本当に疲れ果てた旅人で、休みを必要としていた。着いたのは1907年12月5日だった。

落ち着くか落ち着かないうちに、私はひどい流感に倒れた。ルースとジョンも二人とも病気になった。悪魔は私たちが帰るのを妨げようとしたが、今度は私たちを殺そうと決めたようだった。三日のあいだ、肩と腕に針で刺すような痛みが走り、気が狂いそうになるほどだった。聖徒たちが祈ってくれ、私は救い出された。働きはかなり後退していた。聖徒たちはひどく分裂していた。御霊も縛られていた。外からの反対は、ずっと根強く、かたくなになっていた。ロサンゼルスでも同じありさまだった。

アリー・ミッションでは、自分は「バプテスマ」を受けていない指導者の圧制のもとで、聖徒たちがひどく苦しんでいた。今度は私が彼らを助けて、その指導者がミッションと家から出て行くように祈った。そして聖徒たちは救い出された。彼は、働きに無理やり割り込んでいたのだ。彼はまさに、イソップの「飼い葉おけの犬」だった。コロラド通りに、もっと大きなミッションが開かれ、私はそこでもいくらか奉仕した。力がずいぶん散ってしまっていることがわかった。中身のない現れが多かった。その多くは、ただの泡にすぎなかった。このことは、私にとって大きな重荷となった。祈りの霊は、おおむね失われていた。その結果、多くの肉と狂信が忍び込んでいた。祈りは、高ぶる肉を焼き尽くす。肉は十字架につけられ、焼き切られなければならない。

ある日、アレン兄弟が町に来ているという強い思いが与えられた。私たちは、彼を東部に残して来ていた。はたして、ちょうどその夜、彼がひょっこり私たちを訪ねて来た。戻って来たばかりだったのだ。主が私に示してくださったのであ

る。私たちは今度は、ベーマー兄弟の隣の、スティーブンソン・アベニュー194番地の小さな家に移った。とりなしの務めが、私に重くのしかかっていた。私は、ハーモン、八番街とメイプル通り、そしてアズサ通りで何度か説教した。ある夜、アズサ・ミッションで、祈りの霊が激しい突風のように私に臨んだ。力が建物じゅうを走った。そこに忍び込んでいた死んだような状態のことで、私は重荷を負っていたのだ。留守をあずかる指導者たちはおびえ、どうしてよいかわからなかった。彼らは電話をかけて助けを求めた。彼らは、初めのころ私たちと一緒にいた人々ではなかった。シーモア兄弟は町を離れていた。

私は二階の廊下にいた。ほかの人々も、私と一緒に祈りに加わった。私たちが階下へ降りて行くと、集会の中に火が燃え上がった。しかし、取りしきっていた指導者たちは、霊的ではなかった。「ヨセフのことを知らない」別の支配者たちが起こっていたのだ。彼らには、それが理解できなかった。神は戻って来ようとしておられた。しかし彼らは、だれかにミッションを奪われはしないかと恐れているようだった。御霊は働くことがおできにならなかった。そのうえ、彼らは今では急いで、かたく組織を作り上げていた。そして私は、その組織に加わっていなかった。今日も、おおむねそうである。点線の上に署名しなさい。さもなければ、あなたを信用できない。われわれは、われわれの証書を持つ者とだけ手を結ぶ、というのだ。「ペンテコステ」は、そういうものを私たちの中から取り去った。どうしてそこへ戻るのか。今日、ペンテコステの働きのさまざまな分派に属している人が、みな分派の霊を持っているわけではない。しかし神は、私たちを「一つのからだ」という理想に、しっかりとどめておこうとしておられる。

主は、私の隠れ場を示してくださった。私は主に従おうと決心した。そこが力の場所である。神のほかは何も恐れず、神に従え。私は、八番街とメイプル通りで、アズサで、そしてパサデナのアリー・ミッションで、何度も語った。もっと熱心になり、御霊によって歩むようにと勧めたのだ。私は、この働きを生み出すために、祈りの中で多くの苦しみを味わってきた。だから、彼らをいさめる権利があると感じていた。初めから、私たちの大きな戦いは、神の御霊によると称する、肉的な宗教上の狂信者たちとの戦いだった。

第六章　二度目の東部伝道（その一）

このころ、ベーマー兄弟とアレン兄弟が「バプテスマ」を受けた。1908年3月11日、ソーテル兄弟から手紙が来た。オレゴン州ポートランドのキリスト者宣教同盟の働きの指導者である。北へ来て、自分たちのために集会を開いてほしいというのだった。神は、私たちが再び呼び出されることを示しておられた。私はそれが神の召しだとわかった。私たちは再び北へ、東へ行くことになっていたのだ。ベーマー兄弟は、このとき、私たちと一緒に働きに出ることを決めた。私たちが西海岸に戻って来たのは、おおむね彼を連れ出すためだったと私は感じた。私は冬じゅう聖徒たちに、春になったら神のために出て行くようにと勧めていた。私たちが再び出発すると、十二人ほどが、あちこちへ私たちに続いて出て行った。私はまた、全世界への召しが重く自分にのしかかるのを感じはじめた。主のためにまだ海を渡らなければならないと、主が示しておられるようだった。そしてこのことは、のちに実現した。隠者ピエールのように、リバイバルを求める叫びで全キリスト教界を揺り動かしたい、と感じることもあった。

3月25日、私たちはオレゴン州ポートランドへ向けて北へ出発した。無事にストックトンに着いた。ロサンゼルスを離れるのはつらかった。働きがかたくなになっていくのが見え、私はそのことで大きな重荷を負っていた。ああ、私たちが「おとずれの時」を知り、祝福を散らさずに穀物をたくわえることができたなら。それからの年月が明らかにしたように、私たちが堅く立つためには、そのすべてが必要になるのだった。私たちには豊作もあったが、「七年のききん」もあったのである。ストックトンでは六回語った。そこでは「肉」がかなり強かった。しかし、神が勝利を与えてくださった。いつもと同じ話だった。彼らは、神が自分たちの弱さではなく、強さにバプテスマを授けてくださることを期待していたのだ。私はここで、寒さと神経痛のために、からだがひどく苦しんだ。

幼いジョンが重い病気になった。次に私たちは、オークランドに近いビューラにあるキャリー・J・モンゴメリーのホームに、数日立ち寄った。ここにいるあいだに、私はサンフランシスコを訪ね、被災した町を見て回った。地震のあと、そこへ行ったことはなかった。二年のあいだ、ほとんど夜も昼も復旧の作業が続いていた。それなのに、町全体は、まだ実際のところ廃墟のままだった。近代的なビルの形をした塔がいくつか建ってはいたが、町とは名ばかりだった。がれきがまだあまりに多く、建て直すための場所もろくに空けられなかった。多くの通りは、今もなお、ねじれたり、沈んだり、盛り上がったりしていて、歩いて進むのも難しかった。かつての誇り高い都ではなく、大部分が荒れ果てた、まばらな田舎町のように見えた。安っぽい木造の建物が多く建っていた。しかし、誇らしげだった邸宅は、倒れたままの姿で、すっかり廃墟となっていた。

罪は、もしそういうことがありうるなら、前よりもいっそうおおっぴらにはびこっているようだった。人々は前よりも向こう見ずで、すさんでいた。何千人ものいのちが失われた廃墟のただ中で、悪の巣窟がさかんに営まれていた。場所が空けられ、建物が急ごしらえに建てられ、死との踊りが続いていた。真っ先に再建されたのは、いかがわしい酒場だった。人々は、おおっぴらに神に逆らっていた。実際、神に対して誇る声が、至る所で聞こえた。罪は、なんと人を愚か者にすることか。もっとも悪名高い酒場の一つでは、入口に、電灯で照らされたどくろと交差した骨が飾られていた。私は、そこから逃げ出したいと感じた。神の怒りが、その場所の上に垂れこめているようだった。

私たちはここからポートランドへ船で行ったが、海が荒れた。私たちの大部分が船酔いした。しかし、神が無事に通らせてくださった。アストリアに寄ったところで、少し落ち着いた。朝、ポートランドに着いた。妻と子供たちは汽車でワシントン州オーバーンへ行った。前にロサンゼルスで知り合った友人たちを訪ねるためである。私はポートランドのキリスト者宣教同盟で、全部で二十四回ほど説教した。ベーマー兄弟が一緒だった。神は尊く祝福してくださったが、私たちは完全には突き抜けられなかった。反対と保守の気風が強すぎたのである。それ

でも全体としては、多くのよいことがなしとげられた。とくに聖徒たちは、大いに益を受け、祝福された。ソーテル兄弟は、私にとても親切にしてくれた。のちに彼は同盟を離れ、ほかの職業についた。同盟の中では神と共に進んで行けないことに落胆し、働きをすっかりやめてしまったのだ。まことに痛ましいことだった。彼はよい人だった。ポートランドにいるあいだに、彼らは私に63ドルをくれた。

私はワシントン州オーバーンへ向かった。妻と子供たちは元気だった。二日後、タコマで集会を始めた。ここでは、キリスト者宣教同盟で十回説教した。神はすばらしく祝福してくださり、何人もが「バプテスマ」を受けた。この場所には、とても麗しい霊があった。大きな愛と一致が満ちていた。主はこれを喜ばれた。彼らは私に20ドルをくれた。シアトルでは、ゴーリー兄弟のミッションを訪ね、そこで一回説教した。ベーマーと私は、船でちょっと足を延ばして、バンクーバー島のブリティッシュ・コロンビア州ビクトリアへ行った。シアトルでは、バーンズ兄弟のミッションでも語った。オーバーンから家族を連れて、私たちはグレート・ノーザン鉄道でシアトルからスポーケンへ向かった。

スポーケンにいるあいだ、神は、家具付きの家を私たちだけで住めるように与えてくださった。これ以上ないほど親切にもてなされた。私たちをそこへ呼んだのは、ハーバート・バーセル兄弟だった。ここには、すぐれた聖徒たちのしっかりした群れがあった。私は全部で三十五回説教し、非常に力強い集会がいくつもあった。私たちはそこに三週間いた。集会はある家で始まったが、私たちが去る前に、彼らはミッションを開いた。ときには、ひどい魂の産みの苦しみがあった。しばしば神が突き抜けて来られ、私は説教できなくなった。祭壇の前での祈りは力強かった。聖徒たちは教えに飢え渇いていた。スポーケンで、私は神経痛にひどく苦しんだ。ベーマー兄弟は、自分の兄弟を訪ねるために、ここで私たちと別れた。東部で再び合流するつもりだった。彼らは私たちの生活費のほかに、100ドルをくれた。次の行き先へ乗り継ぐには多くのお金が要ったので、それでも決して多すぎはしなかった。スポーケンの聖徒たちの私たちへの愛は、とても深かった。

私たちは、ノーザン・パシフィック鉄道でミネアポリスへ向かった。途中、モンタナ州のディア・ロッジとビュートを通り、イエローストーン公園の近くを過ぎた。ミネアポリスでは、小さなミッションで、尊い聖徒たちの群れに四回語った。そこにいるあいだに、ミネハハの滝も訪ねた。

私たちはここからシカゴへ向かった。ザイオン・シティを訪ね、それからダラム兄弟のミッションで説教した。次に立ち寄ったのは、ミシガン州グランド・ラピッズだった。ここで一回説教し、私たちはオハイオ州トレドへ進んだ。そこではペンテコステ・ミッションで十二回語った。とても尊い集会だった。神は、とくに、みことばについての光を私に与えてくださった。ここでは、彼らは私たちに24ドルをくれた。

次に立ち寄ったのは、前の年にも行ったオハイオ州アライアンスの野営集会だった。私はこの野営集会で九回説教した。前の年よりも激しい戦いだった。狂信と無秩序が多く生じていた。「肉」が集会を取りしきろうとした。私は神の大きな助けを受けて、「魂の産みの苦しみ」について語った。主が突き抜けはじめてくださった。幼いジョンがひきつけを起こし、悪魔が彼を殺そうとした。聖徒たちは、負うべきほどには重荷を負っていなかった。彼らがそこにいたのは、楽しい時を過ごし、祝福を受けるためという面が強すぎた。ある午後、私はたいへん強い油注ぎのもとで説教した。私たちが夕食の食卓について、食べようとしたちょうどそのとき、御霊が突然私たちの上に下った。私たちの食卓は、「いっさいの物を共有に」する食卓だった。主は、このありさまを喜んでおられることを示そうとされたようだった。火が、力強く野営地全体を走った。夕食は、一時間のあいだ手をつけられないままだった。多くの人が力の下に倒れた。それは大洪水だった。その夜、私は再び説教した。野営集会のあいだに二度、五十人近くが一度に力の下に打ち倒された。そこには宣教師が大勢いた。実際、宣教の熱意が高まっていた。新聞は、これまでになく口汚く、うそを書いた。しかし、そうして新聞は、ただで私たちの宣伝をしてくれたのである。多くの人が「バプテスマ」を受け、大勢が救われ、かなりの人がいやされた。何よりも人々の思いを占めていたのは、イエスがまもなく来られること、そしてそれに備えて世界に福音を伝えることだった。

私は、からだも心も、ひどく疲れてきていた。グランド・ラピッズでは、悪魔が、私たちの泊まっていた家の子供たちにまで取りついたようだった。私をねらってのことである。子供たちは、わけもなく真夜中まで家じゅうを駆け回った。ただ私を疲れ果てさせるためだった。私は、生きているのもやっとというほど疲れていた。トレドでは、私が説教していると、言い表す前に、敵が私の思いを心から奪い取った。この場所で、私はとくに御霊の光の下にあり、悪魔から新しい領土を奪い取っていたのだ。説教していて、まだ取り戻されたことのない新しい領土に入ったときは、いつもそれとわかるものである。そこでは必ず敵が見つかり、たいてい激しく襲いかかって来る。

次に私たちは、ピッツバーグのキリスト者宣教同盟のホワイトサイズ兄弟のもとに立ち寄った。ここでは四回説教し、『ウェイ・オブ・フェイス』に記事を五つ書いた。ブラドックでも三回説教した。聖徒たちは私に40ドルをくれた。私たちはフィラデルフィアへ進み、私は、そこから遠くないペンシルベニア州ミッチェナーの両親のもとに家族を預けた。ベーマー兄弟は、オハイオ州アライアンスで私たちに再び合流し、今また私と一緒にいた。私たちは一緒にニューヨーク州ロチェスターへ行き、エリム・ホームに泊まった。ここでは四回説教した。ある夜、私にはメッセージが与えられていた。しかし指導者は、私が午後にもう一時間以上説教していたので、語らせようとしなかった。彼女は、神がご自分の道を選ばれるのに任せることに慣れていなかったのだ。人間の理屈が彼女を支配し、彼女は集会を自分の手に握った。主は、その場で集会から手を引かれた。一人の変わり者が立ち上がり、長い熱弁でみなをうんざりさせた。そのあとで、彼らは私に立ってメッセージを語らせた。ある夜、床についたあとで、ベーマー兄弟と私に大きな重荷が臨んだ。一時間以上、私たちは御霊によって、すさまじく祈りに迫られた。それはだれかのためだと私たちは感じた。翌朝、ホームにいた一人の説教者が、夜のあいだに「バプテスマ」を受けたと話した。それで私たちはわかった。あの重荷は、彼のためだったのだ。

私たちは、途中でナイアガラの滝を訪ねながら、カナダのトロントへ向けて出発した。トロントでは、ある夜はソーダーズ兄弟のミッションで、別の夜はヘブデン兄弟のミッションで語った。どちらでも、神は私たちを大いに祝福してくださった。それから、カムデン通りのクレイグ兄弟のミッションへ行った。ここでは全部で十四回語った。キリスト者宣教同盟でサーモン牧師のためにも説教し、ビルダー姉妹の家でも説教した。ある夜、クレイグ兄弟のミッションで、御霊は集会のあいだじゅう、私たちを沈黙のうちにとどめられた。御霊が私に重く臨んでおられたのに、主は私に一言も語らせられなかった。私は、神が語ることを与えてくださらないかぎり、決して語らないようにしていた。クレイグ牧師には、これが理解できなかった。彼は「バプテスマ」を受けておらず、たいへん頭の切れる人だった。よい人だったが、御霊の働きかけには気づかないようだった。電流を受けて運ぶには、銅線が要るのである。

トロントの集会では、御霊がたいへん深く働かれた。しかし指導者は、御霊のことがわからなかったので、私にひどく手を焼いた。彼は、物事が古いやり方で行われることを期待していた。新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようにである。主は、私がトロントに着く前から、そこの状況を前もって感じ取らせておられた。このように御霊は、しばしば私を務めのために備えてくださった。主は、その場所のためのメッセージを与え、そこの特別な状況と必要に向き合えるように私を備えてくださった。トロントのために、主は私に静かな霊を置かれた。そこには「肉」が多すぎたのである。最初の二、三日は、町を見て回って、イギリスとアメリカの習慣の違いを見てとることさえ許されなかった。違いは多かったのだが。主は、私の霊が地上の周りのものに奪われることを望まれなかった。それは張りつめた務めだった。のちに、少し見て回ることを許された。「肉的な」人々は、最初のメッセージで、おおむね去って行った。彼らは、そういう空気の中では生きられなかったのだ。

次に私たちは、ペンシルベニア州ポッター・ブルックに立ち寄った。そこで三晩語ったが、干し草の刈り入れの時期で、農夫たちを集会に出て来させるのは難しかった。私たちは、近くのエルクランドへ進んだ。ここでは大きな戦いがあった。ある子供には、めそめそ泣く悪霊がついていた。一匹の犬は、何かに取りつかれたようにほえ続けた。これが集会をひどく乱した。私はエルクランドで四回語り、多くの人が助けと祝福を受けた。私たちは、本線の早朝の汽車に乗るため

に、貸し馬車で十二マイル走った。そして、その夜、家族が滞在していたミッチェナーに着いた。

次に私たちは、南のノースカロライナ州ファルコンの野営集会へ行った。ここでは八回説教した。ある夜、私は一晩じゅう、祈りの重荷を負った。眠れなかった。次の日、神は大いなる勝利をもって野営地に来てくださった。御霊がすばらしく助けてくださった。そこには大勢の人々がいた。祭壇の前ですばらしい祈りがいくつもあり、多くの魂がすばらしく助けられた。罪人が救われ、聖徒たちは聖霊に満たされた。何人かはいやされた。私はこの野営集会から40ドルを与えてくださるようにと主に求めていた。しかし主は、50ドルを求めよと言われた。この旅には、かなりのお金がかかった。野営集会の終わりに、カルブレス兄弟がちょうど50ドルを私に手渡してくれた。私は、お金のことはほのめかしもしなかった。ほかの人が6ドルを手渡してくれた。トロントにいたとき、神は私に示しておられた。この野営集会に招かれていたソーダーズ兄弟は、そこに来られないだろう、と。私は招かれてもいず、来ると思われてもいなかった。しかし神は、私が彼のかわりに行くことになると示しておられた。もちろん、私はこのことをだれにも話さなかった。はたして、ソーダーズはそこに来られなかった。神はご存じだったのだ。招かれもしないのにファルコンへ行くことについて、悪魔は最後の瞬間まで私を責めたてた。お金のかかる旅だったのである。私は主に約束していた。もしファルコンで40ドルを与えてくださるなら、そこの働きのために5ドルを置いて行きます、と。ところが主は、かわりに50ドルを与え、さらに約束を果たすための6ドルを余分に与えてくださった。主は決して私たちに借りをお作りにならない。

フッド博士は、ファルコンの野営集会から、『ウェイ・オブ・フェイス』に次のように書いた。（ここにはフッド博士の記事が引かれているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）私は、へりくだりと恥じる思いをもって、以上を記す。この愛する兄弟がこれほど寛大に私に認めてくれた高い域に、せめていくらかでも近づけるようにと、ただ祈るばかりである。

私自身も、このとき、ファルコンの野営集会の様子について、次のように手短に書いた。「トロントにいたとき、御霊は、愛するソーダーズ兄弟がファルコンに来られないだろうと、私に強く感じさせてくださった。そして、私が行くことを望んでおられると知らせてくださった。それで私は、ほかに招きを待たず、ただ御霊に従って行ったのである。このごろ私たちは、そのようにして召しを受けている。そして神は、働き人を自分たちで選ぶという責任から、私たちを解き放とうとしておられる。愛するカルブレス兄弟は、味方にも敵にも、きわだって親切で忍耐強かった。神はご自分の選ぶべき人を確かにご存じなのだ。愛にあふれる力ある心ほど、事をなしとげるものはない。愛するフロイド・テーラー兄弟を見ると、私は小さな茶色の鳥を思い出した。神はその鳥に美しい羽は与えられなかったが、そのかわりに、このうえなく美しい歌で報いられたのである。神は確かに、ご自分の栄光のために、苦しみの中にある見本をいくつか残しておかれるのだ。メピボセテもまた『両足ともに、なえていた』。しかし彼は『王の食卓で食事をし』、エルサレムに住んだ（テーラー兄弟は足が不自由だった）。神がこれらのへりくだった南部の兄弟たちを祝福してくださるように。彼らは私にとって、励ましであり、模範であった」（F・バートルマン、『ウェイ・オブ・フェイス』）。

『ウェイ・オブ・フェイス』の編集者パイク兄弟は、ファルコンの野営集会について、こう書いた。「正式に任じられた指導者の一人である」J・H・キング師は、並外れた油注ぎと力をもって説教した。またF・バートルマン師の説教と祈りの声は、昔の預言者の声のようであり、そのうえにペンテコステの力の付与が加わっていた。この天から油注がれた使者については、『ひざから説教壇へ』と文字どおり言うことができる。そして、外見は弱々しいが、彼が神から遣わされた人であることはすぐにわかり、彼は権威をもって語る。日曜日の夜のキング兄弟の説教と、月曜日の朝のバートルマン兄弟の説教は、油注ぎに満ちていた。これ以上の説教を、私たちはめったに聞いたことがない」（J・M・パイク）。このときのパイク兄弟の親切な言葉を、私は心からありがたく思った。私たちは、たいてい、へりくだっていられるのに十分なほど、その逆の言葉を受けている。しかし私は、兄弟たちが私を買いかぶっているのではないかと、本当に恐れた。私はただ、彼らをあまりがっかりさせることにならないようにと祈った。少なくとも彼らは、私が努めて目ざすべき目標を立ててくれたのである。

私たちはワシントンD.C.に戻り、そこで四回語って、大いに祝福された。マザー・ペリーの家に泊まった。これらの集会で、ある尊い姉妹が信仰に立ち返った。ボルティモアにも立ち寄り、そこでも四回説教した。ベーマー兄弟は、人前で語ることはめったになかった。彼にはすばらしい祈りの務めがあり、そのために私と一緒に旅をしていたのだ。彼の務めは隠れたものだった。しかし、私たちの集会での勝利に、それが大きくかかわっていたことを、私は確信している。説教はほとんど全部私がしたが、神はもしかすると、私よりも彼に多く報いてくださるかもしれない。

私は家族をミッチェナーから、ニューヨーク州ピークスキルの妻の身内のもとへ移した。それからニューヨーク市へ行き、四十二番街ミッションで、ロバート・ブラウン牧師のために二回語った。そこからベーマーと私は、ペンテコステの大会に出るためにボストンへ行った。激しい戦いだった。「肉」が、とにかくはびこっていた。私は朝、「肉」に反対するメッセージを語った。午後にも夜にも、同じ趣旨のメッセージが、それぞれ別の人によって語られた。二人とも、朝の私のメッセージの内容を知らなかった。それでも、指導者たちは耳を貸そうとしなかった。彼らは何年かのちに、このときは自分たちがまちがっていたと私に告白した。彼らは自分たちの道を行き、大きな悲しみと恥を味わった。神は侮られるようなかたではない。彼らは、御霊によって正されることを拒んだのだ。

次に私たちは、マサチューセッツ州スプリングフィールドに立ち寄った。ここでは「ロック・リモン」のキリスト者宣教同盟の教会で三回語った。ウィーバー姉妹の家に泊まった。彼女はたいへん裕福な婦人だった。牧師はカレン兄弟だった。彼は南アメリカで宣教師をしていたことがあり、スペイン語を流暢に話した。同盟はのちに、ソーテル兄弟をテキサスへ移し、そのあとを埋めるためにカレン兄弟をオレゴン州ポートランドへ遣わした。カレン兄弟は、のちにポートランドで溺れて死んだ。よい人だった。その最期はとても痛ましく思えた。

ベーマーと私は、数日休むためにピークスキルへ戻った。それから祈りの大会に出るために、西のミシガン州グランド・ラピッズへ行った。一晩じゅうカナダを汽車で走り抜け、無事にグランド・ラピッズに着いた。ここではノーブル姉妹のもとで、ペンテコステ・ホームに泊まった。私は大会で何度か説教した。しかし、大きな戦いがあった。彼らは、ペンテコステのあかしと体験に反対したのだ。神は、このために立つようにと、私をそこへ遣わしておられた。ある夜、私はあまりにひどい魂の産みの苦しみのために、寝台から床へ転げ落ち、寝台の下にまで入り込んだ。恐ろしい戦いだった。私はそこから逃げ出そうとして、次の汽車がいつ町を出るのかを駅に電話で問い合わせた。しかし、電話は話し中だった。待っているあいだに、電話のすぐ上に掛けてある聖句の額が目にとまった。そこには、『わたしの時はあなたのみ手にあります』と書かれていた。御霊は、私に罪を示して打たれた。去ってよいという確信は、私にはなかった。ただ、強い誘惑の下にあったのだ。私たちはとどまって、戦いを最後まで戦った。神は私たちに勝利を与えてくださった。しかし、この集会からは献金を受けなかった。

次に私たちはインディアナポリスへ行った。ここでベーマーは自分の時計を買った。同時に、私への贈り物として、もう一つ買ってくれた。私には時計が必要だったのだ。こうして主は、グランド・ラピッズで私が忠実に立ったことに報いてくださった。グランド・ラピッズでの荒野のような体験のあとだから、インディアナポリスでは神の力があふれ出るはずだ、という気がした。私はベーマーにもそう言った。はたして、それは来た。インディアナポリスでは、大会が開かれていた。私たちはそのことを知らなかった。招かれてもいなかった。しかし、主がそれを定めておられたのだ。

コプリー兄弟とブレルズフォード一家が、私たちより先に来ていた。主は私に、いくつものメッセージを与えてくださった。すばらしい時を過ごした。実際、これほどの神の力を感じたのは、久しぶりだった。すさまじい反対もあったが、神が勝利を与えてくださった。働きは二つの派に分かれていた。彼らは集会には一緒に来たが、和解はしていなかった。ある集会では、メッセージのあいだ、御霊があまりに力強く私に臨まれた。それで、反対の派の人々は、明け渡してしまわないように、座席にしがみつき、背中をこわばらせていた。これほど神の御霊に逆らうのを、私はめったに見たことがない。しかも、それがペンテコステの聖徒たちなのである。まったく恐ろしいことだった。ある夜、彼らは洗足式を予定していた。その夜は私がメッセージを語ったが、私が語り終えたころには、彼らは洗足式のことをすっかり忘れていたと思う。彼らは、神との関係を、

また互いの関係を正すのに忙しかったのだ。彼らの魂のほうが、もっと洗われる必要があった。

主は、インディアナポリスで私を大いに祝福してくださった。主に従ってそこへ行ったことを、私は本当にうれしく思った。私がそこにいたのは、純粋に主の招きによるものだった。それにしても、これほどすばらしい御霊の流れを、私はそれまでほとんど、いや一度も感じたことがなかった。説教していると、メッセージがまさに私から引き出されるようだった。人々の飢え渇いた願いに、壇から引きずり降ろされそうに感じたほどだった。思いが浮かんでくる速さに、話すのが追いつかなかった。早く話そうとして、つんのめりそうになった。ある集会では、私が語り終えると、主に打ち倒された者たちが床一面に横たわっていた。後ろにいる説教者たちを探すと、彼らもまた床に長々と横たわっていた。そのうちの一人は、足が椅子にからまっていた。それで、彼らが神の力の下に倒れたのだとわかった。私は人々のあいだを通って、ピアノのそばへ行った。神の力の下で、私のからだが揺れはじめ、私はピアノの上に倒れかかって、そのまま横たわった。それは、竜巻のような神の力の現れだった。私たちは、大きな勝利のうちに大会をあとにした。家を出てから、私は一文も受け取っていなかった。そして悪魔は、そのことで私をひどく誘惑していた。しかし主は、あとで埋め合わせをすると、くり返し私に保証してくださった。私には事情がわからなかったので、主の言葉をそのまま信じるほかなかった。それは私にとって初めてのことだった。しかし私は、神が語られたことを知っていた。

第六章　二度目の東部伝道（その二）

私たちはオハイオ州アライアンスへ進み、そこで聖書学校の学生たちに二回語った。次に立ち寄ったのは、ペンシルベニア州ビーバー・フォールズだった。ここでは、キリスト者宣教同盟で全部で五回説教した。責任者はロシター兄弟だった。前の年にも、汽車の乗り継ぎのあいだに、ここに立ち寄ったことがあった。このうえなく尊く、実りのある集会だった。私は、胃のひどい神経痛に襲われ、からだがたいへん苦しかった。説教しているあいだ、たいていは目の前の机につかまっていなければならなかった。力を入れるたびに、ナイフで突き刺されるように感じた。祈ろうとすると、悪霊どもそのものが、さらに痛みを加えて私を襲ってくるようだった。神は、ここの指導者たちをペンテコステの体験に導こうとしておられた。そして、地獄のすべてが、それに逆らおうとして動いた。二人はとても尊い働き人だった。とくにロシター姉妹は、主にあって深い人だった。私は、二人のために、そして自分のいのちのためにも、戦っているようだった。

ロシター兄弟は、たいへん活動的で、たいへん神経質な人だった。彼は静まることができなかった。私が説教していて、主が彼をとらえようとしておられるときにも、彼は換気などの世話をして走り回っていた。換気には何の問題もなかったが、彼はじっとしていられなかった。その癖は、神のほかにはだれも彼を解き放てないほど、身についてしまっていた。彼自身もそれをわかっていて、自分のために祈ってほしいと私に頼んだ。彼の頭はいつも働いていた。これほど神を妨げるものはない。とくに「バプテスマ」を求めて神を待ち望んでいるときはそうである。神が思いを占領されるには、その前に、思いが自分の働きや活動をやめなければならない。そして、まさにここで死が来るのである。いわば、私たちは「額に印をおされ」なければならない。私たち自身の活動は死ななければならない。主は、愛するロシター兄弟をとらえようとして、教会じゅう彼を追いかけられた。しかし、私たちがいるあいだには、彼をつかまえることがおできにならなかった。そのほかの点では、彼はこのうえなく恵まれた人だった。しかし、御霊は彼に対して、思いどおりに事を運ぶことがおできにならなかった。しばらくのちに、オハイオ州フィンドレーで大会を持った。そこの指導者はあまりに神経質だった。私が説教しようとしているあいだ、敵は彼を壇の上にひざまずかせた。そしてマッチをすらせたり、オルガンのペダルのひもを調べさせたりした。説教者が御霊から外れていると、悪魔は、集会がうまくいかないように、このうえなくばかげたことを彼にさせることができる。神はそこで働きを深め、その説教者を静まらせようとしておられた。しかし、それがおできにならなかった。

「肉」にある説教者とのことで私が味わった中で、たぶんもっともつらかったのは、ニューヨーク市のすぐ外で開かれた大会での経験である。そこには、各地を代表する聖徒たちの群れが集まっていた。ペンテコステの初めのころのことである。私の内にはメッセージが燃えていたのに、この説教者は、どうしても自分が説教すると言ってきかなかった。彼は黒板を使って、ただの統計を長々と説明し、人々をうんざりさせた。そのあいだ聖徒たちは、うめきながら、主からのメッセージを待っていた。彼が話をやめたときには、もう遅すぎた。大部分の人々は、早く帰らなければならなかったのだ。キリストの事業にとってのこの敗北のために、私は何か月も苦しんだ。何年かのちに、この集会にいた聖徒たちに出会った。彼らは、妨げられたあのメッセージを今も待っていると言った。彼らは、その時のための特別に大切なメッセージを聞きそこねたと感じていた。私は、あれほどの油注ぎを受けたことはめったにない。「私のメッセージは取っておける」と人が言うのを、ときどき耳にする。神が、その場にいる人々のために、そしてその時のために、あなたにメッセージを与えておられるとする。それなら、それは取っておくことができない。神が昔の預言者たちや使徒たちにメッセージを与えられたとき、それは決まった時に、決まった人々に告げられるべきものだった。今日も、務めにおいて神の御霊に導かれる、本当の主の使者につい

てはまったく同じである。メッセージは、時を逃さずに告げられなければ、失われてしまう。

説教者が「バプテスマ」を受けるのは難しい。彼らは、自分の能力や活動などの、あまりに多くのものに死ななければならないからである。「バプテスマ」は、自我をまったく廃業させてしまう。無になることは、彼らにはあまりに難しいのだ。彼らは、地位や生活の支えや評判などを失うかもしれない。しかし神は、いつも私たちのために、もっとよいものを持っておられる。御霊が私たちを取り扱い終えられたとき、私たちには神のほかに何も残らないだろう。しかし私たちの大部分は、神を信頼することができない。それで、自分の道を行き、自分で選んだ務めに就くのである。本当の神の僕となり、自分の計画を持たずに神の命令にひたすら従うこと。その道を歩もうとする人は少ない。代価が高すぎるのである。

このとき、ロシター姉妹は主にすばらしく訪れられた。主は、彼女がそれまで知らなかったほど深く彼女を占領しようとして、非常に深いしかたで彼女をとらえられた。しかし彼女は激しくもがいた。彼女は、同盟に対して死ななければならなくなるのを恐れていたのだと思う。彼女は恵まれた婦人で、神のためのすばらしい器だった。しかし、ただイエスだけに従うことは、たいへん狭い道なのである。ある夜、私たちは御霊によって一晩じゅう目を覚まさせられていた。だれも眠れなかった。御霊は、家の中を吹き抜ける風のようだった。私たちはみな、寝床の中で夜通し祈った。ベーマーと私は、ロシター夫妻の家に泊まっていたのだ。神は、二人がそれまで知っていたよりもはるかに大きなことのために、二人を求めておられた。二人がのちにどうなったのか、私は聞いていない。

ベーマーと私はニューヨーク市に戻った。私はピークスキルの家族を訪ね、それから再びニューヨーク市に戻った。スプリングフィールドで泊めてもらったウィーバー姉妹を、彼女に頼まれて訪ねた。彼女は、ニューヨーク市にも家を持っていたのだ。その前の日は一日じゅう、「神は真実なり（以下略）」という賛美歌の言葉が、耳に鳴り響いていた。グランド・ラピッズを去るとき、私はお金の面のことで誘惑されていた。そのとき御霊は私に、『あなたがたに必要なのは、忍耐である』と言われていた。ウィーバー姉妹に会いに行く前の夜、私は、その約束が果たされる時が近いと感じたようだった。ウィーバー姉妹は、私が西への旅で払った犠牲のことを何も知らなかった。その旅では、ほんの数ドルしか受け取っていなかった。インディアナポリスでは、私たちより先に来ていた働き人たちがお金を全部受け取った。私は、自分のふところから40ドルを払っていた。

ウィーバー姉妹に会いに行った朝、ベーマー兄弟は、私に50ドルを与えてくださるようにと主に求めていた。彼はこのころ自分の資産を持っていて、自分の費用は自分で払っていた。私もまた、主がウィーバー姉妹に語って、その額を私に与えさせてくださるようにと求めることを示された。私たちは、再びカリフォルニアへ向かう途中、サウスカロライナ州コロンビアへ出発しようとしていた。そして、手元にはほとんどお金がなかった。ウィーバー姉妹の家を去る前に、私たちはひざまずいて祈った。そのとき主は彼女に、私にちょうど50ドルを与えるようにと言われた。私の必要について、だれも彼女に一言も話していなかった。彼女はその額を私に手渡した。こうして主は約束を守り、この前の西への旅で私が使った運賃を返してくださった。しかし私は、信仰によって進んで犠牲を払い、それを返してもらうのを旅の終わりまで待たなければならなかった。

ニューヨーク市では、四十二番街ミッションで三回語った。それから、ニューヨーク州ナイアックのキリスト者宣教同盟の訓練学校へ行った。教師の一人で、私の知り合いのペンテコステの人が、今年もまたそこで語ってくれないかと私に尋ねた。そして私たちは二人とも、聖なる笑いにどっと笑い出した。御霊が、喜んでおられることをあかししてくださったのだ。このころには、学校の中の反対は大きくなっていた。私たちはナイアックからいくらか離れた所にいたので、彼は電話で集会の手はずを整えた。教師たちは不意をつかれた。もし神がお許しになっていたら、五分後には、彼らはその約束を取り消していただろう。私が壇に上がる前に、彼らは、私が何を説教するのかについて、厳しく検閲しようとした。それで私は少し縛られたが、主が勝利を与えてくださった。私は学生たちに語っていた。そして彼らは、飢え渇いた人々だった。その建物に泊まったあと、次の朝もまた語ることを許された。最後には、神が彼らの心に触れてくださった。私はニューヨーク市に戻り、「グラッド・タイディングズ会館」で四回語っ

た。主は私たちを大いに祝福してくださった。次に私は、家族をピークスキルからフィラデルフィアの兄ウィルの家へ連れて行った。そして年老いた両親に別れを告げるために、一人でミッチェナーへ出かけた。

それからベーマーと私は、大会に出るために、汽車でロードアイランド州プロビデンスへ向かった。ここでは私がおもな講師で、全部で十八回語った。苦しみの時だった。指導者は、何もかも決まったやり方で進めることを望み、私の霊をひどく妨げた。しかし私は、神に従わなければならなかった。私は宗教ごっこをしていたのではない。それくらいなら、農業を仕事にしたほうがましだ。人々はたいへん飢え渇いていたが、悪魔は私のメッセージを妨げようとした。主は、まさにこの状況について、前もって忠実に私に警告しておられた。

この大会で、私は不思議な経験をした。神は私の務めをすばらしく祝福しておられた。説教者や指導者たちが、各地からやって来ていた。メッセージは、彼らにとっておおむね新しいものだった。主があまりに尊く私を用いてくださったので、説教者に目を向ける人たちが出てきた。御霊は当然、このことをお許しになれなかった。ある午後、ロサンゼルスから来た講師の話を聞こうと、会場は満員になっていた。そのとき主は私に、ピアノの後ろの見えない所へ行って、集会の終わりまで座っているように言われた。人々がこの教訓を学ぶべき時だったのだ。そのころ私は、人々の前に出て説教するよりも、森へ行って祈っていたいと思うことが幾度もあった。私は人々にもてはやされることにうんざりしていて、彼らから離れ、主と二人きりでいるほうを好んだ。その午後にはメッセージがなかったので、人々の中には、私にひどく腹を立てた人もいた。しかし神は、ご自分のなさることをよくご存じだった。

私はこの大会から15ドルを与えてくださるようにと主に求めた。すると指導者は、そのことを何一つ知らないのに、私が発つ前に、封をした封筒に入れたちょうど15ドルを手渡してくれた。そこは小さな貧しいミッションだった。私はお金をむさぼっていたのではない。私が望んだのは、ただ、神のために働き、人々への祝福のために用いられる特権だけだった。しかし、家族をカリフォルニアへ連れ帰るためには、助けが必要だったのである。

私たちは、南のサウスカロライナ州コロンビアへ向けて出発した。ここでは、オリバー福音ミッションでパイク兄弟のために説教した。『ウェイ・オブ・フェイス』の事務所も、このミッションと結びついていた。私はここで、家族と一緒に少し休んで祈る機会を得た。私は長いあいだ『ウェイ・オブ・フェイス』に書いていた。とはいえ、集会はほとんど毎晩あった。この働きのための多くのとりなしが、私に与えられた。私たちの集会の多くは、おおむね神を待ち望むことに費やされた。

そして神は、すばらしいしかたで私たちに臨んでくださった。パイク兄弟自身も、これらの集会で大いに祝福された。彼はとても尊い神の子だった。私は、ある長老教会でも語った。また、ここにいるあいだに、私の小さな本『私の「後の雨」の物語』（今は絶版）の出版を手伝った。

私たちがここにいるあいだに、ミッションの働き人の一人がおたふくかぜにかかった。ベーマー兄弟と私は、彼のために祈るよう呼ばれた。南へ出発する前に、主は、この先に病気があることを私に示しておられた。しかしそのときは、それがわからなかった。私たちがコロンビアを去るとき、パイク兄弟は私に40ドルを手渡してくれた。それが、カリフォルニアへの道を開く助けになった。私は何年ものあいだ、報酬なしに『ウェイ・オブ・フェイス』に書いていた。実際、私は報酬のためにどんな新聞にも書いたことがない。給料のために説教することができないのと同じように、そういうことはできなかった。私たちは、神が与えてくださるものを受けるのである。私は宗教関係の新聞や雑誌に、五百五十もの記事を書いてきた。そのうち活字にならなかったのは、せいぜい五つか六つにすぎない。しかし、報酬のために書いたものは一つもない。私の労苦は、愛の労苦だった。『ただで受けたのだから、ただで与えるがよい』。

『ウェイ・オブ・フェイス』の編集者パイク兄弟は、私たちが彼のもとで開いた集会について、次のように書いた。「今、サウスカロライナ州コロンビアのゴスペル・タバナクルで、きわだった集会が行われている。この集会のきわだったところは、声に出す祈りと沈黙の祈りが長くささげられていることである。そして、神の臨在の並外れた現れが実感されていることである。F・バートルマン兄弟が導き手ということになっている。しかし彼は、聖霊に促されているとはっき

り意識しないかぎり、何も導こうとしない。それで集会は、まったく自由に、聖霊の導きに任されている。霊性の深さにおいて、このような集会がこれまでこのタバナクルで開かれたことがないのは、まったく確かである」。

パイク兄弟は、私のコロンビア訪問について再び書いた。あまりにほめた書き方なので、ここに載せるのをためらうほどである。彼は私のために、たいへん高い目標を立てた。彼は次のように書いた。「この二週間、私たちはバートルマン兄弟との交わりと彼の務めを楽しんできた。そして信仰を励まされ、これからの私たちの体験と働きにおいて大きな価値を持つ教訓を学んだ。天にたくわえられた祈りと、私たちのあいだにまかれた種とは、これから必ず、目に見える実を結ぶだろう。バートルマン兄弟は振る舞いが静かで、静かに祈りながら神を待ち望むことを強く求める。それをすぐに受け入れるのは、神との親しい交わりに慣れ、静けさの幸いを知っている人々だけだろう。神は、この施設のために、ご自分の臨在と力のきわだった現れを用意しておられる。ただしそれは、神がご自分の思うままになさることを許される場合である。私たちはそう確信している。そして、その多くは、行く先々に祝福を残していくこの献身的な兄弟のとりなしと感化によるだろう。

この神の人が『ウェイ・オブ・フェイス』とかかわりを持つようになった隠れたいきさつを、私たちは知らない。しかし、そのすべてが神から出たことだということを、私たちは少しも疑わない。彼は編集者の心にかなう人である。そして、彼とこの新聞とのかかわりは、時が満ちて神がもたらされたものだと私たちは確信している。神の臨在の重みがときに大きく彼にのしかかり、食べ物が少しも欲しくなくなる。そのため、彼はときどき節制が行き過ぎてしまうのかもしれない。それで彼は、やせ衰えてはいないにしても、しばしば弱々しく見える。神は彼に、とりなしの務めを大きくゆだねておられる。しかしまた、世界の至る所の聖徒たちに向けた、今の時のための特別なメッセージも与えておられる。それらのメッセージは、合衆国とカナダの各地で生の声によって語られ、また新聞を通してあらゆる国の聖徒たちに届いている。私たちは、至る所の神の民の祈りに彼をゆだねる。どうかよく知っていてほしい。彼がこの国に迎えられたのは、このような時のためなのである」（J・M・パイク）。

これほど高い推薦に値するには、私がいつもどれほど足りないかを、たぶん私自身ほどよく知っている者はいないと思う。それでもここにそれを載せるのは、そのころ兄弟たちのあいだにあったすばらしい霊を示すためである。たとえ私たちが誤ったとしても、結局それは正しい側への誤りだった。私は何年かのあいだ、『ウェイ・オブ・フェイス』に定期的に書いた。長いあいだ、私の記事はほとんど毎週載っていた。

次に私たちはジョージア州アトランタに立ち寄り、そこでセクストン姉妹に心から歓迎された。主は、そこで私たちの務めを大いに祝福してくださった。ベーマー兄弟は、アルタモント聖書学校へ行くために、コロンビアで私たちと別れていた。彼はのちに、南部で自分の牧会の働きを始めた。彼がはっきりと神のための働きの場に入るのを助けられたことを、私たちはうれしく思った（今も彼は働きを続けている）。アトランタでは、恵まれた集会がいくつもあった。そこで幼いルースがおたふくかぜになった。どうやらコロンビアでうつったらしい。南へ出発する前に主が示しておられた病気とは、これだったのだ。幼いジョンにも、その症状が出はじめた。地獄が荒れ狂いはじめた。私は毎日二回説教していた。

ここでの私のおもなメッセージは、「バプテスマ」においてイエスが示されることだった。それは、神が八番街とメイプル通りで私にずっと語らせておられたのと同じメッセージだった。大きな危険は、人々が主よりも「異言」というしるしを拝むことだった。そうなれば、それを再び青銅のへび（「ひとかけらの青銅」）にしてしまう。何よりもまず、イエスでなければならない。聖霊はイエスを示されるのである。今では、ルースもジョンも、おたふくかぜにかかっていた。問題は、妻と私がそれを免れるかどうかだった。しかし私は、神に信頼して働きを続けた。

私は家族をここに残して、アラバマ州バーミングハムへちょっと足を延ばした。ここで、私のからだはひどく苦しみはじめた。私は認めようとしなかったが、どうやらおたふくかぜが私にも取りつきはじめていたようだ。バーミングハムでは激しい戦いがあった。そこでは、このうえなく尊い聖徒たちに何人も出会った。しかし、集会の中では、とても奇妙な霊がいくつか働いていた。責任者はピンソン兄弟だった。彼は尊い兄弟だったが、手一杯だった。どうやら悪魔

は、働きをだめにしようとしていたようだ。敵がいたにもかかわらず、私たちは、勝利と祝福をかなり得た。私のからだは激しく苦しみはじめた。私は病気だった。霊の戦いは、それまでに経験した中でもっとも厳しいものの一つだった。このために、私は霊においてひどく苦しんだ。そのうえ、天気もたいへん暑かった。

ここでは、非常に高い聖潔の境地にあると告白している人が多かった。しかし、そこには「自我」が多く、霊はたいへんかたくなだった。「聖潔」が麗しさを失うと、それに触れるのは恐ろしいことになる。バーミングハムで「ペンテコステ」に反対する人々のあいだでは、おおむねそういうありさまだった。信仰から離れた霊は、まったく悪魔的になりうる。しかも、聖潔の名においてさえ、そうなるのである。私はバーミングハムで十回説教した。

アトランタに戻ると、私たちはテキサス州ヒューストンへ向けて出発した。子供たちは、おたふくかぜから回復していた。私たちは夜、同じ線路の上を通った。何年も前、私が路傍伝道者としてモービルへ向かったとき、枕木を踏んで歩いた線路である。今度はプルマン寝台車だった（この汽車には、その種の車両しかなかった）。ニューオーリンズでは乗り継ぎまで何時間かあったので、そこのフランス人街を訪ねた。私たちは12月24日にヒューストンに着き、クリスマスにちょうど間に合った。その前の夜、汽車の中で、私におたふくかぜの症状が出はじめた。妻にも、それが出はじめていた。私たちはM・E・レイン兄弟の家へ行った。私は駅からトランクを受け取り、床についた。ちょうど間に合ったのである。私はそこで大会に出ることになっていた。

神はそこで、行き届いた世話をしてくれるすばらしい家を、私たちのために開いてくださった。これ以上ないほど親切にもてなされた。私は、それまでで最悪の病気の一つにかかった。私の苦しみは恐ろしいものだった。死にそうに感じた。あごがしっかりと固まってしまい、歯のあいだにナイフの刃も差し込めないほどだった。幸い前歯が何本か抜けていたので、なんとか栄養をとることができた。そうでなければ、ほとんど何も口にできなかっただろう。しかし、一週間ひどく苦しんだあと、私は回復しはじめた。妻はそれほどひどくなく、私の世話をすることができた。主は、私たちが泊まっていた家の家族を、うつらないように守ってくださった。彼らがあれほど親切にしてくれたのだから、彼らが免れるようにと、私たちは祈ったのだ。その家には子供が何人もいた。三週間後、私はまだとても弱っていたが、外に出られるようになり、大会の終わりに何度か語った。ここで私は、初めてE・N・ベル兄弟に会った。このとき私たちを家に泊めてくれたM・E・レイン兄弟夫妻の親切を、私たちは決して忘れることができない。

ヒューストンで病気をしているあいだに、私は『ウェイ・オブ・フェイス』に次の所感を書いた。開拓者であるペンテコステの伝道者の生活についてである。

「今日のペンテコステの説教者は、すきま風の入る古い会館で、生涯の大部分を過ごさなければならない。換気はこのうえなくひどい。それは、たえずからだをすり減らすということである。神経の緊張は、神経痛と慢性のうっ血をもたらす。たえず風邪をひき、働きすぎるからである。今日、この種の激しい働きをする人はあまりに少ないのだ。これは『生きた供え物』となることを意味する。伝道者は休む場所を見つけなければ、まもなく倒れてしまう。ほかの人々なら家族と共に過ごすことを楽しめるのに、伝道者は家族と離れていなければならない。そのことについては、まだ何も言っていない。そのうえ、人々が何も知らないことがほかに何百とある。旅の危険や、寝床や食べ物や気候などがたえず変わることである。また、霊の戦いについても、まだ何も言っていない。戦いのたびに敵対する霊の力が集中してくること、そして最上位の悪の力が、たえず恐ろしく押し迫ってくることである。人は、たえず持てる力のすべてを引き出されるのだ。働き人は、集会でひざまずいて祈り、床の上にいることがあまりに多い。それで、すきま風の入る会館の冷たい風が、たえずからだを吹きつける。今の働きでは、ひざまずかずにいることは難しい。実際、人はたえず、ひざまずき、うつぶせになって祈るように駆り立てられる。しかも一度に何時間もである。報酬はたいてい、費用を払ってもらう以上のものはほとんどない。伝道者は、たえず激しく使われる水路にすぎない。まもなくすり切れ、そうなると、しばしば捨てられてしまう。彼のただ一つの避け所は、天であるように思える。しかし、イエスはまもなく来られる。そのとき、私たちはもう何も必要としなくなるのだ」（F・バートルマン）。年老いてすり切れたペンテコステの馬は、あまりにしばしば、

道ばたに放り出される。そして弱った歯で、見つけられるかぎりの草をついばみ、やがて死によって、ようやく苦しみから解かれる。彼らは、もう役に立たなくなったあと、豊かな牧草地に放されて、残りの日々を楽に、心配なく終えるということは、ふつうはない。働きすぎと放っておかれたことのために、すでに多くの者が土の下に眠っている。

次に立ち寄ったのは、テキサス州サンアントニオだった。私たちのお金はすっかりなくなっていた。幼いジョンが、また重い病気になった。汽車の中で、悪魔がジョンを襲おうとしているという警告を感じたが、私はその思いを振り払おうとした。ジョンには、まだ病気の症状は何も出ていなかった。しかし、その夜、彼はひきつけを起こした。私たちは恐ろしい一夜を過ごした。ひざまずいて祈り、彼のいのちのために戦ったのだ。悪霊どもそのものが私たちを襲ってくるようだった。彼は流感とマラリアの両方にかかっていた。私たちはスメート兄弟夫妻の家に泊まっていた。ついにジョンは救い出された。

私はここで、全部で十回ほど説教した。背中がひどく痛み、おたふくかぜと暑さのために、まだ弱っていた。流感も私を襲っていた。私は天幕集会で説教したが、そこでは狂信が多く見られた。私のメッセージによって、三人の偽預言者が町から逃げ出した。悪魔は、まさにほえたけった。ここには多くの兵士が駐屯していた。私は小さなミッションで、この若者たちに何度か説教した。私は、ロサンゼルスまでの運賃を神に求めていた。祈りの中で激しく戦ったあと、遠くからお金の入った手紙が何通か届いた。それで私たちは、アリゾナ州フェニックスまで進むことができた。悪魔は、テキサスで私たちを殺そうと決めていたようだった。サンアントニオにいるあいだに、古いアラモの砦と伝道所を訪ねた。デイビー・クロケットが、最後の英雄的な戦いをした所である。

フェニックスまでは楽しい旅だった。リオ・グランデ川に沿って走ると、向こう岸にメキシコが見えた。私たちはエルパソを通り、フェニックスで温かく迎えられた。私たちはひどく疲れていて、そこからロサンゼルスまでの運賃を持っていなかった。フェニックスの人々は、私たちにとても親切にしてくれた。私が祈っているあいだに、ある姉妹が私たちのために部屋を探しに行ってくれた。まもなく私は、彼女が私たちに必要なものを見つけたというあかしを受けた。はたして、彼女はまもなく戻って来た。自炊のできる部屋を、私たちのために確保してくれたのだ。私たちは、スカル兄弟の営む小さなミッションで集会を始めた。私たちはそこに三週間近くいた。私は毎日二回、日曜日には三回語った。とはいえ、説教しているよりも、祭壇の前で過ごす時間のほうが長かった。主は、たいへん深いしかたで私たちに臨んでくださった。

初めは、悪魔との厳しい戦いがあった。ある夜、だれかが窓から石を投げ込んだ。石は、ちょうど私たちの頭の上を通り過ぎた。私たちは祭壇の前で、一人の哀れな酔っぱらいと一緒に祈っていたのだ。悪魔は、自分の僕を失いたくなかったのである。実際、悪魔は、ここで私に反対させるために、カリフォルニア州パサデナから一人の説教者をはるばる送り込みさえした。こうして敵は、私がカリフォルニアに戻るのに反対しようと、州境に着く前に私を迎え撃ったのだ。しかし、神が勝利を与えてくださった。

フェニックスで、幼いジョンがまた重い病気になった。私は一晩じゅう祈りの中で、彼のいのちのために戦った。このころには、私自身もひどく疲れ果てていた。ここで、パサデナまでの運賃のお金が与えられた。カリフォルニアではそこに住むようにと、主が私に示しておられたのだ。私たちは、1909年2月26日に無事にそこに着いた。私たちは、どこへ行けばよいかわからないまま、住む家を求めて祈っていた。私は聖徒の一人に、帰ることを短い手紙で知らせておいた。駅では、マザー・ウィートンとクレアリー兄弟が出迎えてくれた。ウィノナ・アベニュー786番地に、新しいペンテコステ・ホームが開かれたばかりで、彼らは私たちをそこに入れてくれた。こうして神は、私たちが前もって知らないうちに、再び備えてくださった。

私は、すっかり休むために、日曜日を二度過ぎるまで家にいた。それから、再び働きに飛び込んだ。なつかしいアズサ・ミッションを訪ねると、主が大いなる力をもって私に臨んでくださった。八番街とメイプル通りでも、主は私をすばらしく祝福してくださった。また、サウス・スプリング通り327½番地のアッパー・ルーム・ミッションも訪ねた。ある夜の11時30分ごろ、パサデナのウィノナ・アベニューで、もうすぐ家に着くところだった。そのとき、二匹の犬が近くの庭から私に向かって突進して来た。その犬たちは、すでに何人もの人にかみつ

いていて、凶暴で危ないと知られていた。飼い主は寝てしまっていた。奇妙なことに、ちょうど同じ瞬間に街灯が消えた。それは「やみの支配の時」だった。突然、地獄が私に向かって解き放たれたようだった。あまりに突然の思いがけない襲撃だったので、考えるひまさえなかった。しかし私は、思わずイエスの名を呼んで助けを求めた。たちまち犬たちは、撃たれでもしたかのように、私から逃げ去った。同じ瞬間に、通りの明かりがまたついた。不思議な偶然だった。悪魔が犬たちをけしかけたのだと、私は確信している。どうやら悪魔は、なんらかの方法で明かりも消させたようだ。しかし、神が救い出してくださった。

　こののち、ロサンゼルスでもハーモンでも、説教するとき、主はすばらしく私に臨み、祝福してくださった。とくにアッパー・ルーム・ミッションでは、主はしばしばその愛によって私を砕かれ、私は子供のように泣いた。ここの指導者は、私にひどく反対した。彼の霊は、おおむね砕かれていなかった。そして彼は、私を弱い者だと思っていた。あるときなど、私の頭がおかしいとほのめかしさえした。しかし彼は、神の愛を理解していなかったのだ。偉大な伝道者チャールズ・G・フィニーは、かつてこう言った。「もしあなたに神の御霊が多くあるなら、多くの人から気が狂っていると思われることになりかねない。そう判断されることを覚悟しなければならない。あなたがこの世を超えて生き、神と共に歩むほど、ますますそうなるのである」。

第七章　ハワイ訪問、キラウエア火山

ある夜家に帰ると、ホノルルからの手紙が私を待っていた。しばらく前から、私はハワイの島々に心を引かれていた。毎日、パサデナのホームの裏の山すそを眺めていると、何かが私に「ハワイ諸島」と語りかけるのだった。私は、この山すそに似たハワイの写真を見たことがあった。手紙は、見ず知らずの人から来たもので、私にはまったく思いがけないものだった。それを見たとき、開ける前からすぐに、そこへ来るようにという招きだと感じた。中には165ドルの小切手が入っていた。生涯で、一度にこれほどのお金を受け取ったことはなかった。はたして、それはヘンリエッタ・ナズム姉妹とそこの聖徒たちからの、ホノルルへ来てほしいという切実な招きだった。人間的には、小さな家族を残して、海を越えてそれほど遠くへ行くのはためらわれた。しかし、それは神の声だった。私は背くことができなかった。

別れを告げるために、アズサ・ミッションと八番街とメイプル通りを訪ねた。アッパー・ルーム・ミッションでは、人々は私に行くのを思いとどまらせようとした。あくまで行くなら災いが起こると警告する人さえいた。しかし私は、神の声を知っていた。指導者も、私に行くのを思いとどまらせようとした。しかし私は、これよりずっと前に、ホーリネス運動の中にいたころから、苦い経験によって学んでいた。指示は、ミッションの指導者からではなく、神から受けなければならないのである。いつでも水を差そうと構えているような人々の言うことを聞いていたら、神のために何かを企てることなど、まずないだろうと思う。だれも、私たちの代わりに導きを受けることはできない。私たちは、自分で神から聞かなければならない。神からのそういう召しを自分も望みながら、それを受けていない人々がいる。そういう人々がねたんで、私たちの気をくじくことはとても多い。

私は家族を北へ連れて行き、オークランド近くのキャリー・J・モンゴメリー姉妹のホームに預けた。家族はそこで割引の食費で暮らし、私が島々から帰るのを待つことになった。帰ったらその地方で働くようにと、導かれているように感じた。私は家族のために一か月分の食費を払い、1909年5月15日にホノルルへ向けて船出した。航海は、めったにないほど穏やかだった。初めの二日は船に酔ったが、そのあとは酔わなかった。上陸する直前、船の上で、主はすばらしく私に臨んでくださった。主ご自身が、私を島々に迎えてくださったのだ。ホノルルでは、ハロルド・ハンセン兄弟夫妻の家に泊めてもらうことになっていた。その家に着いたときにも、御霊はまたすばらしく私に臨んでくださった。

大陸の「くず」（島々）も、「少しでもむだにならないように」集められなければならない。ハワイ諸島は、自然の楽園だった。熱帯の果物と木々の緑が、私を迎えてくれた。ハワイ人や朝鮮人、中国人や日本人がいたが、白人はごく少なかった。船旅は、私のからだにとても良かった。とはいえ、小さな家族から離れ、陸地を見ずに六日間旅をするのは、遠い道のりに思えた。家族からこれほど遠く離れたことはなかった。サンフランシスコから二千百マイルだった。ここからは、「南十字星」が空にはっきりと見えた。

私たちの集会では、神の力がすばらしく注がれた。会館はなく、私たちは聖徒たちの家で集まった。多くの人が大いに益を受け、信仰を新たにされた。私は船で、いちばん大きなハワイ島の風下側へ出かけた。モロカイ、マウイ、ラナイ、カホオラウェの島々のそばを通った。私はコナのカイルアで、そこに家を持っている宣教師のもとに泊まった。ヨーカム博士も、私より前にここを訪れていた。そこは中央アメリカと同じ緯度だった。私たち何人かは、ポルトガル人のカウボーイの案内で、馬に乗ってフアラライ山の頂上まで登った。高さ二千七百メートルの山で、まったく人の手の入らない草木のあいだを抜けて山腹を登ったのである。すばらしい旅で、眺めも壮大だった。いくつもの死火山の火口を訪ねた。私はホノルルから家族に、もう一か月分の食費を送った。

ホノルルに戻ったあと、もう一度ハワイ島へ出かけた。今度は風上側のヒロへ行った。そこは、たいへん悪のはびこる所だった。ここにいるあいだに、活火山のキラウエアを訪ねた。それはまさに、「火の池」、つまり地獄そのものの姿だった。私はこの火山について記事を書いた。そこから次の部分を抜き出して載せる。「私たちは日暮れに、ハワイ島キラウエアの『ボルケーノ・ハウス』に着き、歩いて火口へ向かった。火口は三マイル先の、深いくぼ地の中央にある。くぼ地の底は、直径七マイルの溶岩でできている。寒く、雨が降っていた。私たちは、崩れやすい砂の上を百メートルあまり下った。それから、ぎざぎざで荒くごつごつした、固い溶岩流の上を、とぼとぼと歩いた。遠くで、火口の毒々しい光がぎらぎらと輝いていた。大きな煙突のように、暗い空を背に炎を上げ、煙を吐いていた。あたりはこのうえなく気味が悪かった。道はぼんやりとしか見えなかった。私たちは、穴へ向かっていたのだ。

『まことにあなたは彼らをなめらかな所に置かれる』。『主がまだやみを起されないうちに、またあなたがたの足が薄暗がりの山につまずかないうちに、神に栄光を帰せよ』。私たちは、恐ろしい裂け目をいくつも越えた。地のふところにある苦しみの火が内なる争いを起こし、その激動が地を引き裂いたのである。下から熱風が吹きつけた。割れ目から、硫黄の蒸気が立ちのぼってきた。地全体が、『火でくつがえされるようにくつがえる』かのようだった。ついに私たちは火山に着いた。恐ろしい光景だった。『外のやみ』が、毒々しい火を取り囲んでいた。縁に近づくと、熱い空気が激しく吹きつけてきた。その深みから、息が詰まりそうな硫黄の煙が立ちのぼった。まさに『陰府の腹』だった。欠けているのは悪霊どもの姿だけだった。そして彼らも、近くをさまよっているようだった。土地の人々は、この火口を拝んでいる。

『地獄では、うじがつきず、火も消えることがない』。まさに『火で塩づけられ』ている。ここには、だれにも説明できない火があった。溶けたものがはね散るさまは、心を恐怖で打った。それらは、罪に対する正しい刑罰のように、洞穴のようなその穴の壁に激しく身を打ちつけた。しばらくのあいだだけ閉じ込められていると知っているかのようだった。それらは、生きている『永遠の火』のようで、えじきを待って落ち着きなくうごめいていた。『穴』そのものは、直径三百メートルある。その中に、火の池がある。陰気な影があった。激しく燃え立つ動きが、片時もやまなかった。そのために毒々しい光が、深い洞穴のような壁を照らし上げていた。まるで悪霊どもが、恐ろしい争いの中で互いに組み合っているかのようだった。そして、恐ろしい底知れぬ深みからは、息の詰まる硫黄の煙が雲となって立ちのぼった。煙は、切り立ったぎざぎざの絶壁の頂にまで達した。その絶壁が、さびしい囲いのむき出しの高みをなしている。これらすべてのために、それは見るも恐ろしい光景となっていた。人は、怒っておられる神のみ前にいるかのように、厳粛な思いで恐れに打たれて立ち尽くした。背後の暗い山の影も、夜の雨と身を刺す寒さも、すべてがその光景に恐ろしさを加えた。人は、シナイ山のモーセのように、『恐ろしさのあまり、おののいた』。

これらの火は、激動の力強い争いの中で、あの山々の峰を押し上げたのである。海面下三マイルから、海抜四千メートル近い今の高さまでである。『穴』そのものは、海抜千二百メートルにある。地の腹の中、太平洋のこの怪物のような煙突の下には、抑えようのない燃える物質がある。それがどれほど恐ろしい量でうねり、逆巻いているにちがいないことか。神の火は永遠ではないか。私は、悪しき者がたとえられている、『静まることができない』海の波のことを思った。地獄、すなわち『火と硫黄の燃えている池』には、休みがない。『その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼる』。『昼も夜も休みが得られない』。すべての要素が、そこにそろっていた。完全な姿だった。

二つの大きな流れ口、いわば噴き出す炉が、地下の深みから、何トンもの液体の火、溶けた世界の物質を、たえず注ぎ出していた。何十億トンもの物質が、生み出されているかのようにうねっていた。世界を造るわざが進んでいるようだった。創造の夜明けのときのように、全能者のかたわらに立っているように思えた。そのとき、もろもろの世界は神の命令のことばによって生じ、はるかな空間へと投げ出されたのである。しかし、何がこの火を起こしているのか。何がこれを燃やし続けているのか。その底知れぬ深みからは、何の答えもない。火は、答えることを潔しとしない。それは神なのである。

その音は、しゅうしゅうという音ととどろきとのあいだのようで、傷ついた蛇か獣の叫びのようだった。復讐を求めて叫んでいるように思えた。火は、たえま

ない内なる争いの力によって、意に反して閉じ込められている囲いの壁にぶつかった。ほとんど人間のような叫びを上げてである。そして、自由になろうとして果たせず、さらに激しく荒れ狂った。この火がひとたび解き放たれたら、人に何ができるだろうか。

あの火山の燃える波には、休みがなかった。波は、溶けた物質の力強い勢いで、この火の池の至る所で、夜も昼もたえず、十二メートルほどの高さに立ち上がった。そしてそのたびに、くじかれて再び落ちた。そのときには、遠い雷のくぐもったとどろきのような、胸の悪くなる恐ろしい鈍い音がした。牢獄の壁をよじ登れないことが、波をなおさら怒らせるようだった。壁に身を打ちつけると、その物質は冷えて、自分が生み出した岩にこびりついた。しかしそれは、波をいっそう閉じ込め、葬るだけだった。ほかの波は落ちて、耐えがたい熱と激しさの恐ろしい炉の中で、再び溶かされるだけだった。地獄からは逃れる道がない。絶望のさびしい囲いの中では、百万年たっても、その運命がいっそう確かになるだけである。

この溶岩の力強い流れは、池の向こう側にある地下の通路へと、たえず逆巻きながら流れ込んでいた。そしてなおも、あの火を養う二つの大きな炉は、真っ赤に焼けた溶けた物質を注ぎ続けていた。それは神のみがご存じの所から来て、神のみがご存じの所へと注いでいた。何か不可思議な恐ろしい力によって、たえまない火の流れとなっていたのである。その火を消すナイアガラはない。その苦しみは、たえまなく続く働きによって増すばかりである。自分で自分を養う火があり、『つきることのない』うじがある。『生ける神のみ手のうちに落ちるのは、恐ろしいことである』。

あの火口の火を、もてあそぶことはできなかった。土地の人々は、それをペレと呼ぶ。ペレは女だったという。彼女は、ほかの土地の女に夫を誘惑されて奪われた。ペレは島から島へとさまよい（あとに死火山を残しながら）、ついに怒りを抱いたままハワイ島に住みついた。土地の人々は、彼女を恐れている。彼らは彼女をなだめるために、自分たちの好きな飲み物であるジンを、瓶ごと投げ込む。それなら罪人は、『ねたむ』神を恐れるべきではないか。思い上がりは、速やかで確かな滅びを意味する。地のふところにある、この毒々しく不思議な火から、私は向きを変えた。あたりには、気味の悪い闇が棺おおいのように垂れこめていた。私は、ほとんど恐怖に近い畏れを感じていた。私は決して神をもてあそぶまい」（H・バートルマン）。

ホノルルからの帰りの航海は荒れた。私は家族のために、熱帯の果物を大きなかごに入れて持ち帰った。主は、私の留守のあいだ、家族を無事に守ってくださっていた。モンゴメリー姉妹のところのビューラ礼拝堂で何度か説教した。それからユカイア、サンタローザ、ヒールズバーグへ出かけて、いくつか集会を持った。神は力をもって私と共にいてくださった。それから、オークランドのバーニー・ムーアの天幕で五回説教した。次に、ウッドランドへ出かけた。ここで私は、ひどい苦しみと痛みの中でメッセージを語った。そこの聖徒たちは、特別な助けを必要とする状態にあった。そこに着いた晩、私は盲腸炎のひどい発作に襲われた。死ぬかと思われた。痛みは恐ろしいものだった。私は必死に主に叫び、主は私を救い出してくださった。しかし、胃のひどい神経痛と腹痛が残った。ほとんど食べられず、夜も眠れなかった。座っても、横になっても、歩いても、ひどい痛みがあった。それでも私は数日とどまって、メッセージを語った。私の訪問によって、その働きは、御霊を殺していた多くの行き過ぎから救い出された。しかし、それは私をも殺しかけたのである。

ストックトンでは恵まれた務めができた。ビューラとオークランドでもさらに何度か説教し、それから家族をサンタクルーズへ連れて行った。家族がそこで友人たちのもとに滞在しているあいだに、私はサンノゼへ行き、そこのペンテコステ・ミッションで六回説教した。主は大いに私を助けてくださった。聖徒たちは、ひどく分裂していた。私はミッションで、まる三日を祈りに費やした。私のメッセージは、愛と一致を求める訴えだった。

それから私たちはロサンゼルスに戻り、サウス・グレス通り163番地に住んだ。スループ姉妹のところにまもなく空く部屋があると、ある兄弟から聞いていたのだ。駅から彼女に電話すると、部屋はちょうど空いたところで、貸しに出されていた。主は、私たちの着く時をぴったり合わせてくださったのだ。神は私たちに来るようにと示しておられたが、どこに住めばよいのかは、私たちにはわからなかった。

ミッションはどこも、相変わらず教理にたいへん熱心だった。私は、八番街とメイプル通り、アズサ・ミッション、ハーモンで説教しはじめた。私たちが去ってから、アズサはひどく衰えていた。『ああ、勇士たちは、ついに倒れた』という言葉が、強く私の心に迫ってきた。しかしある晩、そこで祈っていた私たち三人の上に、御霊が力強く臨まれた。初めのころのように、再びアズサ・ミッションに力を戻すと、御霊は私たちに確信させてくださった。私たちは、祈り抜いたと感じた。（そして答えは、一年あまりのち、ダラム兄弟がシカゴから来たときに与えられた。そのとき、そこは短いあいだ、再び聖徒たちと神の栄光とで満たされたのである。）

私たちがロサンゼルスに戻ったころ、働きはおおむね悪い状態に陥っていた。ミッションどうしが争い合って、ほとんど身動きがとれなくなっていた。愛はほとんど残っていなかった。喜びはかなりあったが、それは肉によるものだった。冷たく、心のかたくなな熱心と人間的な熱狂とが、神の愛と御霊の優しさに、おおむね取って代わっていた。私は、こういうものに触れて、ひどく苦しんだ。主は、八番街とメイプル通りとアズサ通りでの私の務めを、引き続き祝福してくださった。いくつかのミッションでは、とくに指導者たちから、しつこい反対にあった。しかし私は、主から目を離さなかった。主は、説教する場所を得るためであっても、私がだれかの取り巻きになることを決してお許しにならなかった。人の僕であるなら、私たちは神に喜ばれることはできない。

1909年10月14日、妻はもう一人の娘ロイスを産んでくれた。神は恵み深く、彼女のために事をなしてくださった。このころ、私の務めはおもに、八番街とメイプル通り、アズサ・ミッション、ヒル兄弟のところに分かれていた。主は大いに祝福してくださった。私はまた、八番街とメイプル通りで毎週の聖書研究を始めた。そこでも、主は豊かに祝福してくださった。

本当の試練の時もあった。ときには、お金がすっかりなくなった。しかし神はいつも間に合うように来て、実際に苦しむことから私たちを救ってくださった。

あるとき、ガス代と家賃の支払いが重なった。私は、お金のないままパサデナへ行った。ある兄弟が、私を助けようかどうしようかと、心の中で迷っていた。しかし私は、彼のもとから立ち去った。悪魔が私を誘惑していた。しかし私は、人ではなく神に信頼しようと決めた。私は一文も持たずに家に帰った。寝る前に、別の兄弟が8ドルを家に持って来てくれた。それはちょうど家賃の額だった。主が持って行くようにと言われたので、背くことができなかったと彼は言った。しかも彼は、貧しい日雇い労働者だった。しかし彼は、神から報いを受けた。神は彼に、その十倍のものを、たやすく与えることがおできになったのである。

ほとんど毎晩、私は八番街とメイプル通りかアズサ通りにいて、説教するか、あかしをしていた。家賃と食べ物のことで、またつらい試練を通ったが、主が救い出してくださった。ホノルルの聖徒たちから、二度お金を受け取った。一度は10ドル、もう一度は15ドルだった。二度目のときは、幼いジョンが、お金のために祈ると自分から言い出したのだった。食べ物はほとんど尽きかけていた。ジョンはひざまずいた。そして、子供らしい素直さと祈りの信仰とで、私たちを恥じ入らせた。私たちは、ひどく誘惑されていたのだ。ジョンは私たちに、イエスに願えばお金を送ってくださるかと尋ねた。私たちに何が言えただろうか。もちろん、送ってくださるのだ。まもなく、ホノルルからお金が届いた。主は、ご自分で言っておられるとおり、私たちが呼び求める前に答えてくださっていた。『彼らが呼ばないさきに、わたしは答える』。このことは、ジョンの信仰を大いに強めた。『父なる神は、求めない先から、わたしたちに必要なものはご存じなのである』。もしそうでなかったら、主はしばしば、答えを私たちに間に合うように届けることがおできにならないだろう。

なつかしいアズサ・ミッションは、ますます束縛されるようになった。集会は今では、決められた順序どおりに進めなければならなかった。御霊は、何人かの貧しい、読み書きのできないメキシコ人を通して働こうとされた。彼らは救われ、御霊の「バプテスマ」を受けていた。しかし指導者は、わざと彼らにあかしをさせず、容赦なく押しつぶした。それは、神の御霊を殺すようなことだった。それがあの哀れなメキシコ人たちにとって何を意味したかは、神だけがご存じである。私自身は、そのような独裁の霊を身にまとうくらいなら、死んだほうがましだ。今では、どの集会も初めから終わりまで予定が組まれていた。災いが来ないはずはなかった。そして、そのとおりになった。

神から遣わされた多くの「預言者」が、ロサンゼルスで、からだの面でも霊の面でも殺されてきた。神はこの罪のために、指導者を次々に取り除かざるをえなかった。私は五年間、タイプライターのために祈っていた。ある姉妹が20ドルをくれたので、12ドル50セントで中古のものを買った。のちに私は、日記を書くために、これを持って世界を回った。

このころ私は、主のための伝道旅行で地球を一周するようにと、主が私を召しておられると感じはじめた。それは信仰によって行く旅で、当てになるお金は一文もなかった。何年も前から、この旅をする召しを本当に感じていた。そして今、その時が来たのである。人間的に見れば、そんなことを企てるのは狂気の沙汰に思えた。ちょうどそのころ、私はからだの面でもお金の面でも、たいへん厳しい試練に直面していた。しかし、その思いは確信に変わった。お金の面でのたいへん厳しい試練があった。10セント硬貨一枚を手に入れることさえ、ほとんどできないように思えた。そのあとで、主は私が出発できるように道を開いてくださった。神は、この旅に向けて私を吟味しようとして、このように試されることをお許しになったのだと思う。ついに道が開ける直前には、本当に飢え死にしそうに見えたほどだった。

医師のトラウト姉妹が、50ドルをくれた。妻が家賃のために引き出せるよう、銀行に預けておくためである。それから、『ウェイ・オブ・フェイス』の編集者パイク兄弟が、サウスカロライナ州コロンビアから25ドルを送ってくれた。これは世界一周に出発するために使うことになっていた。そして私は、この額を持って出発した。これはすべて、まったく頼んでいないのに与えられたものだった。それは、人間的には不可能な、とてつもない企てだった。この件について神のみこころを疑えないほど、神ははっきりと示してくださった。そうでなかったら、私はあえて一歩も踏み出さなかっただろう。そのうえ、世界を回るために、小さな家族を何の蓄えもないまま残していくのである。旅には、悪いことや災いの起こる可能性がいくらでもあった。しかも、一年近くも家を空けることになる。神が完全に導き、力づけてくださるのでなければ、それは肉の心には耐えきれないことだっただろう。

アズサ・ミッションでは、11ドルの小さな献金をくれた。私はこれを家族に残した。ほかのミッションからは何の助けも受けなかった。家族に残せたのは、それですべてだった。

世界一周に出かけようとしたとき、多くの聖徒たちが、やめるようにと私に警告した。もしあくまで思いを通すなら、私にも家族にも恐ろしい災いが起こると神が示された、と言う人たちもいた。しかし私は、神が私を召されたことを知っていた。私は神に従わなければならなかった。そして、従ったことで、私の務め全体を通しても最大の特権と祝福の一つを味わったのである。受け取った手紙のいくつかには、行間にかなりのねたみが読み取れるように感じた。ある姉妹は、主が私を遣わしておられるとは信じないとさえ言い切った。彼女自身がずっとそういう旅をしたいと望んでいたのに、主がそれをお許しにならなかったからである。当然、彼女の警告は私にはあまり重みを持たなかった。私はロサンゼルスから、1ドルも持たずに出発した。

私は1910年3月17日に家を出た。（私の世界旅行は、別の本として出版されている。読者にはそちらを見ていただきたい。『信仰による世界一周、聖地での六週間』、価格50セント。）私は信仰によって地球を一周し、その途中でヨーロッパと、おもな宣教地の大部分を訪ねた。パレスチナでは、楽しい六週間を過ごした。それから、エジプト、インド、セイロン、中国、日本を経て、ホノルルを通って太平洋を渡り、家に帰った。私は十一か月と一週間、家を空けていた。家族は神に十分に信頼した。そして、私が一緒にいたどの時よりも、よく養われた。私は、ポケットに1ドルほどを持って帰ってきた。妻は銀行に50ドルを持っていた。『あなたがたを召されたかたは真実であられるから、このことをしてくださるであろう』。

私が出発するとき、パイク兄弟はたいへん親切にも、私の旅について次の記事を『ウェイ・オブ・フェイス』に書いてくれた。「私たちは喜んで、バートルマン兄弟の個人的な手紙を掲載する。彼は、神の導きと信じるものに従って、世界一周の旅をしている。ペンテコステ運動の今の段階において、私たちの愛するバートルマン兄弟ほど、その務めが必要とされている人を、私たちはほかに知らない。彼の務めほど、これから助けになるものはない」（J・M・パイク）。私

は、この信頼の言葉をたいへんありがたく思った。また、『後の雨』の編集者も、次のように書いてくれた。「バートルマン兄弟は、イギリスへ船出する直前に、数日を私たちと共に過ごした。私たちの兄弟は、この運動の中で、聖書の教えと冷静な助言とによって、たいへん大切な位置を占めている。その助言は、嵐の中の船にとっての底荷のようなものである。自分を犠牲にするこの神の僕が、さらに先の地方へ出て行く。私たちは祈りと支えをもって、彼の歩みに付き添おうではないか」。

アルバート・ノートン兄弟は、インドのドーンドから『ウェイ・オブ・フェイス』に次のように書いた。「先月、ドーンドで、ダニエル・オーリー兄弟とフランク・バートルマン兄弟の訪問を受ける特権にあずかった。キリストのこの愛する僕たちは二人とも、バルナバのように『聖霊と信仰とに満ちた』人たちだった。そして二人は、ドーンドでもケードガーオン（ラマバイのところ）でも温かく迎えられた。ただ一つ残念だったのは、二人がインドにもっと長くとどまれなかったことである」（アルバート・ノートン）。オーリー兄弟と私は別々の船でインドに着いたが、神の摂理によって、着いたのは同じ時だった。

私が帰ってきたとき、パイク兄弟は『ウェイ・オブ・フェイス』に次のように書いた。「神は、私たちの愛する兄弟を守ってくださった。陸でも海でも、嵐の時も凪の時も、味方の中でも敵の中でも、不健康な環境と居心地の悪い宿の中でもである。読者も私たちと共に、へりくだって心から神に感謝するだろう。そのすべての中で、彼は健康を守られた。そして、神の導きのもとで果たされたその使命を、彼は全うしたと私たちは信じている。その使命の実は、数々の書物が開かれ、記録が読まれるときに、はじめて知られるだろう。必要が生じるたびに、それを満たすお金が手元にあった。それは、だれにも頼むことなく、祈りへの直接の答えとして送られてきたものである」（J・M・パイク）。この記事にある事実について、私自身、神にどれほど感謝しても足りないと感じている。

イギリスのサンダーランドのアレックス・ボディ牧師は、たいへん親切にも、『コンフィデンス』に次のように書いてくれた。「バートルマン兄弟は、最近の世界一周の旅によって、またその著作によって、多くの人に知られている。彼の生活は『信仰の生活』であり、あの世界一周の旅でも、必要はすべてすばらしく満たされた。しかし彼は、自分の境遇のことを決して口にしない。私たちは祈りによって彼を支えるべきである。彼はいつも父の仕事に携わっていて、自分のことは少しも考えない」（アレックス・ボディ）。

ここで私の世界旅行を述べることはできない（読者は別の小冊子を、いつでも私から手に入れることができる）。それでも、無事に帰ったときに私が『ウェイ・オブ・フェイス』に書いた言葉を、いくつか次に繰り返したい。「『天よりの啓示にそむかず』にいられたことを、私はとてもうれしく思う。出発する前に、私はいくつもの便りを受け取った。励ますものもあれば、気をくじくものもあった。祝福を預言する人もいれば、災いを預言する人もいた。しかし、それが私自身の想像や願いではなく、神の召しだと心の中で決めていたので、行くほかなかった。主が私を連れて回ってくださったのでないなら、だれがそうしたのか、私にはわからない。私は、裏から手を回すことは何もしなかった。旅費を約束した個人も集会もなかった。また私も、だれかやどこかの団体に約束をしたり、身をゆだねたりはしなかった。神が遣わしておられることを、私は知っていた。そして、神が最後まで連れて行ってくださると、完全に信頼していた。からだの面では、人間的に考えれば、半分も回らないうちに死ぬかもしれないと思う理由があった。しかし、私は人間的な力で行くのではなかった。

主はすばらしいしかたで、私を病気から守ってくださった。私は、コレラやペストや天然痘のはやる地方を通り、それにさらされた。また、熱病の地方を、一年でいちばん危険な時期に通った。しかし、主が私を守ってくださった。帰ってきたときの体重は、ここ何年かの体重より四キロ半ほど重かった。家族は留守のあいだ、まずまず健康に守られ、暮らしに必要なものも十分にあった。私は一文も求めず、献金を集めてほしいとも頼まなかった。すべては自発的に与えられたものだった。アメリカの岸を離れてから、アメリカから受け取ったのは、わずか50ドルだけだった。パレスチナでもインドでも中国でも、まったく思いがけない、ありそうもない所から助けが来た。神は、国内と同じように国外でも備えることがおできになると、証明してくださった。中国に着いたとき、私の手元には10ドルしかなかった。そこでは、アメリカから私にお金は届かなかった。私が訪れたのは、イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、オラン

ダ、ドイツ、ベルギー、フランス、スイス、イタリア、エジプト、パレスチナ、セイロン、インド、中国、日本である。帰る途中で、ホノルルに寄港した。1911年2月25日に家に着いた」。

第八章　ロサンゼルスのダラム兄弟

私が家に帰るちょうど一週間ほど前に、ダラム兄弟が、なつかしいアズサ・ミッションで集会を始めていた。彼は、ロサンゼルスのペンテコステの聖徒たちへのメッセージを携えて、主によってシカゴから遣わされた人だった。初めはアッパー・ルーム・ミッションで話を聞いてもらえなかったので、彼はアズサ通りへ行ったのである。シーモア兄弟は東部に出かけていて留守だった。ダラム兄弟が集会を始めると、聖徒たちはなつかしい場所に群れをなして戻ってきた。そして再びそこを、神をあがめる高らかな賛美で満たした。これこそ、一年あまり前に、祈っていた私たち三人に主があかししてくださったことだった。私は、ちょうどそれを見るのに間に合うように帰ってきたのだ。神は、昔のアズサの働き人の多くを、世界の各地から再びロサンゼルスに呼び集めておられた。明らかに、このためだったのである。多くの人が、これを「後の雨」の二度目の降り注ぎと呼んだ。日曜日には会場がいっぱいになり、五百人が入れずに帰された。人々は、席を取られるのを恐れて、集会と集会のあいだも席を立とうとしなかった。

これによって、アッパー・ルーム・ミッションは一夜にして崩れ去った。その指導者は、自分の特権を乱用し、聖徒たちをも虐げていた。ほかの点でも、彼は神を失望させていた。主は、やむをえないなら、どんな人もどんなミッションもなしで済ませることがおできになる。私たちは、自分の特権をいつまでも乱用し、神の預言者たちを滅ぼしておきながら、最後には何事もなく済むと望むことはできない。アッパー・ルーム・ミッションの倒れ方はひどかった。その指導者も、かつては神に大いに用いられたのである。しかし神は、別の場所と人とメッセージを用意しておられた。神は、ご自分の本当の群れを決してお見捨てにならない。「雲」は先へ進み、聖徒たちもそれと共に進んだ。

なつかしいアズサに、初めのころのように火が下りはじめた。私は、大きな関心と喜びをもってこれらの集会に出た。まだ続いていた八番街とメイプル通りでも、主は私を大いに祝福してくださった。パサデナのレイク・アベニューにある小さなメソジストの教会は、1905年に神がたいへん恵み深く働かれた所である。それは、このころにはすでにしばらく前から、ペンテコステの聖徒たちに譲り渡されていた。これを書いている今も、彼らがそこを使っている。

私が帰ってまもなく、私たちはロングビーチへ移った。家族には、グレス通りからの転地がどうしても必要だったのだ。私たちは、ショート通り323番地のすてきなレスト・コテージ・ホームに住むよう招かれた。家具付きで、浜辺のすぐ近くだった。

これは大きな楽しみだった。私たちは、これほどのものを、あえて主に求めることさえしていなかった。しかし主は、私たちにとても良くしてくださった。5月2日の午後、私はいつものようにアズサ通りへ行った。ところが驚いたことに、扉はすべて、鎖と南京錠で閉ざされていた。シーモア兄弟が東部から急いで戻り、理事たちと共に、ダラム兄弟を締め出すことに決めたのだ。しかし彼らは、あのなつかしい、力の揺りかごから、神と聖徒たちをも締め出してしまった。彼らが反対したのは、ダラムのメッセージだった。

私は一時的にコーラー通りミッションを借り、「雲」も私たちと共に移った。いや、「雲」が私たちをそこへ導いたのである。数日のうちに、ダラム兄弟は、七番街とロサンゼルス通りの角にある大きな建物を借りた。ここでは、日曜日には千人が集会に出た。平日の夜も、ふつう四百人の会衆がいた。ここに「雲」がとどまった。神の栄光がその場所を満たした。「アズサ」は、人が来なくなった。主は、大いなる力をもってダラム兄弟と共にいてくださった。神はとくに、確立されるべき今の時の真理に、ご自分の印を押される。ダラム兄弟は、信仰による救いの福音を説いた。彼は力強く用いられて、行いによる救いと信仰による救いとのあいだ、律法と恵みとのあいだに、はっきりした境界線を新たに引いた。これは、ペンテコステの人々のあいだでさえ、ぜひとも必要になっていたの

である。そして、今日の諸教会にも、ルターの時代とほとんど同じくらい切実に、そのような啓示と改革が必要であることは確かである。私たちの持っているのは、おおむねローマ化したプロテスタントなのだ。

ルターは言った。「全世界の手本によって固められ、長い習慣によって私たちの第二の天性となってしまった誤りを捨てることが、どれほど難しいか。それを私から学ぶがよい」。しかし、おびただしい人々が、ダラム兄弟の携えてきたメッセージを喜んで受け入れた。歴史家ドービニェは言う。「人々は、ルターの口から出るとこれほど明らかに見える真理を、どうしてもっと早く認めなかったのかと驚いた」。ダラムのメッセージについても同じだった。しかし、それはまた大きな反対にもあった。神から遣わされるどのメッセージに対してもそうするように、このメッセージを乱用する人々もいた。彼らは極端に走って、こう言い張った。あがないのわざは十字架の上で完全になしとげられたのだから、私たちが信じた瞬間に、私たちの内でも必然的に完成している、と。これは大きな誤りで、メッセージと働きをかなり妨げた。人は、神が与えられたメッセージに、いつも何かを付け加える。これが、メッセージの信用を落とし、それを滅ぼすためのサタンのおもなやり方である。ルターもウェスレーも、同じ困難と戦わなければならなかった。神が与えられたリバイバルは、どれもそうである。人は、極端に走るものである。メッセージはたいてい、敵からよりも味方から多く害を受ける。私たちは、この宝を「土の器」の中に持っているのだ。真理は、いつでも乱用されうる。ダラムのメッセージで自分を正当化するふりをして、聖潔の原理そのものと戦うところまで行った人々さえいた。しかし彼らは、そのメッセージを誤解していたか、あるいは、自分の心が従おうとしない原理と戦う口実に飛びついたかである。おそらく後者だろう。こうして彼らは、神が自分たちにもたらされたメッセージを乱用したのだ。

ロングビーチのレスト・ホームの持ち主が、それを売ることに決めたので、私たちは引っ越さなければならなくなった。7月1日、私たちは、パサデナのウィノナ・アベニュー786番地のペンテコステ・ホームに戻った。1909年に私がハワイへ行く前に住んでいた所である。本当は一か月早く移るはずだった。ところが、ある人々がその家を使っていて、神が彼らをサクラメントへ召されたのに、出て行こうとしなかった。彼らは神に従うのを拒んで私たちを入れず、周りのみなをひどく苦しめた。彼らは、のちに自分たちの誤りを認めた。こうして彼らは、自分たちへの主のみこころを取り逃がし、神の秩序から外れて、ひどく苦しんだ。そのうえ、ほかの人々をもひどく苦しめたのである。浜辺の家の持ち主は、私たちに立ち退くよう言い張った。しかし、私たちには行く所がなかった。神は、私たちがパサデナのホームにいることを望んでおられたのだ。自分が神を失望させているとき、それがどれほどほかの人々を苦しめているかを、私たちは決して知らない。主は、ロングビーチでの滞在を祝福してくださった。しかし今は、私たちがパサデナにいることを望んでおられた。

パサデナに着いてまもなく、私はひどい痔に襲われた。何日も寝込み、恐ろしい苦しみを味わった。熱心な祈りによって、主が救い出してくださった。私の神経はひどく痛めつけられた。それは、神経の中枢と脳に恐ろしい負担をかけた。幼いジョンも、ひどいひきつけを起こした。悪魔がジョンを殺そうとしたのだ。祈りによって、彼のいのちは救われた。悪魔は幾度も私のところに来て、実際に私と取り引きしようとした。私がそれほど厳しく悪魔を攻めないなら、私をもっと楽にしてやる、と約束したのである。しかし、私が悪魔とそのような取り引きをすることなど、断じてあってはならない。

1911年は、ロサンゼルスにとってすばらしい年だった。戦いは明らかに、行いと信仰とのあいだ、律法と恵みとのあいだにあった。アズサ・ミッションのころの、昔ながらの力と栄光の多くが、私たちに戻ってきた。ダラム兄弟のミッションで、私はとくに初めのころ、大いに自由と喜びを味わった。神は、このメッセージのために、前もって特別に私を備えておられた。私は、自分に頼ることの果てまで、すっかり連れて来られていたのである。救いを得る手柄として、行いが私の中で占める場所は、もはやなかった。『わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあって造られたのである』（エペソ二・一〇）。私たちは、神の力が私たちの上にとどまるように、再びへりくだるよう召されたのである。

私は、自我が自分の生活の中に生き残るすきを決して与えまいと固く決めていた。それで、このころ、五百通を下らない個人的な手紙を焼いた。アズサの初め

のころに、世界じゅうの指導的な教会の働き人や説教者や教師たちから受け取ったものである。どれも、当時私たちのただ中にあったリバイバルについて、熱心に問い合わせる手紙だった。問い合わせてきた人々の中には、たいへん高い公の地位にある人もいた。彼らは、さまざまな新聞や雑誌で、私のリバイバルの報告を読んでいたのである。しかし私は、これらの手紙が、いつか自分をひとかどの人物だったと思い込ませる誘惑になるのではないかと恐れた。問い合わせてきた人々の多くは、自分のために祈ってほしいと私に頼んでいた。ときには、これらの手紙を取っておけばよかったと思わないでもない。今なら、リバイバルが広く影響を及ぼしたことの歴史的な証拠として、たいへん興味深いものだっただろう。主は、この犠牲がなくても、私をへりくだらせておくことがおできになったにちがいない。しかし私は、少しの危険も冒すまいと決めたのだ。ダラム兄弟の時代に、私たちの心の中で再び始まった働きは、それほど深く、本物だったのである。

そのころの私たちが何よりも恐れたのは、自分の栄光を求めること、そしてペンテコステの体験が過去の歴史になってしまうことだった。実際、私たちは、リバイバルがイエスの来られる時までやむことなく続くと望み、信じていた。人が神を失望させさえしなければ、きっとそうなっただろうし、そうなるべきだったのである。しかし私たちは、たえず、信仰から離れた古い教会の考え方や形式や儀式へと、流されて戻っていく。こうして、悲しいことに、歴史はいつも繰り返すのである。今では私たちは、毎年のリバイバルを、骨を折って盛り上げなければならない。私たちは、日曜日には教会へ行き、などなど、「周囲の国びと（教会）とまったく同じように」している。しかし、初めはそうではなかった。アズサの初めのころには、聖徒たちをひざまずかせないでおくことなど、ほとんどできなかった。二人の聖徒が出会えば、必ず祈りはじめた。今日の私たちは、引きずって行かれても、なかなか祈ろうとしない。東方のらくだが、荷を受けるためにひざまずくときのように、祈ることに大騒ぎする人々もいる。らくだは、らくだ引きがひざまずかせるまでに、騒ぎ立て、かみつき、うめくのである。とはいえ、私は、日記を処分しなかったことをうれしく思う。ペンテコステの初めのころを通して書いた記事も処分しなかった。そこには、集会の報告や、世界の各地での経験などが書いてある。私は、活字になった記事を、一つ一つ五百から六百ほど保存してある。そのほかに、同じ働きの中で書いて出版した百を超えるトラクトもある。この本のために、私はこれらのものから、このうえなく確かな情報を、ばく大な量引き出すことができた。もしこれらを処分していたら、この本はたぶん書かれなかっただろう。少なくとも二十五年のあいだ、私は書いたものすべての中で、キリストのからだの一致のために労してきた。それらは、ヨハネ一七・二一の思いに満ちている。また私は、初めから、本物であることを訴えてきた。私の最初の記事の題は、「その生き方を生きよ」だった。二つめの記事は、「救いか、まねごとか」である。

主は、パサデナで、私たちの子供たちのために小さな私塾を与えてくださった。私たちは、子供たちを公立学校の影響の中に放り込むことを恐れていたのだ。尊いペンテコステの姉妹であるアンナ・パーマー姉妹が、私たちと一緒に住んで、子供たちを教えに来てくれた。彼女は、このうえなく誠実な人柄で、まったく自分を犠牲にする霊を持った婦人だった。また、特別な能力のある婦人でもあった。それは、彼女の側からすれば、主のための純粋な愛の労苦だった。近所の子供たちの何人かも、この機会を利用した。私たちは、神のこの特別なあわれみを、たいへんありがたく思った。

このころ、パサデナのレイク・アベニュー・ミッションで、御霊の力強い現れを経験した。ある日曜日の朝、集会で椅子に座っていると、神の力が私に臨んだ。主は、集会へ行く途中で、私に非常に大きなメッセージを与えておられた。そのときはアンセル・ポスト兄弟が話していて、みことばを解き明かしていた。彼の話は良いものだったが、特別な油注ぎはなかった。突然、主は、メッセージを語るようにと私に油を注がれた。ポスト兄弟が話していたので、私はためらった。御霊は、剣で突き刺すように私を貫かれた。私は椅子から持ち上げられた。私は声を限りに叫びながら床を走って横切ったが、また座った。話している人の邪魔をしたくなかったのだ。メッセージは、私を焼き尽くさんばかりだった。私はもう、ためらいすぎていた。神は、そのときにそれが語られることを望んでおられた。御霊は再び私を打ち、私を椅子から投げ出さんばかりにされた。そのとき私は、神に従わなければならないと悟った。私は立ち上がってポスト兄弟に話

しかけ、彼は快く私に譲ってくれた。私は大きな油注ぎのうちに、メッセージを語った。同じような状況で神に従わずに、私は幾度、神を失望させてきたことだろう。このときは、もし従わなければ、神が私を殺してしまわれるかのように思えた。私たちは、神を悲しませるよりも、人を悲しませることのほうを恐れる。そのような状況で神に従うには、多くの恵みが必要である。

この夏、私はダラム兄弟のミッションで多くの務めを果たし、多くの祝福を受けた。また、主が与えてくださった『預言の図表』という小冊子を書いて出版した。三千部で35ドルかかった。主がその費用を備えてくださった。9月に、私たちはウィノナ・アベニューからアルタディナへ移った。家はパイン通りにあった。ここで私たちは、パーマー姉妹を教師にして、毎日通う小さな学校を開いた。近所からもほかの子供たちが来た。ここでは、お金の面でたいへん厳しい圧迫を経験した。このうえなく熱心な祈りへの答えとして、ある姉妹が25ドルをくれた。私は、再び主の働きの現場に出て行きたいと、強く願うようになった。

サンディエゴにちょっと出かけ、九回説教して、大きな祝福があった。それから船でオークランドへ行き、そこでいくつか集会を持った。かなりの祝福と益があった。そこからストックトンへ行って二回説教したが、そこは難しい畑だった。霊が深くなかったのだ。家に帰ると、私は再びダラム兄弟のミッションで働いた。

ダラム兄弟への反対は激しく、ついに彼は、やり返したいという誘惑に駆られた。彼がひどく挑発されていたのは確かだが、私には、それはキリストの御霊ではないと感じられた。たぶん、このような試練にうまく耐えられた人はほとんどいないだろう。私は、仕返しの霊を容認する気になれず、ついに講壇から退いた。肉の争いや論争からは身を離していなければならないと感じたのである。しかし主は、愛するダラム兄弟をすばらしく用いてこられた。彼は、神からロサンゼルスに遣わされた人だった。たぶん、彼の働きは終わったのだろう。それ以上長くとどまっていたら、彼の勝利はだめになっていたかもしれない。彼の言葉は、遠く大西洋岸に至るまで、ペンテコステのミッションでほとんど法のようになりつつあった。彼が働きの一環として始めた新聞は、とくに肉の論争の性格を帯びはじめ、古い「第二の恵みのわざ」の説と戦うようになった。主は、この霊をまもなく止めようとしておられると、私に示された。また、あまりに大きな力は、だれであれ一人の人にとって危険なものである。

ダラム兄弟は、亡くなるしばらく前に、この働きについて次の所感を書いた。それはきわめて大切なものなので、私たちはここに載せるよう導かれていると感じる。「今、大きな危機が来ている。人々は、今のペンテコステ運動の中にある神のご計画を見ていない。まったくの大変革が必要であり、それが彼らをたじろがせている。彼らは、骨を折って築き上げてきたものが倒されるのを見たくないのだ。しかし、神のご計画が実行されるには、その前に、人の計画が退けられなければならない。神が人の計画をすべて退けて、ご自分の計画に従って働きはじめておられること。それを、彼らは見ていない。神は、非常に多くの人々に、ご自分の本当のご計画を示しておられる。それで彼らは、今の働きが一つの教派に変えられることに決して同意しないだろう。神の民は、二度と人間の組織のわなに導かれはしない。

神は、イエスが栄光をお受けになるように、再びご自分の御霊を注がれた。過去の運動はみな、一人か何人かの人を名誉ある地位に押し上げる結果に終わった。今の運動は、イエス・キリストをあがめ、高めるだろう。聖霊はいつも、イエスとその尊い血とを高められる。イエスが高められ、忠実に宣べ伝えられるにつれて、神は昔ながらの力を回復させておられる。しかし、それはまだすべて回復されてはいない。人々は神のご計画を見ていないので、条件を満たしていない。そのために、神が彼らのために持っておられるものの多くを、まだ受けていないのである。多くの人が、神より先に走ってしまった。

神が私を満たしてくださってまもなく、ある朝、神の御霊が力強く私の上にとどまられた。そして神は私に言われた。『もしあなたが十分に小さくさえあれば、わたしはあなたを用いて何でもできるのだが』。小さくなりたい、いや、無になりたいという大きな願いが、私の心に起こった。しかし、神が本当に私を通して働かれるほどに低くとどまっているのは、ああ、なんと難しいことだっただろう。そして神は、私が自分の目に小さく、神の足もとで本当にへりくだっているときにだけ、本当に私を用いてくださる。私が何かをしなければならないと感じると、神はいつも、私が失敗するままにされる。しかし私は、神の足もとにと

どまり、自分は無で、神がすべてであると感じることがある。そうしてただ神に信頼していると、神は実に美しいしかたでご自分のわざをなさる。それは私にとって驚くべきことである。

神は、何かほかのものを築き上げようとしておられるのではない。人のために、彼らを偉く力ある者にするようなことをしようとしておられるのでもない。むしろ、すべての人を無にして、聖霊の力によって働きをなそうとしておられるのである。今、神がご自分の民に呼びかけておられるのは、へりくだることである。自分の弱さと力のなさを認め、神の前にひれ伏し、神の力が回復されるまで待つことである。大きな問題は、人々が神のご計画を見て、それに明け渡すかどうかである。人々は、へりくだってイエスの足もとにひれ伏し、イエスがペンテコステの満ちあふれる力を回復してくださるまで、祈って待つだろうか。それとも、イエスより先に走り続け、最後には失敗するのだろうか。

至る所にいる神の民が、神のご計画を見て、深く本当のへりくだりのうちに求めはじめるように。そうすれば神は、ご自身とご自分のご計画とを、彼らに示してくださるだろう。本当の神の力を受けている一人の人は、自分の考えで出て行く千人よりも多くのことができる。神と、神の今の時のメッセージとに対して、真実で忠実な人々だけが、この大いなる勝利にあずかるだろう。本当にへりくだり、試練に耐える一団の人々を、神はご自分の働きをするために用いられるだろう」（W・H・ダラム）。実際、人が本当に人に知られないことを愛するようになる。説教したいとも思わず、講壇の上よりも後ろの席に座るほうを好むようになる。そのとき初めて、神はその人を引き上げて用いることがおできになる。それより前には、まずできないのである。

このころ、サウス・スプリング通り327½番地の、あのアッパー・ルームが再び開かれた。ウォレン・フィッシャー兄弟とマンリー兄弟とアレン兄弟が指導した。ある日曜日、私がそこでメッセージを語ると、二人が「バプテスマ」を受けた。神はすばらしく私に油を注いでくださった。主の臨在がとても近くにあった。私は、主にしるしを求めていたのだ。それで私は、務めの場をアッパー・ルーム・ミッションに移した。ダラム兄弟のミッションでは、事情が変わりつつあるようだった。私が講壇から退いてから、彼は私を信用しなくなったようだった。たぶん、私が彼に逆らって動くと思ったのだろう。私はこのころ、アッパー・ルーム・ミッションで何度も語った。そこで主は、私を大いに祝福してくださった。このすぐあと、ダラム兄弟は大会を開くためにシカゴへ行った。冬のことで、彼はそこで風邪をひいた。そしてロサンゼルスに戻ったあと、そのためにまもなく亡くなった。シカゴで、彼はすばらしく用いられた。

このころには、主は、家族と共に再び働きの場に出て行くようにと、はっきりと私に語っておられた。私は、ヨーロッパに強く心を引かれた。1910年にヨーロッパを通ったときに、このことについて確信を与えられていたのだ。その時が来たのである。主はこの目的のために、私たちのために、目に見えるしかたで人々の心に触れはじめてくださった。もっとも、お金の面の助けは、それまでいつもそうだったように、不思議なことに、ほとんどすべてロサンゼルスの外から来た。ストックトンのある兄弟と、パサデナのある姉妹（ペンテコステの人ではない）が、最初の立ち寄り先デンバーまでの運賃を出してくれた。神は、どのミッションや団体にも、団体として私たちを送り出させることをお許しにならなかった。そして、たぶんそのほうがよかったのだ。今日はうまくいっていても、明日には彼らとのあいだで、まったくあべこべの立場に置かれているかもしれない。だから、少なくとも神を仰ぐほうがよいのである。海外の宣教地にいる気の毒な宣教師たちは、大部分のミッションとの関係で、自分がどういう立場にあるのかほとんどわからない。次の手紙がやりとりされるまでに、教理の状況がすっかり変わっているかもしれない。それどころか、その会がすっかり解散しているかもしれないのだ。彼らには、私たちの同情と祈りが必要である。神の民は、いつになったら、イエスが約束されたとおりに、「ひとりの羊飼」であるイエスのもとで「一つの群れ」となるのだろうか。今こそ、イエスが祈られたように、『みんなの者が一つとなるためであります。それによって、世が信じるようになるためであります』と祈るべき時である（ヨハネ一七・二一）。

私たちは、それまで幾度もしてきたように、わずかな家財をすべて手放して、ロサンゼルスを去った。そして、もう一度、働きながら大陸を横断しはじめた。今度は、ヨーロッパへ向かう途中だと私たちは信じていた。お金は、ちょうどデンバーまで行ける分しかなかった。しかし、その記録は、別の小冊子『世界大戦

直前のヨーロッパにおける二年間の伝道、1912年から1914年』として、すでに出版されている。そこには、イングランド、スコットランド、ウェールズ、オランダ、スイス、フランス、ドイツ、ノルウェー、スウェーデン、フィンランドでの働きが書いてある。また、帝政ロシアそのものでの働きもある。そこでは、ほとんど皇帝のお膝元でありながら、私はひそかに説教しなければならなかった。さらに、世界大戦の最初の数週間のことも生々しく書いてある。私たちがヨーロッパを出る前のことで、この戦争のために、私たちはついに戦地を通ってアメリカへ追い返されたのである。読者には、その小冊子を手に入れていただきたい。価格は30セントである。私たちは、そんなに早くアメリカへ戻りたくはなかったが、家族の安全のために、そうせざるをえなかった。そのうえ、諸国のあらゆる努力は、今や、自国の民の心を憎しみと殺意で満たすことに向けられるようになった。福音の精神の入る余地は、どこにもないように思えた。山上の説教は、「戦争の神」の教えと、まったく何の共通点もない。戦時には、敵を憎み、のろい、殺すためにできるかぎりのことをするよう求められる。敵を愛することなど、決して求められはしない。しかし、ほかの人々がそうしたいなら、そうさせておけばよい。私にとっては、福音は平和の時も戦争の時もまったく同じである。『イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない』。

カリフォルニア州ロサンゼルス、1925年４月。

ペンテコステはいかにしてロサンゼルスに来たか

2026年11月23日版
著者　フランク・バートルマン
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/how-pentecost-came-to-los-angeles/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/how-pentecost-came-to-los-angeles
全文を、原文（How Pentecost Came to Los Angeles）から AI を使って翻訳しました。
訳文は CC0 1.0 で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。